

五里山古墳群第5次発掘調査報告

2009. 3

東大阪市教育委員会

五里山古墳群第5次発掘調査報告

2009. 3

東大阪市教育委員会

はしがき

今回の調査では、所在が不明、未確認であった古墳6基と弥生時代の竪穴住居、鎌倉時代以降の遺構・遺物を検出しました。

古墳は、五里山古墳群の構成、古墳の築造状況、石室の追葬・再利用状況などを知ることができました。

本書の内容は、地域史解明の一助になるものと思っています。

現地調査および遺物整理・報告書作成にあたってご協力・ご教示を賜った関係諸機関・諸氏に感謝するとともに、今後一層のご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。

平成21年3月

東大阪市教育委員会

例　　言

1. 本書は区画整理事業に伴う五重山古墳群第5次発掘調査の概要報告書である。
2. 調査地は大阪府東大阪市上四条町1170番1ほか2筆、上六万寺町1744番2ほか30筆、里道、水路である。
3. 本調査は上六万寺町地区・上四条町地区上地区区画整理事業共同施行者代表　菊田重和の依頼を受けて、東大阪市教育委員会文化財課が実施した。
4. 調査にかかる費用は依頼者が負担・用意した。
5. 発掘調査は平成20年3月10日から3月18日までと4月15日および4月25日から7月4日まで発掘調査を行ない、遺物整理および報告書作成作業は平成21年3月31日まで実施した。
6. 調査は若松博志が担当し、遺物整理については武田雄志が行なった。
7. 石棺の石質については大阪市立自然史博物館の川端清司氏に依頼し、報文を賜った。
8. 遺物写真はエイチ・エス写真技術株式会社に委託して実施した。
9. 本書はI・IIおよびVを若松、IIIを若松（構）・武田（出土遺物）、IVを川端が執筆し、若松が編集した。
10. 現地の上色及び土器等の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財團法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』（2000年版）に準拠し、記号表記もこれに従った。
11. 調査及び報告書作成にあたっては下記の方々のご協力・ご教示を賜った。記して謝意を表します（敬称略・順不同）。
菊田重和、株式会社島田組、株式会社アコード、大阪府中部農と緑の総合事務所、白石太一郎、堀田啓一、藤井直正、原田修、松田順一郎、中西克宏、竹谷俊彦、森瀬正之、櫻尾茂樹、大野剛正、伊藤薫、長谷川透、北森さやか、佐藤隆春
12. 遺物整理・報告書作成には下記の方々の参加を得た。
石割典子、小林晴香

本文目次

I. 調査に至る経過	1
II. 位置と環境	3
III. 調査の概要	5
1. 調査の方法と既存古墳の概要	5
2. 導入部の調査と旧菊水学園グランド確認調査	9
3. 3号墳	10
4. 5号墳	18
5. 3・5号墳間	25
6. 6号墳	28
7. 7号墳	44
8. 10号墳	50
9. 8号墳	60
10. 8号墳周辺	64
11. 9号墳	67
IV. 五里山古墳群第5次発掘調査で出土した石棺片の石質について	72
V. まとめ	74

挿図目次

第1図 調査地および周辺図	1
第2図 遺跡周辺図	3
第3図 古墳分布位置図	5
第4図 1号墳石室内遺物出土状況図および出土遺物実測図	6
第5図 2号墳石室および出土遺物実測図	7
第6図 4号墳出土および旧菊水学園保管遺物実測図	7
第7図 導入部調査地平面および断面実測図	9
第8図 3号墳第1次調査石室内遺物出土状況実測図	10
第9図 3号墳墳丘測量実測図	11
第10図 3号墳石室実測図	12
第11図 3号墳第1次調査出土金属器実測図	13
第12図 3号墳第1・2次調査等出土遺物実測図	14
第13図 3号墳出土遺物実測図（1）	16
第14図 3号墳出土遺物実測図（2）	17
第15図 5号墳周濠断面実測図	18

第16図	5号墳平面および断ち割り断面実測図（折込）	19・20
第17図	5号墳墓坑内埋土断面実測図	21
第18図	5号墳・SK I・SK 8出土遺物実測図	23
第19図	SK I平面実測図	25
第20図	3号墳羨道前部から5号墳周辺平面実測図	26
第21図	3・5号墳間主要構造断面実測図	27
第22図	6号墳墳丘北外理上状況断面実測図	28
第23図	6・10・7号墳平面実測図（折込）	29・30
第24図	6号墳石室内埋土断面実測図	31
第25図	6号墳石室実測図	32
第26図	6号墳平面および断ち割り断面実測図（折込）	33・34
第27図	6号墳石室内敷石状況実測図	35
第28図	6号墳出土遺物実測図（1）	38
第29図	6号墳出土遺物実測図（2）	39
第30図	6号墳出土遺物実測図（3）	40
第31図	6号墳出土遺物実測図（4）	41
第32図	6号墳出土遺物実測図（5）	42
第33図	7号墳石室内埋土断面実測図	44
第34図	7・10号墳平面および断ち割り断面実測図（折込）	45・46
第35図	7号墳石室内敷石状況実測図	47
第36図	7号墳出土遺物実測図	48
第37図	10号墳石室内埋土断面実測図	50
第38図	10号墳石室残存部平面・側面実測図	51
第39図	10号墳石室左側壁据付状況図	51
第40図	10号墳石室内敷石状況実測図	52
第41図	10号墳出土遺物実測図（1）	55
第42図	10号墳出土遺物実測図（2）	56
第43図	10号墳出土遺物実測図（3）	58
第44図	10号墳出土遺物実測図（4）	59
第45図	8号墳平面実測図	60
第46図	8・9号墳間平面実測図（折込）	61・62
第47図	8号墳石室・墓坑平面・側面実測図	63
第48図	8号墳石室・墓坑内埋土断面実測図	63
第49図	SK II・12断面実測図	64
第50図	SK II土器類群出土状況および下部土坑平面実測図	64
第51図	8号墳周辺出土遺物実測図	65
第52図	9号墳石室平面および遺物出土状況実測図	68
第53図	9号墳石室底面木棺跡平面・断面実測図	68
第54図	9・10号墳出土遺物実測図	69
第55図	弥生時代後期竪穴式住居跡平面実測図	70

第56図	二上層群ドンズルボー塗層下部層の分布	73
第57図	3号墳羨道前部から9号墳平面実測図(折込)	75・76
第58図	5、6、10、7号墳墳丘断ち割り断面状況模式図	77

表 目 次

第1表	五里山古墳群古墳一覧	27
-----	------------	----

図 版 目 次

図版1 遺構	1. 調査地周辺航空写真(1942年) 2. 調査作業風景(東より)
図版2 遺構	1. 調査前状況(南東より) 2. グランド調査前状況(南より) 3. グランド内調査トレンチ(南より)
図版3 遺構	1. 導入部機械掘削後状況(北東より) 2. 導入部調査トレンチ完掘状況(南東より) 3. 導入部調査トレンチ北東断面(南西より)
図版4 遺構	1. 3号墳調査前状況(南東より) 2. 3号墳羨道部遺物出土状況(南西より) 3. 3号墳羨道部石棺片出土状況(南東より)
図版5 遺構	1. 3号墳羨道部馬具片出土状況(南より) 2. 3号墳羨道部側壁石抜き跡状況(南西より) 3. 3号墳前面より全景(南西より)
図版6 遺構	1. 3～5号墳間遺構検出状況(東より) 2. 3～5号墳間遺構完掘状況(東より) 3. 3～5号墳間遺構完掘状況(南東より)
図版7 遺構	1. SK I上器出土状況(北西より) 2. SK 8畔断面(南西より) 3. SK 3・4・5断面(北西より)
図版8 遺構	1. 5号墳墓坑検出状況(南西より) 2. 5号墳墓坑完掘状況(南西より) 3. 5号墳墓坑内アゼ断面(南西より)

- 図版9 遺構** 1. 5号墳完掘状況（南西より）
2. 5号墳完掘状況（南西より）
3. 5号墳断ち割り断面（南西より）
- 図版10 遺構** 1. 5号墳墳丘上土器群2（南西より）
2. 5号墳墳丘上土器群3（北東より）
3. 5号墳周濠畔断面（北東より）
- 図版11 遺構** 1. 6号墳調査前状況（南西より）
2. 6号墳機械掘削後状況（北西より）
3. 6号墳横穴式石室内中世面検出状況（北東より）
- 図版12 遺構** 1. 6号墳横穴式石室内瓦質土器出土状況（北東より）
2. 6号墳横穴式石室内漢道部中世堆積土状況（東より）
3. 6号墳横穴式石室内畔断面（北東より）
- 図版13 遺構** 1. 6号墳横穴式石室内敷石状況（南西より）
2. 6号墳横穴式石室内玄室部敷石状況（西より）
3. 6号墳横穴式石室内石棺片出土状況（西より）
- 図版14 遺構** 1. 6号墳横穴式石室内漢道部敷石状況・部分（東より）
2. 6号墳横穴式石室内漢道部敷石状況・部分（東より）
3. 6号墳横穴式石室内敷石状況（南西より）
- 図版15 遺構** 1. 6号墳完掘状況（南西より）
2. 6号墳横穴式石室完掘状況（南西より）
3. 6号墳墳丘外北東部畔断面（西より）
- 図版16 遺構** 1. 6号墳横穴式石室完掘状況（北東より）
2. 6号墳完掘状況（南西より）
3. 6号墳断ち割り断面（南西より）
- 図版17 遺構** 1. 7・10号墳調査前状況（南より）
2. 7・10号墳機械掘削後状況（南より）
3. 7号墳確認調査後状況（南より）
- 図版18 遺構** 1. 7・10号墳敷石時完掘状況（南より）
2. 7・10号墳断ち割り断面（南より）
3. 7号墳横穴式石室内中世面検出状況（南より）
- 図版19 遺構** 1. 7号墳墓坑内畔断面（北より）
2. 7号墳横穴式石室内敷石搅乱時状況（南より）
3. 7号墳横穴式石室内敷石時完掘状況（南より）
- 図版20 遺構** 1. 7号墳横穴式石室内敷石断面（南より）
2. 7号墳横穴式石室完掘状況（南より）
3. 7号墳断ち割り断面（南より）
- 図版21 遺構** 1. 10号墳横穴式石室内中世面検出状況（北より）
2. 10号墳墓坑内畔断面（北より）
3. 10号墳横穴式石室内敷石時完掘状況（南より）

- 図版22 遺構 1. 10号墳横穴式石室内敷石時完掘状況（南より）
2. 10号墳横穴式石室内耳環出土状況（西より）
3. 10号墳横穴式石室内馬具出土状況（東より）
- 図版23 遺構 1. 10号墳横穴式石室内敷石断面（南より）
2. 10号墳横穴式石室完掘状況（南より）
3. 10号墳断ち割り断面（南より）
- 図版24 遺構 1. 10号墳横穴式石室完掘状況（南より）
2. 10号墳横穴式石室左側壁据え付け状況（西より）
3. 10号墳横穴式石室両側壁合体状況（北西より）
- 図版25 遺構 1. 8号墳確認調査後状況（南西より）
2. 8号墳完掘状況（東より）
3. 8号墳（南西より）
- 図版26 遺構 1. 8号墳墓坑内畔断面（西より）
2. 8号墳断ち割り断面（南西より）
3. 8・9号墳間遺構完掘状況（東より）
- 図版27 遺構 1. SKⅪ・12畔断面（南より）
2. SKⅡ土器出土状況（西より）
3. SKⅡ完掘状況（南より）
- 図版28 遺構 1. 9号墳確認調査後状況（南西より）
2. 9号墳石室および土器出土状況（北東より）
3. 9号墳石室および土器出土状況（北東より）
- 図版29 遺構 1. 9号墳石室内木棺跡畔断面（北東より）
2. 9号墳完掘状況（南西より）
3. 壴穴式住居床面検出状況（南西より）
- 図版30 遺構 1. 壴穴式住居内SD2畔断面（東より）
2. 壴穴式住居完掘状況（南東より）
3. 壴穴式住居完掘状況（北より）
- 図版31 遺物 3号墳羨道出土須恵器 瓢、匙、高杯、壺、杯身
- 図版32 遺物 3号墳羨道出土須恵器 提瓶、壺、上師器、杯、椀
- 図版33 遺物 3号墳羨道出土須恵器 半瓶、5号墳墓坑出土須恵器 高杯、短頭壺、周濠出土須恵器 瓢、土師器 瓢、SKⅠ出土土師器 小皿
- 図版34 遺物 6号墳玄室出土土師器 杯、搅乱層出土須恵器 壺蓋、杯蓋、杯身、脚部、土師器 杯
- 図版35 遺物 6号墳搅乱層出土須恵器 脚部、壺、台付壺、器台、SKⅡ出土土師器 小皿、SKⅡ出土土師器 瓢
- 図版36 遺物 SKⅡ出土土師器 小皿、8号墳搅乱層出土土師器 小皿、瓦器 椭、10号墳搅乱層出土須恵器 杯蓋
- 図版37 遺物 9号墳石室出土須恵器 杯身、杯蓋、匙、10号墳石室出土須恵器 壺蓋、瓢、脚部、前庭部出土須恵器 壺、搅乱層出土須恵器 高杯

- 图版38 遗物 10号墳石室出土土師器 杯、前庭部出土須恵器 壺、攪乱層出土須恵器 壺・台付壺・脚部・壺蓋、土師器 壺
- 图版39 遗物 10号墳石室出土須恵器 高杯、土師器 鉢、攪乱層出土須恵器 台付壺・杯蓋
- 图版40 遗物 10号墳搅乱層出土須恵器 杯身、3号墳出土鐵製品 鐵金具、6号墳出土鐵製品 馬具
- 图版41 遗物 1. 10号墳出土鐵製品 馬具
2. 6号墳出土鐵製品 馬具
- 图版42 遗物 6号墳出土金銅製品 耳環、10号墳出土鐵製品 馬具・刀子・鎌・太刀、金銅製品 耳環
- 图版43 遗物 1. 6号墳出土鐵製品 鈕、7号墳出土鐵製品 鈕
2. 10号墳出土鐵製品 鈕
- 图版44 遗物 1. 6号墳出土鐵製品 馬具
2. 10号墳出土鐵製品 鏽
- 图版45 遺物 1. 3号墳羨道出土須恵器 壺・甌・壺
2. 5号墳墓坑出土須恵器 杯身・杯蓋・脚部・短頸壺
- 图版46 遗物 1. 5号墳墳丘出土須恵器 脚部・甌・壺
2. 5号墳周濠出土須恵器 脚部・杯身・壺・壺
- 图版47 遗物 1. SK8出土須恵器 甌・脚部・SK1出土土師器 小皿・大皿
2. 6号墳玄室出土須恵器 杯蓋・杯身・土師器 杯
- 图版48 遗物 1. 6号墳搅乱層出土須恵器 壺蓋・杯蓋
2. 6号墳搅乱層出土須恵器 杯身
- 图版49 遗物 1. 6号墳搅乱層出土須恵器 杯身・高杯・脚部
2. 6号墳搅乱層出土須恵器 甌・壺・脚部・器台
- 图版50 遗物 1. 6号墳搅乱層出土須恵器 壺
2. 6号墳搅乱層出土上土師器 盆
- 图版51 遗物 1. 6号墳搅乱層出土土師器 盆
2. 6号墳搅乱層出土瓦器 槌・羽釜・火舍
- 图版52 遗物 1. 6号墳搅乱層出土土師器 羽釜・弥生土器 底部
2. 7号墳搅乱層出土須恵器 甌・杯蓋・壺・土師器 杯・壺
- 图版53 遺物 1. SKII出土土師器 小皿
2. SK1I出土土師器 大皿・小皿・須恵器 杯蓋・瓦器 小皿・椀
- 图版54 遗物 1. 8号墳周辺搅乱層出土土師器 小皿
2. 8号墳周辺搅乱層出土瓦器 小皿・椀・須恵器 壺
- 图版55 遗物 1. 9号墳石室出土土師器 杯・椀、攪乱層出土須恵器 杯蓋・器台
2. 10号墳石室出土須恵器 杯身・前庭部出土須恵器 脚部・土師器 壺・攪乱層出土須恵器 器台
- 图版56 遗物 1. 10号墳搅乱層出土須恵器 壺・器台・壺・甌
2. 10号墳搅乱層出土須恵器 高杯・脚部
- 图版57 遗物 1. 10号墳搅乱層出土須恵器 脚部・杯蓋
2. 10号墳搅乱層出土須恵器 杯蓋

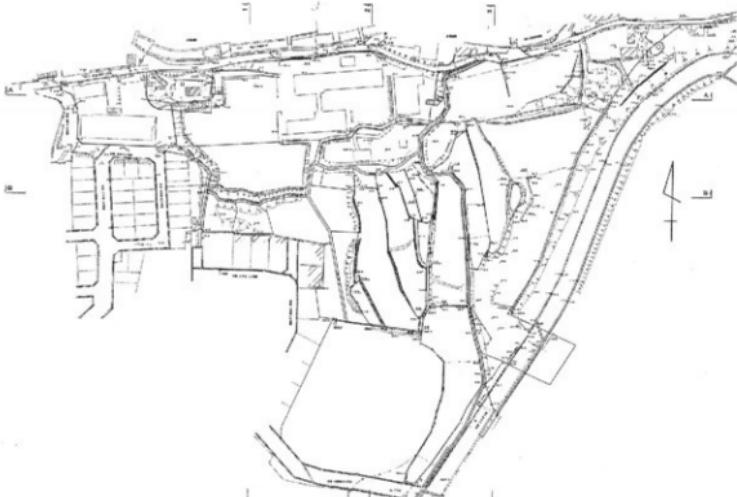
- 図版58 遺物 1. 10号墳撓乱層出土須恵器 杯身
2. 10号墳撓乱層出土須恵器 杯身、土師器 鉢、10号墳周辺出土土器須恵器 杯
- 図版59 遺物 1. 10号墳出土玉類（表）
2. 10号墳出土玉類（裏）
- 図版60 遺物 1. 10号墳出土玉類（表）
2. 10号墳出土玉類（裏）
- 図版61 遺物 1. 5号墳丘上土器群2・3出土須恵器 瓢
2. 5号墳丘上土器群5出土須恵器 瓢
- 図版62 遺物 3号墳出土石製品 石棺、6号墳出土石製品 石棺
- 図版63 遺物 6号墳出土石製品 石棺、10号墳出土石製品 石棺
- 図版64 遺物 7号墳出土石製品 石棺、10号墳出土石製品 石棺

I. 調査に至る経過

五里山古墳群は、上四条町・上六万寺町に広がる6世紀中葉から7世紀前半にかけての群集墳である。これまで13基の古墳からなるとされきたが、2基(12・13号墳)は鳴川北岸の別群(現・花草山古墳群の一部)であり、11基の構成とする。当該地周辺は後世、とくに近代以降の開墾などによりその多くは破壊・欠損し、現存しているのは半壙を含め5基にすぎない。古墳は径15m前後の円墳で構成されていると言われているが、双円墳の存在も指摘されていた(2号墳)。

昭和41年に1・3号墳の発掘調査(第1次調査)が行なわれた。1号墳は石室底部を残すのみであったが、3号墳は2号墳とも墳丘・石室がほぼ完存に近い状態であった。主体部は横穴式石室で敷石が施され、石室内埋葬は組合式石棺もあったが、複数の木棺が納められていたようである(いずれも開口していた)。遺物は、須恵器・土師器などの上器類をはじめ、環頭大刀柄頭(2号墳)・直刀・鐵鎌・鐵斧・鐵釘などの鉄製品、耳環やガラス製の玉などの装身具類があり、簪・尾錠・礪金具などの馬具類も出土している。昭和41年当時は鳴川谷古墳群と称され、2号墳と3号墳の間にある窪地を古墳の残骸として3号墳とし、現3号墳を4号墳として周知され、明文化されていた〔文献1・2〕。その後、五里山古墳群と改名されるとともに、現1～3号墳は昭和43年5月2日に市史跡として指定され、東方の古墳が4号墳と認知された。また、らくらく登山道の整備に伴い、2号墳東部部分は埋没した。現在、1・2号墳は大阪府の管理下にある。

旧大阪府立菊水学園周辺は、水野正好氏によって分布調査がなされて4基の古墳の存在が伝えられていたが、正確な場所は不明となっていた〔文献5〕。昭和47年、旧四条町の町史の編纂に伴い、山畑古墳群・花草山古墳群などとともに本古墳群の資料の集成がなされ、出土資料状況が明らかになった〔文献4〕。その後、菊水学園から保管されていた当該地出土遺物の寄贈を受けたが〔文献7〕、学園は平成11年(1999)4月に廃校となった。平成12年には採集資料を含め1～3号墳の時期について論究された〔文献8〕。



第1図 調査地および周辺図 (1/2000)

平成16年6月に大阪府健康福祉部と旧菊水学園跡地の取り扱いについての協議が行なわれたおり、大阪府教育委員会の一瀬和夫氏(現在、京都橘大学)が分布調査をされ、4基の古墳の位置概略図が送付されていた。しかし、下記の確認調査時点での経過およびこの資料を前もって認知することはできなかった。

平成19年1月17日、上四条町1170番1および上六万寺町1744番2ほかにおける区画整理事業の届出があった。当該地は市史跡指定の3号墳と11号墳および上記の未確認の5～10号墳の古墳の存在が推定された。のことから、代理者および関係所管と協議を重ねた。その結果、3号墳および11号墳(旧春日神社社地)については整備・保存することが決まり、旧菊水学園内を除いた地域については3回に分けて確認調査を、旧学園内には建物等の解体工事時に確認・立会調査を実施することになった。

まず、3号墳の古墳状況(墳丘規模など)と保存範囲を確認するため平成19年1月30日～2月7日まで第2次調査を実施し、石室内外での残存遺物とともに、羨道左側壁の1石と両側壁の抜き取り跡の一部、墳丘上の列石、墳丘裾、周濠を伴わないことなどを確認した。この結果により保存範囲を確定した。

平成19年3月19日から3月27日には区画整理範囲のうち旧菊水学園建物群外での確認調査=第3次調査を行なった。棚田・畑の大半では遺物・遺構ともほとんど検出されなかつたが、学園敷地南端域周辺=3号墳から11号墳間ににおいて2基の古墳と中世土器の散布、くらくら登山道からの進入部でサスカイトの散布を検出した。

また、平成19年7月30日から8月3日にも旧学園外および敷地東部を対象に、確認調査として第4次調査を実施した。その結果、菊水学園敷地南端域=3号墳から11号墳間ににおいてさらに2基の古墳を確認した〔文献9〕。

これらの結果に基づいて、11号墳・3号墳の保存整備時の立会調査、本調査範囲の確定などの協議を行ない、調査を実施することになった。

〔文献〕

1. 「枚岡市史」第1巻 本編 枚岡市役所 1967、「古墳時代の枚岡」
2. 「枚岡市史」第3巻 史料編1 枚岡市役所 1966、「考古資料 古墳時代」
3. 「河内四條史」第1冊 本編 四条史編さん委員会 1981、「古代の四条」
4. 「河内四條史」第2冊 史料編1 四条史編さん委員会 1977、「考古資料 古墳時代」
5. 「東大阪遺跡ガイド」 東大阪市遺跡保護審査会 1978
6. 「わが街再発見 東大阪市の古墳」 東大阪市教育委員会 1996、改訂版 2001
7. 木建正宏「菊水学園採集の古墳時代遺物」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol.5, No.4 財団法人東大阪市文化財協会 1992
8. 秋山浩三・池谷洋「五里山古墳群・花草山古墳群と採集資料の検討-生駒山西麓部における群集墳の形成過程等をめぐって-」『大阪府文化財研究』第19号 財団法人大阪府文化財調査研究センター 2000
9. 「五里山古墳群第2・3・4次発掘調査」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報-平成19年度-』 東大阪市教育委員会 2008

II. 位置と環境

五里山古墳群は、上四条町と上六万寺町にまたがる鳴川南岸の尾根先端付近から上石流段丘にわたって分布している。本尾根の南尾根は突出が短く傾斜はきつく、尾根間の西への土石流段丘も急傾斜をなしている。さらにその南の尾根も西への突出は少ない。いずれも南斜面に南ないし南西方向に開口する古墳を構築するのは難しく、本尾根の北を西方向に流れる鳴川沿いの北斜面から上石流段丘の南斜面に古墳を構築していき、古墳群が形成されたものと思われる。

生駒山西麓には多くの小河川が流れ、それぞれが土石流段丘、扇状地を形成している。そしてこの地域は、旧石器時代から現在にいたる歴史が連続とついている。今回の調査でも、古墳だけではなく、弥生土器、須恵器、土師器、瓦器、陶磁器など、弥生時代から江戸時代にわたる遺物が出土している。



第2図 遺跡周辺図 (1/15000)

本古墳群近辺の山畠遺跡をはじめ、千手寺山遺跡、正興寺山遺跡などで旧石器時代後半のナイフ形石器が出土・採集されている。縄文時代には、早期の神並遺跡、前期の鬼虎川遺跡、中期の善根寺遺跡、後期の縄手遺跡、晩期の日下遺跡・馬場川遺跡など、早期から晩期に至る集落が各所で営まれるようになる。弥生時代になると、鬼虎川遺跡に複数の環濠、方形周溝墓群をもつ大集落=提点集落が形成されるとともに、植附遺跡、西ノ辻遺跡、瓜生堂遺跡など、扇状地から堆積平野にこの時期の遺跡が点在し、後期には山畠遺跡、岩滝山遺跡など山腹に高地性集落も見られる。

古墳時代の集落も扇状地から平野部に形成されている。前期の大古墳は見られないが、ヒレ付円筒埴輪が出土している客坊山3号墳・えの木塚古墳がある。しかし、後期になると山腹から扇状地にかけて横穴式石室を有する小古墳が群集して形成され、幕尾古墳群、辻子谷古墳群、神並古墳群、みかん山古墳群、豊浦谷古墳群、出雲井古墳群、客坊山古墳群、五条山古墳群、山畠古墳群、花草山古墳群、五里山古墳群、六万寺古墳群、桜井古墳群、大賀世古墳群、淨上寺谷古墳群などである。また、扇状地や平野部に段上古墳群、植附古墳群、巨摩1号墳、山賀古墳などの小型低方墳があるとともに、塚山古墳、イノラムキ古墳など単独で存する古墳も見られる。

横穴式石室を主体部とする古墳群は、生駒山西麓に東西方向にのびる尾根から扇状地にかけて形成されている。消滅または未発見のものがあり、各古墳群の数は定かではないが、数基の小規模なものから山畠古墳群のように70基を超えるものまである。

客坊山3号墳のように前期にさかのぼるものがあるものの、大半は6世紀から7世紀前半に構築されたものである。多くは径15m前後の円墳であるが、みかん山8号墳などの方墳(5世紀後半築造、木棺直葬)、神並5号墳(夫婦冢古墳)・山畠52号墳(瓢箪山古墳)・山畠22号墳のような双円墳、山畠2号墳の上円下方墳なども見られる。

古墳は破壊・削平されているものが多く、墳丘・外部施設状況を窺えるものは少ない。ただ、五里山3号墳のように墳丘に数段の列石を有するもの、出雲井5号墳・14号墳のように周濠を伴うことが確認されたものがある。また、これまで埴輪を伴う古墳は少ないとされてきたが(山畠5・14・57号墳、大賀世2・3号墳など)、近年の調査でみかん山5号墳などの埴輪の出土古墳(小型低方墳の段上1・2号墳、巨摩1号墳など)、または出土地(瓜生堂遺跡、孤塚遺跡、水走氏館跡など)の報告が増してきている注)。

横穴式石室は両袖式、左右片袖式、無袖式と種々の形態があり、規模とも多彩である。それとともに追葬や平安時代以降の再利用状況が確認されたものも少なくない。みかん山7号墳・出雲井13号墳、山畠25号墳のような竪穴式小石室、石敷を伴った土器棺(花草山24号墳)の存在も知られるようになっている。また、幕尾古墳群のように陶棺をもつもの、さらに終末期の横穴式石室のイノラムキ古墳がある。

飛鳥時代から奈良・平安時代になると、扇状地から平野部には集落が形成され、田畠が開墾されるとともに、河内寺庵寺をはじめ寺院が各所に建立されている。

鎌倉時代から室町時代も、各所に集落、水田、畠が形成されていたが、水走遺跡のように平安時代後期以降新たに開発されたところもある。また、神感寺など山岳部などにも寺院が造られ、戦乱期には若江城をはじめ各所に城が築城された。

そして平野部を中心にその様相を一変させたのは、江戸時代前半に行なわれた大和川の付け替え事業であった。

注) 若松博恵「埋もれている古墳」『東大阪消防』第77号 東大阪市消防職員厚生会 2004年

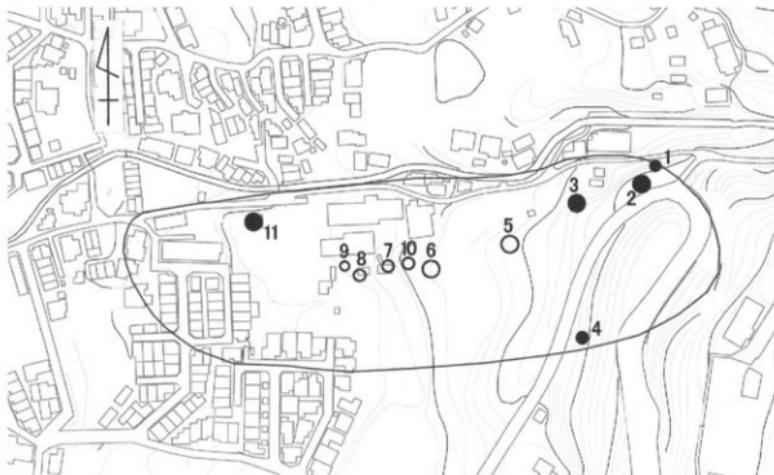
III. 調査の概要

1. 調査の方法と既存古墳の概要

調査の方法

今回、第2・3・4次調査の結果を受けて、区画整理事業予定地内の進入道路の専入部と北部の古墳分布域について発掘調査を実施した。その間、確認調査が実施できなかった旧菊水学園内のグランドに2トレンチを設定し、機械掘削による調査を行なった。現地での調査は、進入道路部が平成20年3月10日～18日、旧菊水学園グランド内の調査は4月15日、古墳分布域は4月25日から7月4日まで実施した。古墳分布域の調査は、昨年度の確認調査で検出した5～9号墳の5基の古墳とその周辺部および保存される3号墳前庭域を対象とした。調査中に10号墳が発見された。調査に際しては、主要遺構(墳丘・石室など)および最終遺構面などについて写真測量を実施した。また、12月3・4日には11号墳が所在する旧春日神社社地周辺整備に伴い立会調査、平成21年1月26～29日には3号墳の整備工事の立会を行なった。

整理等作業は、発掘調査にはほぼ平行して出土遺物の洗浄とその登記作業をしていったが(出土遺物台帳作成)、調査終了後、同作業を本格的に行なうとともに注記、接合作業を実施した。その後、遺物による遺構・層位の時期を確認しながら、報告書刊行に向けて必要な遺物をセレクトし、復元および実測図の作成を行なった。土器・石製品・金属器の実測図は古墳・周辺別ごとにレイアウトし、原稿執筆しながら割付を行ない、トレースして遺物版下を作成した。層位図・遺構図は張り合わせ作業をはじめ図面の整理、検討を行ない、株式会社アコードが実施した写真測量図の校正を行なった。層位・遺構図もレイアウトし、原稿執筆しながら割付を行ない、トレースなどをして遺構版下を作成した。上記の遺物の写真撮影はエイチ・エス写真技術株式会社に委託して実施し、選択した遺構写真を含め、焼付けしたのち写真版下を作成した。遺構・遺物の原稿・版下の完成後、写真測量図などをも集成して、目次・まとめ・報告書抄録等を加えて編集し、印刷所へ渡した。その後、遺物・図面・写真的登録作業を行なった。



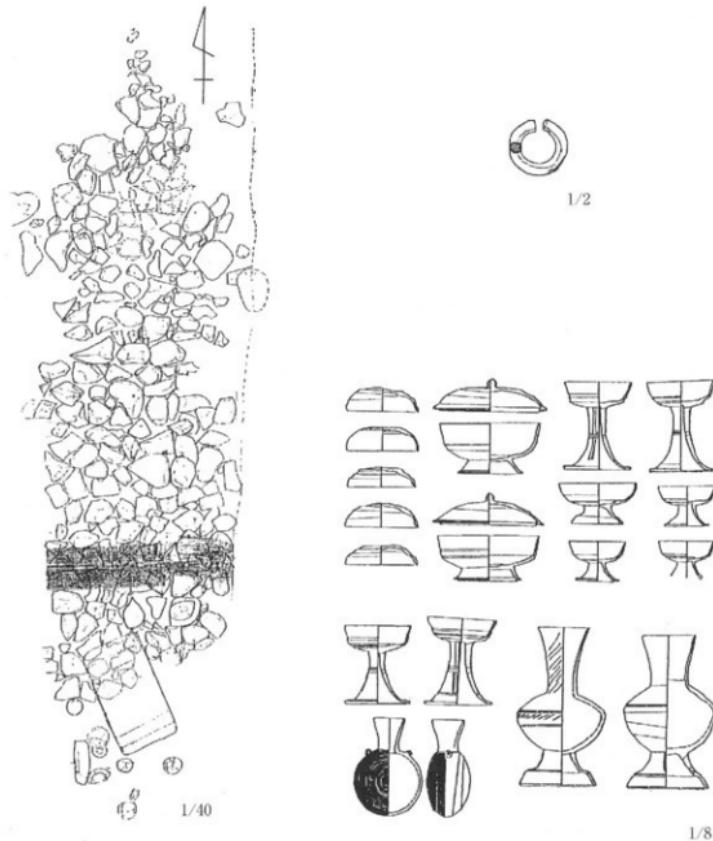
第3図 古墳分布位置図 (1/2500)

既存古墳などの概要

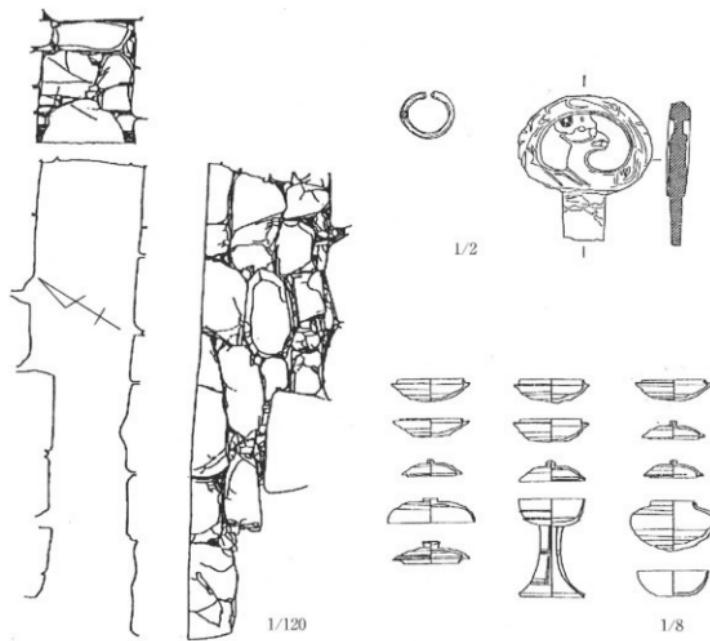
本古墳群では上述したように11基の古墳が知られている。ここではこれまでの調査・報告などの成果をもとに各古墳の内容を概観しておく。3号墳は3で詳述する。

1号墳(第4図)

大半破壊されており、墳丘の一部と石室の基底部である敷石が幅約1.6m、長さ約5.3mにわたって残存していたのみで、古墳・石室の状況および規模は明確ではない。南=入口側に散乱した状態で遺物が出土しており、埋葬時=副葬の位置はほとんど保っていなかったといえる。遺物は凝灰岩製組合式石棺1枚と杯の身と蓋・高杯・提瓶・脚付長頸壺などの須恵器、土師器、鉄斧、鉄釘、ガラス玉、耳環などが出土している。出土した土器から、6世紀後半に築造され、7世紀前半まで追葬されていたことが知れる。



第4図 1号墳石室内遺物出土状況図および出土遺物実測図（出土状況は原図）



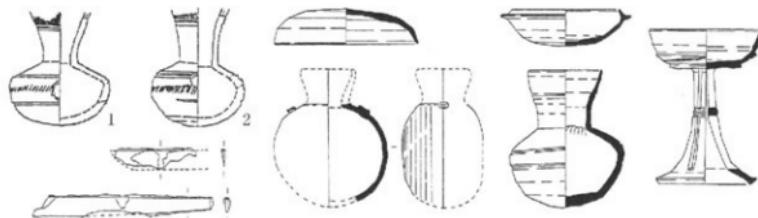
第5図 2号墳石室および出土遺物実測図

2号墳

径約15m、高さ3mの円墳で、南西に開口する右片袖式の横穴式石室がある。石室は長さ4.5m、幅2.1mの玄室と幅1.6m、幅1.6m、長さ6.5m以上の羨道で、環頭大刀の把頭、耳環、須恵器の杯の身と蓋・短頸壺・壺蓋・高杯・有蓋高杯の蓋、土師器の杯などが出土している。出土遺物から6世紀後半に築造され、7世紀前半まで追葬が行なわれていたと思われる。

4号墳

らくらく登山道の東に露出する石塊が石室の一部と考えられ、須恵器の甌の出土も報告されているが(第6図)、詳細は不明である。



第6図 4号墳出土および旧菊水学園保管遺物実測図(1・2は4号墳、文献4・7より)

11号墳

調査対象域の最西端の高まり部に露出する石塊群が石室の一部と考えられているが、古墳状況は不明である。上にはもと四条集落の宇宮ノ前にあった旧春日神社があり、明治5年の枚岡神社への合祀おり移転されたものである。本殿は一間春日造松皮葺で、棟木に「天文九庚子年月日(1540)」の墨書きがあるが、江戸時代初期の手法もみられる。昭和49年に東大阪市の文化財に指定されている。境内にある嘉永5年(1852)の石燈籠と石造狛犬も旧社地から移されてきたものである。周辺整備に伴う立会調査では古墳状況を確認することはなかったが、須恵器壺片が出土した。

第1表 五里山古墳群古墳一覧

号数	墳形	墳丘規模	外部施設	主体部	主体部 残存状況	埋葬状況	出土遺物	時期
1	不明	不明	不明	無袖式？ 横穴式石室	散石 残存長5.3m 幅1.5m	組合式石棺 木棺？	須恵器(杯・高杯・ 台付長頸瓶) 土師器 鉄斧、鉄釘 玉類(ガラス)	7世紀初頭 7世紀前半 まで追葬
2	円墳 (双円 墳?)	径約15m	不明	右片袖式 横穴式石室	玄室長4.5m 幅2.1m 漢道長6.5m 幅1.6m		須恵器(杯・高杯・ 長頸瓶、蓋) 土師器(杯) 環頭大刀把頭	6世紀後半 7世紀前半 まで追葬
3	円墳	16×14.5m	列石	右片袖式 横穴式石室	玄室長4.9m 幅1.9m 高2.3～2.8m 漢道長5.2m 以上 幅1.6m 高1.5m 散石	組合式石棺 木棺？	須恵器(杯・高杯・ 長頸瓶、蓋、甕) 土師器(杯・瓶) 馬具(骨・鐵全具) 鉄刀、鉄鏃、鉄釘、 鏡	6世紀後半 7世紀前半 まで追葬
4	不明	不明	不明	不明	石露出	不明	須恵器(甕)	
5	円墳	径約17m	周濠	右片袖式 横穴式石室	玄室長4m 幅1.5m 漢道長4.4m以上 幅1.1m	木棺？	須恵器(杯・甕、 高杯・甕)、 土師器 鉄釘 磁器	6世紀後半
6	円墳	20×18m	列石？	右片袖式 横穴式石室	玄室長5.0m 幅2.4m 漢道長9.4m 幅2.0m 散石 排水施設	組合式石棺 木棺？	須恵器(杯・甕、 高杯・蓋)、 土師器(瓶・甕) 耳環 馬具、鉄釘 瓦器(碗・火舍)	6世紀後半
7	円墳	11m以上× 8m以上	不明	無袖式 横穴式石室	長8.0m前後 幅2.0m 散石	組合式石棺 木棺？	須恵器(杯・甕)、 土師器(杯・甕)、 鉄釘	7世紀前半
8	円墳	径10m未満	周濠	横穴式石室	墓坑、側壁 一部残存		須恵器(大甕)、 鉄釘	7世紀前半
9	不明		不明	横穴式石室	残存長1.9m 幅1.2m	木棺 1.3×0.5m 閉塞石	須恵器(杯蓋・杯身・ 甕) 土師器(杯)	7世紀初頭
10	円墳	12m以上× 10m以上	濠？	右片袖式 横穴式石室	玄室長4.6m 幅2m 漢道長5.6m 幅1.55m 散石	組合式石棺 木棺？	須恵器(杯・甕、 高杯・蓋)、 土師器(杯・瓶・甕) 耳環、玉類 馬具、鉄刀、鉄鏃、 鉄釘、鏡	6世紀後半 7世紀前半 まで追葬
11	不明	不明	不明	不明	石露出	不明	須恵器(甕)	不明

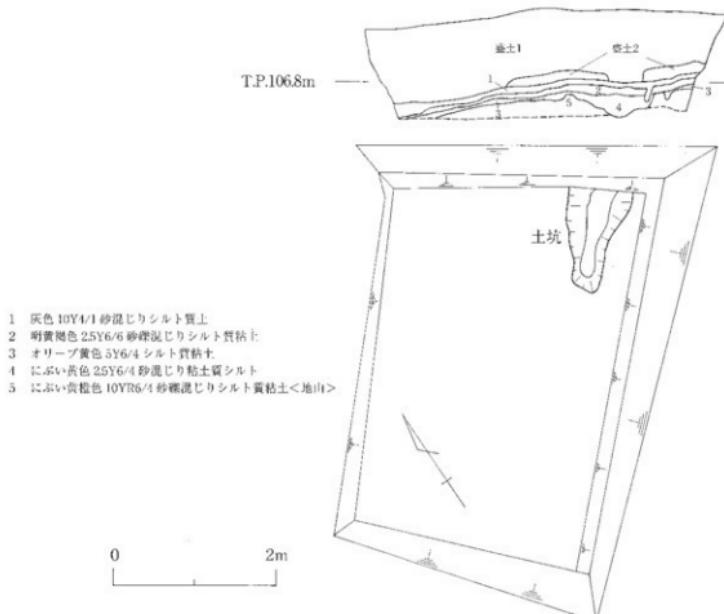
2. 導入部の調査と旧菊水学園グランド確認調査(第7図 図版2・3)

らくらく登山道から本区画整理地への進入部は、ほぼ開発工事に伴う資材搬入、伐採樹木・草、解体廃材の搬出道路の導入部で、第2次調査でサスカイト包含層を確認したことから、この道路範囲および擁壁によって切土となる所について調査を実施した。

擁壁工事に伴う南斜面の大半は表土下が地山で、サスカイトの散布もほとんど見られなかった。のことから、人力掘削による調査はほぼ導入道路部分にあたる約4.4m×6mを対象とした。

腐食土などを除去した段階でサスカイト片およびサスカイト塊の散布を確認した。これらのサスカイトには製品は見られなかったが、一部人為的敲打による剥離痕の存するものが見られた(松田順一郎氏教示)。しかし、出土層およびその下層から磁器・ガラスなどが検出され、これらのサスカイトは現代に他の場所からもたらされたものであることが判った。ただ、サスカイトは二上山麓産出のもので、この周辺で産するものではなく(川端清司氏教示)、南隣に弥生時代後期の高地性集落(岩滝山遺跡)が存し今回の調査においてもこの時期の竪穴式住居・弥生土器を検出していることから、出土地近辺にこの時期の石器工房が存していたものか、後世に他地から搬入されたものと思われる。下層の地山面で土坑を検出したが、遺物はなく、性格・時期とともに不明である。

菊水学園グランドでの確認調査は中央部に幅2m、長さ15mと幅2m長さ7mの南北方向のトレチを2箇所設定し、主に機械掘削によって調査を行なった。中央部では表土下-1.3mで地山を確認し、北と南へ傾斜して落ち込んでいた。北側は大疊混じりの堆積層=土石流で、南側はさらにその上にグランド建設時に盛り上げられた整地上があり、遺構・遺物とも検出されなかった。

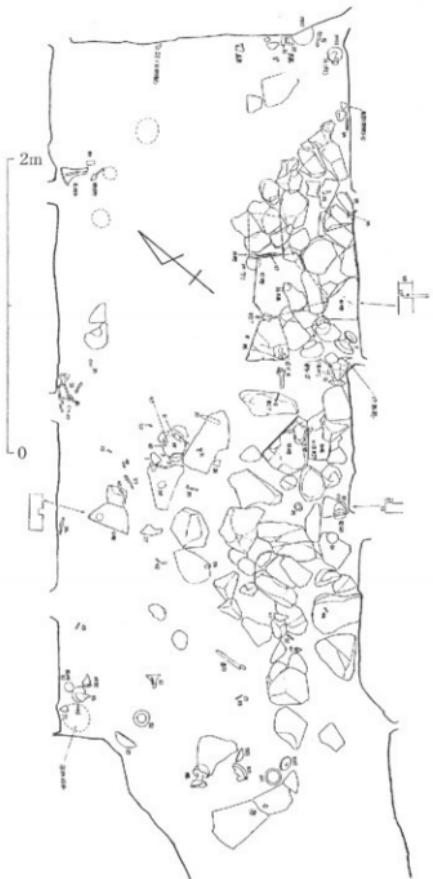


第7図 導入部調査地平面および断面実測図

3. 3号墳(第8~12図 図版4・5)

a. 調査前状況

第2次調査であった確認調査時は耕作時期であったこと、その畠地との間に土手および耕作道具などを納入した簡易物置が存し、機械を導入することができず、十分な掘削および残土処理を行なないきることができなかつた。今回は5号墳との関係を知る上からも漢道からつながる前面の調査を行なつた。



第8図 3号墳第1次調査石室内遺物出土状況実測図

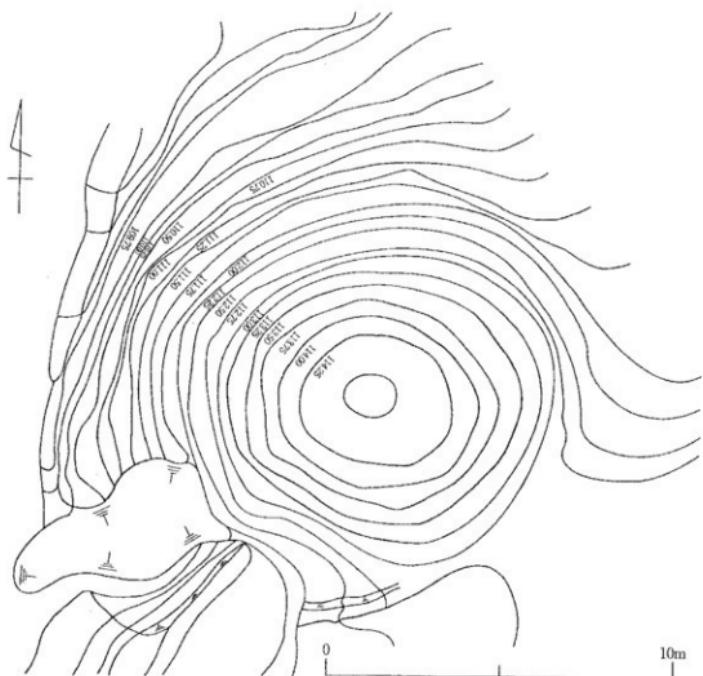
以下、第1次・2次調査などの成果を先に記し、それを踏まえ今回の調査結果を合わせて記述する。

第1次調査は基本的に主室部である横穴式石室内の調査であったが、墳丘測量も行なわれていた。石室は玄室の長さ4.65m、奥壁幅1.9m、高さ2.35m、漢道の長さ22m、幅1.8m、高さ1.3mの計測値が報告された。

第2次調査では玄室部の清掃を含めて石室底面の確認と漢道入口付近の調査を行なつた。漢道左側壁の1石を検出するとともに石抜き跡の一部を確認した。その結果、玄室の長さ4.90m、奥壁幅1.93m、高さ2.2~2.73m、漢道の長さ28m以上、幅1.63~1.8m、高さ1.58mであることを確認した。

現在の玄室の敷石は一部を除いて散乱状態にあるが、1次調査時には左側壁側に残存し、組合式石棺片をはじめ須恵器・土師器の土器類や金属製品が、玄室から漢道の一部にかけ散乱した状態で出土した。1・2次調査などで出土した須恵器は杯身・蓋、高杯、長頸壺、甕、土師器は榢、金属製品は直刀、鉄鎌、鉄釘、鏡とともに轡・礎金具、尾錠などの馬具類があつた。

石室図および主要土器と鉄釘の一部は〔文献〕の2・4・8・9に掲載されていた。



第9図 3号墳墳丘測量実測図

b. 古墳の形・規模

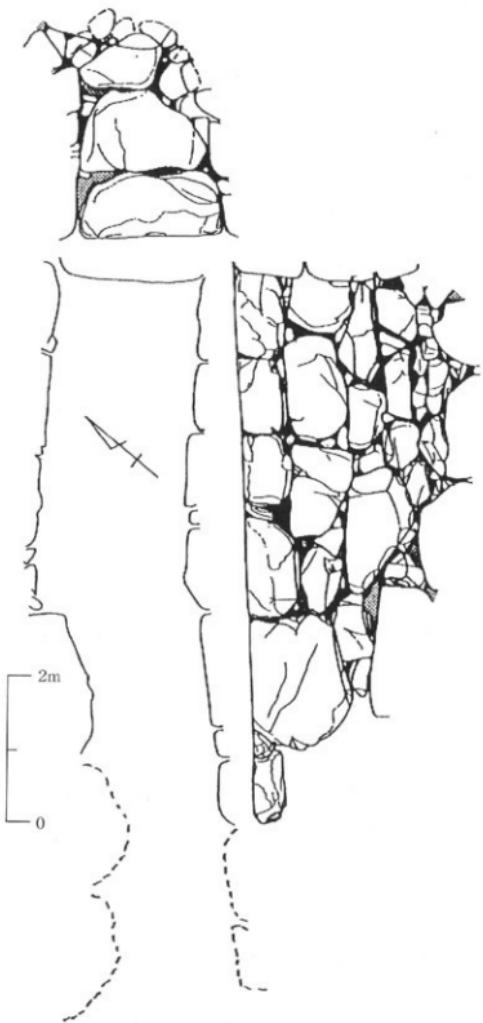
墳丘は、主体部である横穴式石室の主軸方向(南西-北東)がやや長く16m、北西-南東方向は14.5m、高さ2~4mを測る円墳である。第2次調査と今回の羨道およびその前面の調査でも漆の痕跡は確認されず、周濠は伴っていないと思われる。

c. 古墳形成状況

古墳の羨道部下面から、西・北側は大牒を含む明黄褐色砂礫混じりシルト質土であるのに対し、東部ないし東南部は地山(黄色砂混じりシルト質粘土)であることが判った。このことから、本古墳は東西方向にのびる尾根と鳴川がもたらした土石流段丘の北西斜面上にあることが知れ、その斜面の北および西に封土を高く盛り上げて形成されていた。そのため南東側の墳丘高は低い。

d. 墳丘状況

墳丘は、第2次調査において4本のトレーナーを設定し調査を行なった結果、窪地や搅乱箇所はあるもののほぼ旧状を残していることを確認した。墳丘表面には20~40cm 大の石の列および石の抜き跡があり、5段以上の列石が配されていたことが知れる。墳丘はきれいな半円球ではなく、列石ごとに狭いテラスを有していた。また、破壊されていた右側壁の埋土内から多量の須恵器片が出土し、墳丘部における祭祀に伴う遺物と考えられる。



第10図 3号墳石室実測図

壁の端であったことを窺わせた。

この結果、羨道の最下部側壁は右側3石、左側大小5石からなり、全長は5.2mあったと確定することができた。

e. 石室状況

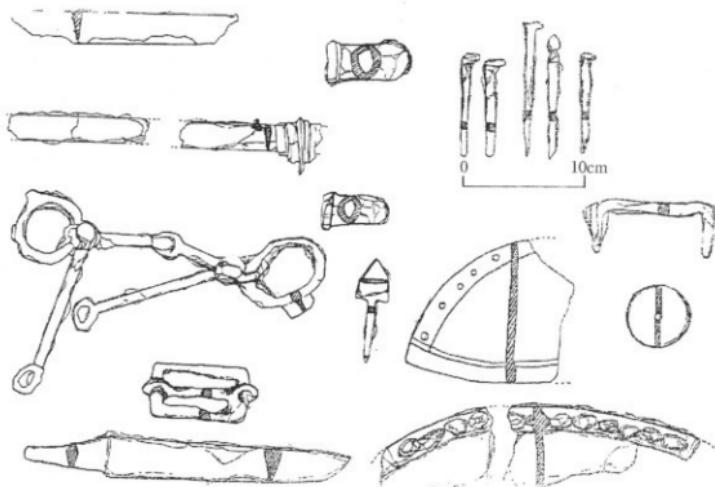
横穴式石室は右片袖式で、左側壁(尾根側)が内側に傾斜する玄室と、玄室主軸からくの字状に延びる羨道とからなっている。

上述したように第2次調査のおりには羨道部を十分に調査することができなかった。今回は後述する5号墳およびその間とともに羨道部を調査し、その全容を知ることができた。

羨道部分については、人力掘削によって盛土・耕土・擾乱土などを除去していくところ、羨道から古墳前庭部にかけて、須恵器の甕(1~6)、提瓶(7)、罐(8~9)、高杯(10)、平瓶(11)、壺(12~15)、杯身(16)と土師器の杯(17~18)、椀(19)などの土器類が多量に散乱した状態で出土し、玄室との境から磁金具片(20)、左側壁付近の擾乱土からは組み合わせ石棺片(21)などを検出した - 第13・14図 - 。

これらの遺物群は、石室が後世に再利用されたおり、その中から掘り出されたものと考えられるが、その時期については不明といわざるえない。ただ、第1次調査以前には埋まっており、近・現代の仕業ではない。

遺物群を含む包含層を除去すると大小の礫を含む土石流層面が広がり、この面で左右側壁石の抜き跡をそれぞれ2箇所検出した。また、左側壁端には縦方向の自然土層(土石流層)の突出があり、最先端の石は土石流層を切り込んで据えられていたものと考えられ、この場所が左側



第11図 3号墳第1次調査出土金属器実測図

すなわち、この石室の規模は、玄室の長さ4.90m、奥壁幅1.93m、高さ2.2～2.73m、羨道の長さ5.2m、幅1.63～1.8m、高さ1.58mということになる。

今回の調査においても、この後に詳述するように、須恵器・土師器・金属器・石製品など、多量の遺物を検出することができた。

第1次調査のおりの遺物出土状況図(第8図)と金属器実測図(第11図)を掲載した。上器実測図もあったが、今回は既存資料(本市立郷土博物館所蔵遺物、文献4・8掲載実測図)との関係を確認することができなかった。後日に期したい。そのため、1号墳の遺物出土状況図(第4図)とも、原図および調査直後の草図をそのままの状態で転載することにした。

これまでの調査(第1・2次調査)においても第11・12図に見られるように、多数の遺物が出土している。後述する今回の出土遺物と合わせて見てみると、本古墳に伴う遺物の多さが知れよう。

遺物の種類は以下のとおりとなる。

十器類 須車器 瓢 提瓶 瓶 高杯 平瓶 壺 杯身 杯蓋

土師器 杯 楢 など

金属器類 武器 鋸刀 鋸鐵

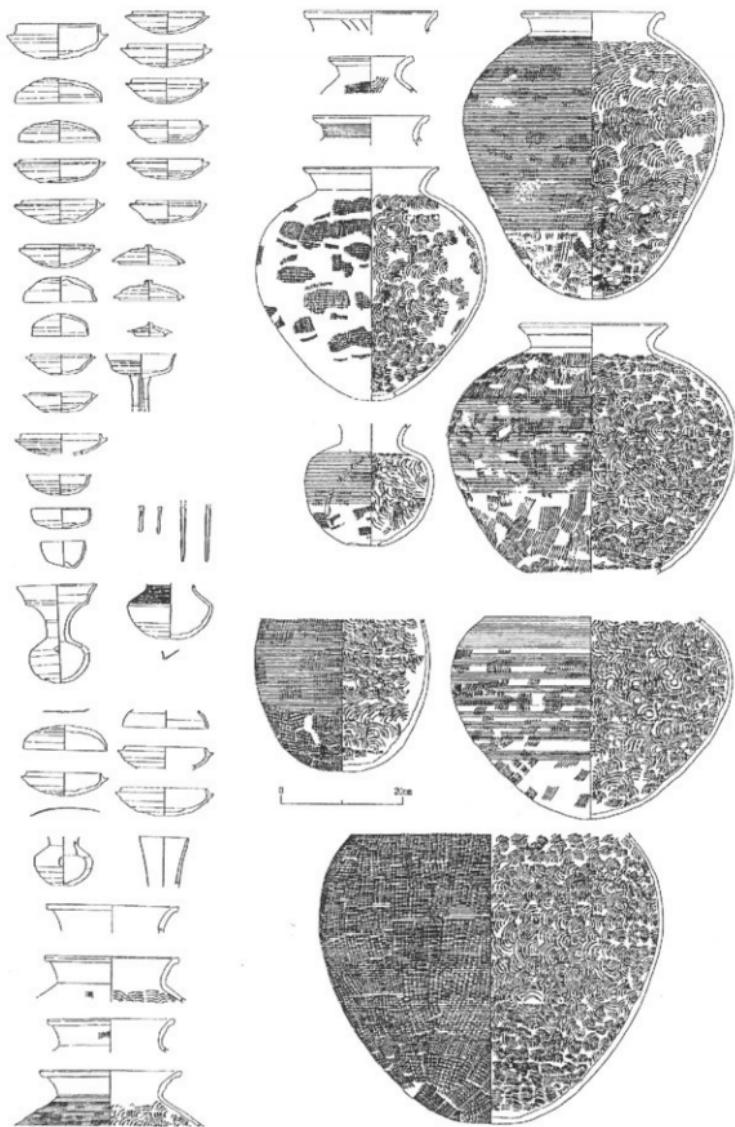
厠目 繼 磕全目 尾銳

鉢釘 鉢 など

石觀音類 細今式石柏

以下の3~10号墳築出土遺物の記述に際しての前提>

弥生時代～近世期の遺物が古墳や周辺から出土した。出土遺物の約9割が須恵器で、古墳時代後期のものが多数を占める。特に時期を明記していないものは古墳時代後～終末期(6世紀後半～7世紀)のものである。



第12図 3号墳第1・2次調査等出土遺物実測図

f. 出土遺物 (第13・14図 図版31～33・40・45・62)

漢道から須恵器、土師器、鉄製品、石製品が出土した。

土器

1～16は須恵器である。甕、提瓶、甌、高杯、平瓶、壺、杯身の器種がある。

1～6は甕である。口縁部は大きく外反する。口縁端部は外側へ肥厚し、丸く終わるものと面を持つものがある。1～4・6は口縁端部が下方へ肥厚する。1～3は頸部以下をタタキの後、カキメ調整する。内面に当て具痕が残る。3は底部が丸底である。体部は大きく張る。体部外面はタタキの後、カキメ調整する。内面に当て具痕が残る。4～6は内外面を回転ナデ調整する。

7は提瓶である。体部は前面が丸く膨れ、背面はほぼ平らである。口縁部はゆるやかに外反し、口縁端部は尖り気味に終わる。肩部の両側に鉤状の把手が付き、把手の先端は尖って終わる。全体的に摩滅が著しく調整法は不明である。

8・9は甌である。8は口部が大きく外反した後、外上方へやや外反して立ち上がる。口縁部と頸部の境に段がつく。口縁端部は尖り気味に終わる。9は体部が小さな球形を呈し、肩部はやや張る。体部中央に円孔を1個穿つ。体部下半は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。

10は高杯である。脚部は長く、半ばから外反して広がる。裾端部は面を持つ。上段に長方形、下段に台形の透かし孔を2段3方向に配置する。上下透かし孔の境に2条、下段の下に1条の沈線文を巡らす。杯部はやや深く、底部は平底である。口縁部は上方へ立ち上がり、口縁端部は尖り気味に終わる。内外面は回転ナデ調整する。

11は平瓶である。底部は平底を呈する。体部は扁平で、肩部は強く張る。体部上面に断面形が方形の把手が付く。口縁部は上方へ立ち上がる。体部下半は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。体部上面は降灰が著しく調整法は不明である。

12～15は壺である。12は短頸壺である。体部は肩部で張る。口縁部はわずかに外反し、口縁端部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。13は口縁部が外反し、口縁端部はやや面を持つ。内外面は回転ナデ調整する。甕の可能性もある。14・15は肩部がやや張り、球形を呈する。底部は丸底を呈する。体部下半は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。15は肩部に2条の沈線文を巡らす。

16は杯身である。底部は丸底である。体部は内傾して立ち上がり、受部は水平方向に伸びる。立ち上がり部はやや外反し、短い。口縁端部は尖り気味に終わる。体部下半は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。

17～19は土師器である。杯、椀の器種がある。

17・18は杯である。底部はやや丸い平底である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口縁端部は尖り気味に終わる。17は内外面をナデ調整する。18は外面をナデ調整する。内面に放射状の暗文を施す。

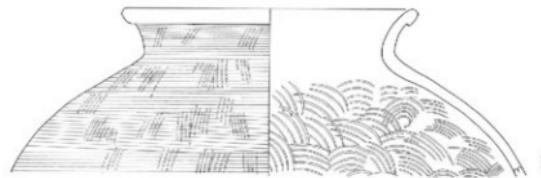
19は椀である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。体部に一对の把手が付く。内外面はナデ調整する。

鉄製品

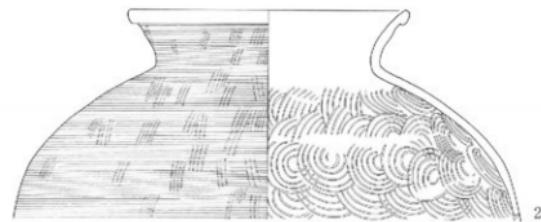
20は鍔金具である。鞍の前輪もしくは後輪の穂部分にあたる。鍔留めは5ヶ所に残る。部分的に鍔金が残る。残存長5.5cm、最大幅2.6cm、厚さ0.8cmを測る。

石製品

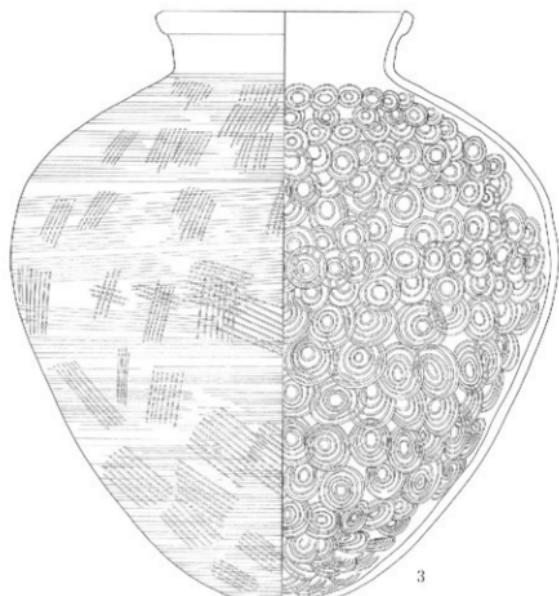
21は石棺の被片である。やや荒く削った面を4面持つ。組合式石棺の一部と考えられる。



1



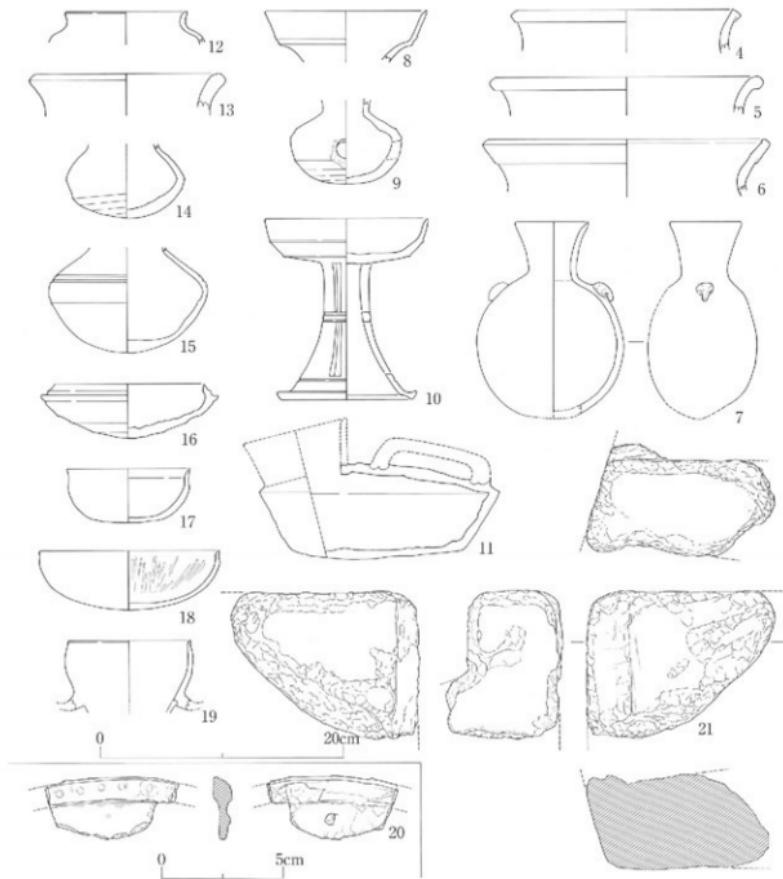
2



3

0 20cm

第13図 3号墳出土遺物実測図（1）



第14図 3号墳出土遺物実測図（2）

h. 小結

今回の調査では、確認調査時に十分確認することができなかった羨道端、両側壁抜き跡最前部を検出することができた。それとともに、羨道から古墳前庭部にわたり多量の遺物片の出土を見た。羨道前面付近にも周濠の痕跡ではなく、本古墳は周濠を伴っていなかったことを再確認した。

先の確認調査および今回の調査の結果、羨道は5.2mであったことが分かり、石室の規模は、玄室の長さ4.90m、奥壁幅1.93m、高さ2.2～2.73m、羨道の長さ5.2m、幅1.63～1.8m、高さ1.58mと判明した。さらに、石室入口＝羨道端の確認により、墳丘は16m×14.5m、高さ4mを測る、円墳である。

4. 5号墳(第15～17図 図版8～10)

a. 調査前状況

当該地は、畑地として使用され、北は旧菊水学園敷地との間に3mを越える段差があり、石垣が築かれていて、当初、古墳の形跡は一切見られなかった。第4次調査(確認調査)において、この地に東西方向のトレンチを設定して機械掘削したところ、一部で落ち込み部分を検出し、その落ち込みを掘削していくと、側壁と思われる1石とその断面で墓坑および墳丘の封土状況を確認した(文献9参照)。また、樹木の根の除去作業によって掘られた箇所があり、その壁面においても墳丘の封土状況が確認できた。

b. 古墳の形・規模

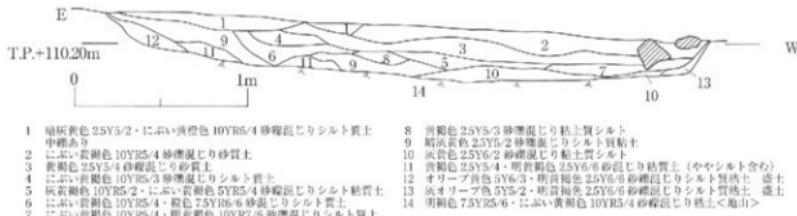
上述したように、畑地として使用されて平坦地をなし、墳丘の上部などはほとんど削平され、北側は切り土と石垣によって大きく欠損していたため、全容は不明である。しかし、東から南にかけ半円形に回る幅6～1mの周濠検出したことから(北～西方にかけては不明)、径約17mの円墳であったと考えられる。古墳検出面は西、とくに南への傾斜面をなしていたため、周濠は東では幅6m前後であったが南西は1mほどしか残存せず、墓坑前面近くでは全くみられなかった。

c. 古墳形成状況

古墳は、尾根先端が突き出た北斜面に形成されていた。南から北へ傾斜する地山に土石流層(明黄褐色砂礫混じりシルト質土)が堆積し、古墳基底の中央付近から南側は地山(礫を少し含む黄褐色シルト質粘土)で、北側は大礫を多く含む土石流層であった。北斜面は古墳構築以前の堆積層上生息していた草木層がみられ(炭化物を含み、焼き払われたもの)、南は灰色の堆積層のみ(自然に旧表土の腐食化)で、その上面から墓坑を切り込み、石室を構築しながら盛土をしていき、古墳を形成したものと思われる。

d. 墳丘状況

墳丘上部、とくに西・南は大きく削平(北側は欠損)されていた。石室の羨道外南部および墳丘上・裾付近3箇所において、須恵器の脚部(37～39)、甕(33)、壺(34～36)などの土器群を検出した(第16図)。墳丘の構築状況は、第16図の断ち割り断面に見られるように、尾根地山および土石流段丘上に堆積または整地された旧地表上に、丁寧に版築しながら封土が盛り上げられていたことが知れる。墓坑、確認調査箇所、擾乱土坑、先行トレンチの各壁面の観察により、地山および土石流層を掘り窪めて=墓坑内に1～2段の石を据え、石を積み重ねていきながら墳丘を形成している。墳丘封土は、地山混じり土の層・腐食土混じり土の層に大別でき、交互に積み重ねられ、巨視的には縞模様のように見えるが各層とも細分(版築)できる。

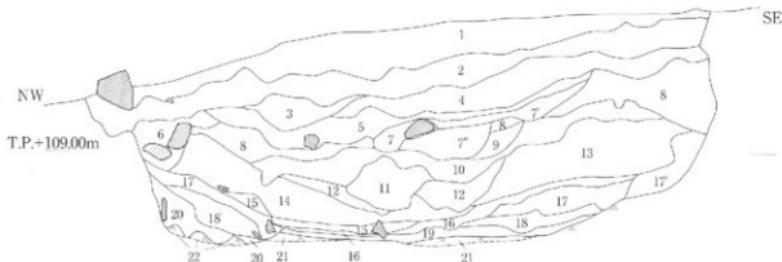


第15図 5号墳周濠断面実測図



- 図例
- 1 明黄褐色10YR6/6砂混じり粘土質粘土
2 黄褐色25Y5/6・にがい黄褐色10YR5/4砂混じり粘土質粘土
3 にがい黄褐色10YR6/4砂混じり粘土質粘土
4 にがい黄褐色25Y6/4砂混じり粘土質粘土
5 にがい黄褐色10YR6/4砂混じり粘土質粘土
6 にがい黄色25Y6/4砂混じり粘土質粘土 大塊含む
7 にがい黄褐色10YR6/4砂混じり粘土質粘土
8 にがい黄褐色10YR6/4砂混じり粘土 複合
9 岩灰青色25Y5/2砂混じり粘土質粘土
10 桃色10Y5/1砂混じり土 炭化物含む
- 図例
- a にがい黄褐色25Y6/4砂混じり粘土質粘土
b 桃色10Y6/2砂混じり粘土質粘土
c 灰褐色25Y6/2砂混じり粘土質粘土
d にがい黄褐色25Y6/2砂混じり粘土質粘土
糊土
○ にがい黄褐色10YR6/3砂混じり粘土質粘土
△ にがい黄褐色25Y6/3砂混じり粘土質粘土
× にがい黄褐色25Y6/3砂混じり粘土 褐色含む

第16図 5号墳上面および掘削断面実測図 (1/100)



- 1 黄褐色 2.5Y6/1 砂塵土
 2 にぶい黄褐色 10YR5/4 砂礫混じり砂質シルト
 3 オリーブ褐色 2.5Y3/3 砂塵土
 4 鮎灰褐色 2.5Y4/2 砂礫混じりシルト質土
 5 鮎灰褐色 3G5/1 シルトにぶい黃褐色 10YR6/4 シルト粒含む
 6 黄褐色 2.5Y5/3 砂塵土じり土
 7 灰褐色 10YR5/2 砂礫混じりシルト オリーブ褐色 5G5/6/1 砂粒含む
 8 黄褐色 2.5Y5/3 砂礫混じりシルト
 9 にぶい黄褐色 10YR5/3 砂礫混じりシルト質土
 10 黄褐色 10YR5/1 砂礫混じりシルト質土
 11 にぶい黄褐色 10YR5/3 砂礫混じりシルト質土
 12 にぶい黄褐色 10YR5/2 砂礫混じりシルト やや粘土質 にぶい褐色 7.5YR6/4 明オリーブ褐色
 13 鮎灰褐色 2.5Y5/2 黄褐色 2.5Y5/3 砂礫混じりシルト質土 淡黄色 2.5Y7/4 砂粒含む
 14 灰褐色 5Y5/1 砂礫混じりシルト質土
 15 オリーブ褐色 5G5/1 砂礫混じり土 ややシルト質
 16 鮎灰褐色 2.5Y5/3 砂礫混じりシルト 色濃い赤褐色 5YR5/4 シルト粒含む
 17 にぶい黄褐色 10YR5/2 砂礫混じりシルト質土
 18 にぶい黄褐色 10YR5/4 砂礫混じり砂質土 ややシルト質
 19 鮎灰褐色 2.5Y5/2 砂礫混じりシルト
 20 灰褐色 10YR5/2 砂礫混じり粘土質シルト
 21 灰褐色 5Y4/1・3/1 砂礫混じりシルト質土
 22 黄褐色 10YR5/6 砂礫混じり粘土<堆山>

第17図 5号墳墓坑内埋土断面実測図 (1/20)

周濠(SD 1)は、北東部から南にかけて検出した。東から南部は斜面化されたおりに(時期不明)削平されたため、底部部分が残存していたのみであった。周濠の残存の幅は4.5~0.8m、深さ0.4~0.05mを測った。埋土は灰黄褐色・にぶい黄褐色砂礫混じりシルト質土などで、北東部での器台片群をはじめ、3箇所に土器群が見られた。脚部(37~39)、杯身(40~41)、壺(42~44)、壺(45~46)などの須恵器、土師器の壺(47)などが出土した。

e. 石室状況

検出面よりの墓坑はほぼ残存していたが、石室および埋葬関連のものはほとんどなく、左側壁の1石と石抜き取り穴大小15箇所、須恵器杯身(22~24)、杯蓋(25~27)、脚部(28~29)、壺(30~31)や壺、甕、土師器、弥生土器、陶器(丹波焼)などの土器片を検出したのみであった。石抜き取り穴には側壁石の底部残骸や根石、墓坑壁面になどに裏込めの上および石の残存していたものもあった。

羨道前面は西への傾斜面をなし、石室の側壁・奥壁に使用された石材および遺物のはほとんどは羨道側より取り出されたようである。石室の最下層部より陶器の徳利などが出土し、近世以降(近・現代)に破壊されたことが判った。

検出した墓坑は、最大高15m、東西幅3.6m、南北長約10mを測った。石抜き取り穴の上部はほぼ墓坑と一致するところもあり、上述したように封土は石を据えながら盛られていたことが知れる。墓坑底で検出した石抜き跡に根石が残存するとともに、壁面に沿って一部裏込め(灰色砂礫混じりシルト質粘土など)が見られた。

石の抜き跡状況から、右片袖式の横穴式石室と考えられる。抜き取り跡は据え付け時の穴より大きくなっていることから、構築当初の石室規模は明確にしがたい。現存する底面は、玄室の幅1.5m以上、長さ4m以上、羨道の長さ4.4m以上、幅1.2m以上を測り、全長は8.4mを越えるものであったと考えられる。

F. 出土遺物(第18図 図版33・45・46・61)

墓坑、墳丘、周濠から須恵器、土師器が出土した。

土器

墓坑出土土器(22～31)

22～31は須恵器である。杯身、杯蓋、脚部、壺の器種がある。

22～24は杯身である。体部は内傾して立ち上がり、受部は水平方向へ伸びる。立ち上がり部はやや外反し、短い。口縁端部は尖り気味に終わる。体部下半は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。

25～27は杯蓋である。口縁部はやや内傾し、口縁端部は尖り気味に終わる。25は天井部が平らで、天井部と口縁部の境が不明瞭である。天井部は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。

28・29は脚部である。28は長脚の高杯である。脚部半ばから外反して広がる。裾端部は面を持つ。透かし孔は長方形で3方向に配置する。焼成時のゆがみで大きく傾いている。内外面は回転ナデ調整する。29は脚部が外反し、裾端部は面を持つ。透かし孔は2方向または3方向に配置する。外面に1条の沈線文を巡らす。外面は回転ナデ調整する。

30・31は短頸壺である。体部は丸みを帯び、肩部は張る。口縁部はわずかに外反し、口縁端部は丸く終わる。30は肩部の張りが強い。内外面は回転ナデ調整する。31は底部が丸底を呈する。体部下半は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。

墳丘出土土器(32～36)

32～36は須恵器である。脚部、甌、壺の器種がある。

32は脚部である。外下方へ八の字形に開き、脚端部は面を持つ。外面に1条の沈線文を巡らす。外面は回転ナデ調整する。高杯または台付甌の脚部と考えられる。

33は甌である。口頭部は大きく外反した後、外上方へさらに外反して立ち上がる。口縁部と頸部の境に段がつく。口縁端部は尖り気味に終わる。外面は回転ナデ調整する。

34～36は壺である。口縁部は大きく外反する。口縁端部は外側へ肥厚し、丸く終わるものと面を持つものがある。口縁部内外面は回転ナデ調整する。35は体部外面をタタキの後、カキメ調整する。内面に当て具痕が残る。

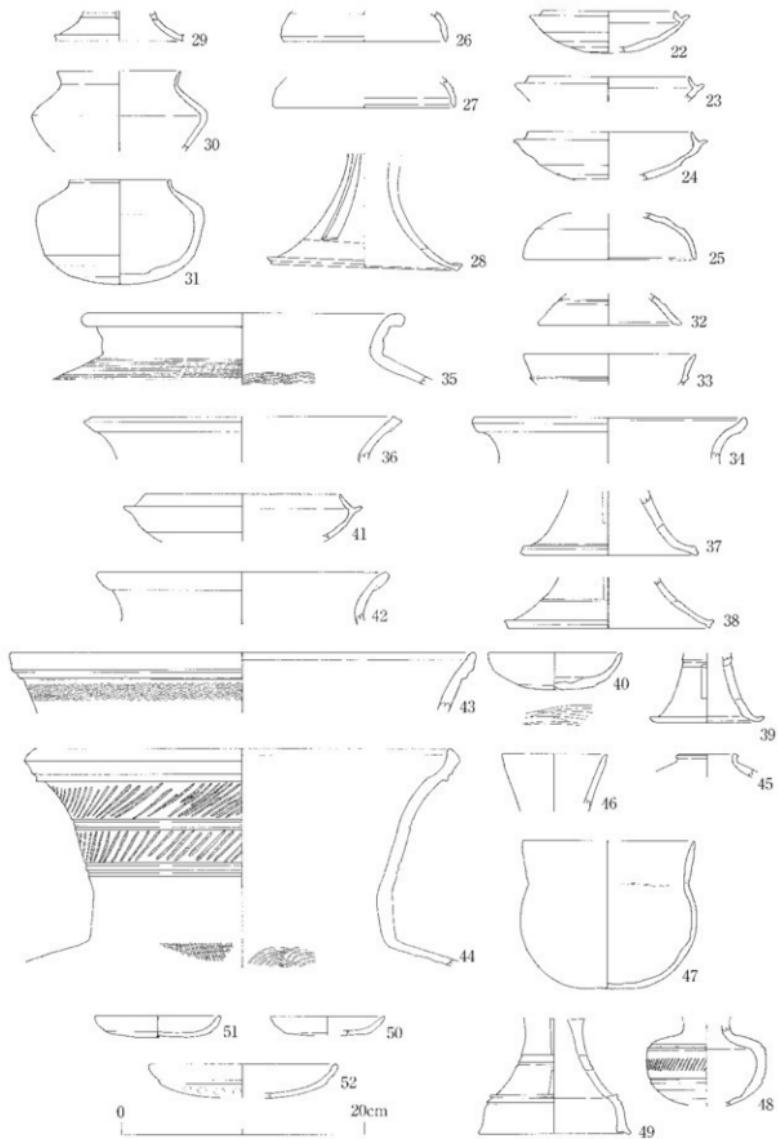
周濠出土遺物(37～47)

37～46は須恵器である。脚部、杯身、壺、壺の器種がある。

37～39は脚部である。脚部半ばから外反して広がる。裾端部は面を持つものと尖り気味に終わるものがある。37・38は2方向または3方向、39は2方向に透かし孔を配置する。外面は回転ナデ調整する。

40・41は杯身である。40は底部がやや丸い平底を呈する。体部は内傾して立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。外面は回転ナデ調整する。底面に8条の線刻がある。41は体部が内傾して立ち上がり、受部は水平方向に伸びる。立ち上がり部はやや外反する。口縁端部は尖り気味に終わる。体部下半は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。

42～44は壺である。口縁部は大きく外反する。口縁端部は外側へ肥厚し、丸く終わるものと面を持つものがある。42は口縁部内外面を回転ナデ調整する。43は口縁部外面に櫛描波状文を施す。内面は回転ナデ調整する。44は他に比して口縁部が長い。口縁端部外面は面を持ち、1条の沈線文を巡らす。口縁部外面は沈線文を2条単位で3ヶ所に巡らし、その間に櫛描列点文を1帯施す。体部外面は格子状のタタキ調整する。内面に当て具痕が残る。



第18図 5号墳・SK I・SK 8出土遺物実測図

45・46は壺である。45は短頸壺である。口縁部はわずかに外反し、口縁端部は面を持つ。内外面は回転ナデ調整する。46は長頸壺である。口縁部は外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。

47は土師器の壺である。底部は丸みを帯びた平底を呈する。体部はあまり張らない。口縁部は上方へ伸び、口縁端部は尖り気味に終わる。外面は摩滅が著しく調整法は不明である。内面はナデ調整する。

g. 小結

5号墳について判明したことを列記しておく。

古墳は尾根北斜面および土石流段丘上にあり、それを北東-南西方向に穿って墓坑とし、主体部の横穴式石室を構築していた。

墳丘上部は欠損していたが封土の一部は残存し、周縁も破壊・攪拌されてはいたが、周濠の確認などから、径約17m円墳である。

墳丘の封土は、南東側は地山上、北西側は土石流段丘上の堆積土・旧表土の上から構築されていた。

石室および封土の構築は、地山・土石流段丘を穿った墓坑に石室の1段目を据え、1段目上部から封土を盛りはじめ、2段目以降は石を積み上げながら封土を盛っていたものと考えられる。

周濠は、北側などは欠損し、北東から南東にかけては削平されてはいたものの幅45~0.8mが存し、3箇所から須恵器大甕片などの土器群を検出した。

墳丘上1箇所、墳丘裾2箇所から須恵器甕片・土師器片などの土器群が出土し、墳丘部での祭祀遺物と考えられる。

検出した墓坑は、最大高15m、幅3.6m、長さ8.8mを測り、墓坑内で石室の1石と石の抜き跡を検出した。

主体部は、玄室の幅1.5m以上、長さ4m以上、羨道の幅1.1m以上、長さ4.4m以上の南西に開口する右片袖式の横穴式石室と思われる。

墓坑内からは、須恵器片など少量の古墳時代埋葬時の遺物は出土したが、底面付近から磁器片が出土するなど、石抜きは近世・近代以降で、埋土の大半は近代以降である。

5. 3・5号墳間(第19～21図 図版6・7)

3号墳と5号墳の関連を知る上でその間の旧畠地およびその斜面地を中心に機械掘削を行なったところ、3号墳に伴う周濠はなかったが、上記の5号墳の墓坑・墳丘および周濠(S D 1)とともに10基の土坑(SK 1～9・I)を検出した。

a. 遺構

SK 1は、埋土がオリーブ褐色砂礫混じり砂質シルト、灰オリーブ色砂礫混じり粘質土、灰オリーブ色砂礫混じりシルト質土であったが、遺物は出土していない。SK 2は、埋土が灰オリーブ色砂礫混じり粘質土、灰オリーブ色砂礫混じりシルト質土、黄褐色砂礫混じりシルト質土であったが、遺物は出土していない。

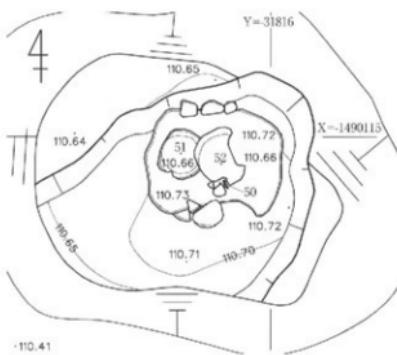
SK 3・4は、SK 3はSK 4埋没後に掘削されたもので、にぶい黄褐色砂礫混じりシルト質土で埋まっていた。SK 4は、埋土が黄褐色砂礫混じりシルト質土、オリーブ黄色砂礫混じり粘土質シルト、明褐色・にぶい黄褐色砂礫混じりシルト質粘土であった。ともに遺物は出土していない。

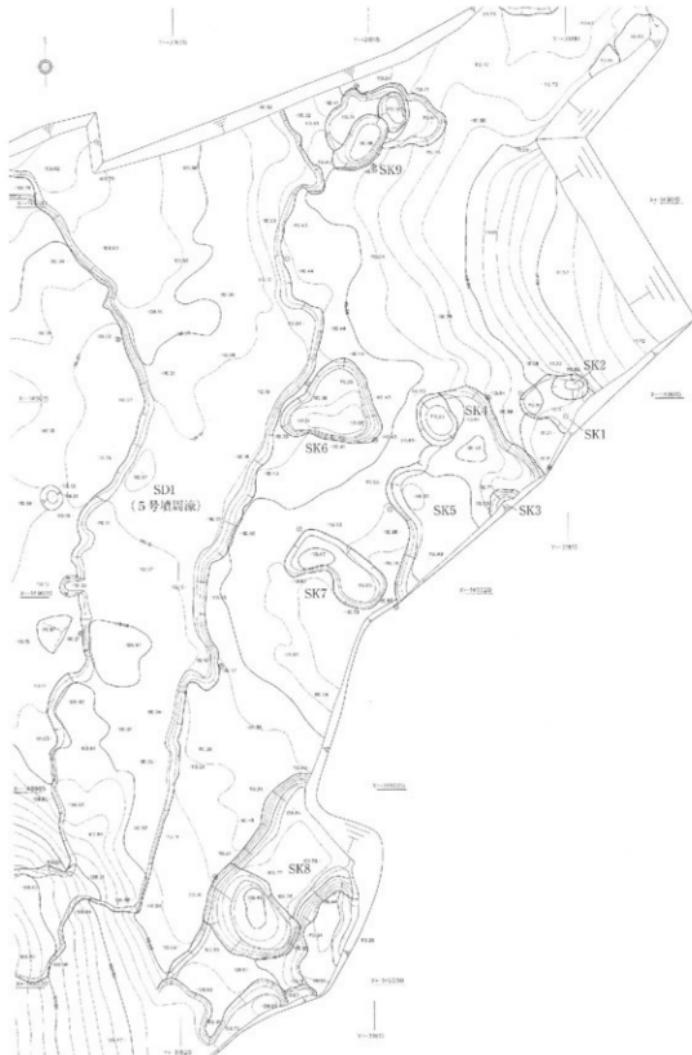
SK 5は、埋土が灰黄褐色砂礫混じり土、にぶい黄褐色砂礫混じりシルト質土であった。SK 6は、埋土が灰オリーブ色砂礫混じり粘質土、灰オリーブ色砂礫混じりシルト質土。SK 7は、埋土がオリーブ褐色砂礫混じり砂質シルト、灰オリーブ色砂礫混じり粘質土、灰オリーブ色砂礫混じりシルト質土であった。いずれの土坑からも遺物は出土していない。

SK 8は、埋土のにぶい黄色・明黄褐色砂礫混じりシルト質土、オリーブ灰色砂混じり土、にぶい黄色砂混じりシルト質土、灰オリーブ色砂礫混じり土などで、須恵器の趨(48)・脚部(49)が出土してはいるが、下層で磁器片を検出した。

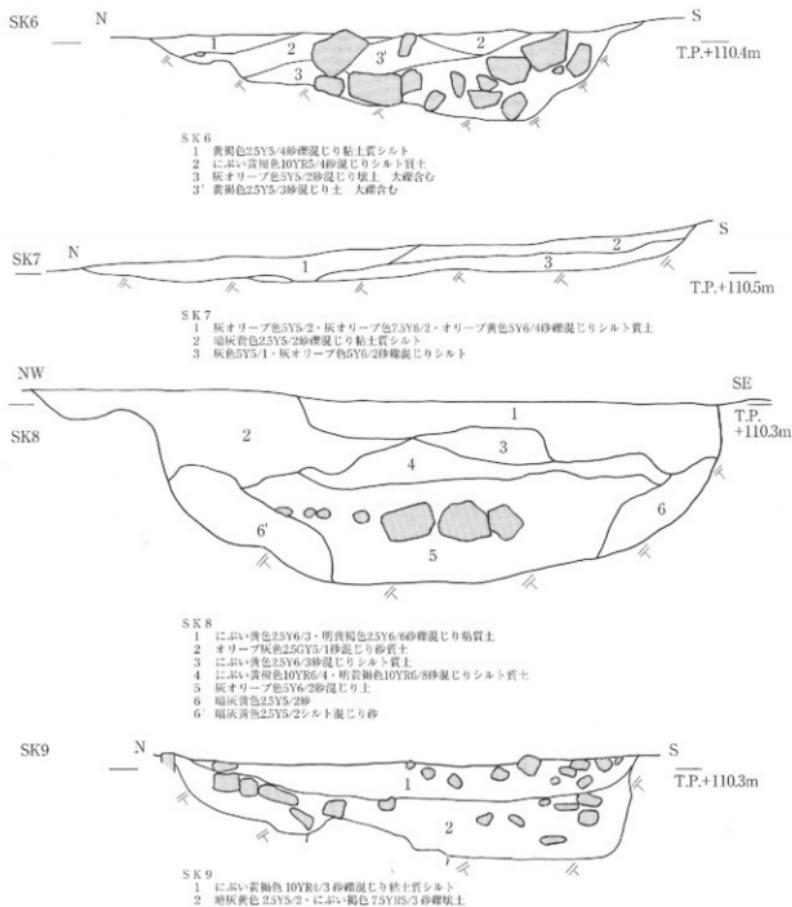
SK 9は、5号墳周濠と3号墳築道の間に位置する。埋土は2層に分かれ、にぶい黄褐色砂礫混じり粘土質シルト、暗灰黄色・にぶい褐色砂礫壤土であるが、遺物は出土していない。

SK Iは、機械掘削時に前述した5号墳の墳丘などに点在していた土器群とともに、時期は異なるが破損した土師器羽釜と皿が検出されていた。調査の進行とともに土坑内に埋納されていたことが判明し、SK Iとした。羽釜は横に配されてあったが、上部の大半は破損し、肩部の一部が残存していたのみで、その上から土師器の大皿・小皿(50～52)を検出した。すなわち、横たえて埋納された土師器羽釜内に3枚の上師器の皿が納められていたと考えられる。埋土は、黄褐色砂礫混じりシルト質土であった。





第20図 3号墳漢道前部から5号墳周辺平面実測図 (1/125)



第21図 3・5号墳間主要遺構断面実測図(1/20)

49は脚部である。脚部半ばから外反して、裾部でゆるやかに内湾する。脚部と裾部の境に段を持つ。裾端部は面を持つ。透かし孔は2段3方向に配置する。脚部に2条、脚部と裾部の境に2条の沈線文を巡らす。台付壺の脚部と考えられる。

S K I 出土上器(50～52)

50～52は土師器の皿である。50・51は小皿である。底部は平底を呈する。体部の立ち上がりはゆるやかで、口縁端部は丸く終わる。内外面はナデ調整する。52は大皿である。底部は丸みを帯びた平底を呈する。体部はゆるやかに立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面はナデ調整する。底面に指頭圧痕が残る。

6. 6号墳(第22～27図 図版11～16)

a. 調査前状況など

昨年実施した確認調査(第3次調査)において、右側壁の一部および石棺材・須恵器などの遺物片を検出していった。

古墳上部にあった腐食土および現代の盛土は1.5m以上を測った。機械および人力掘削で除去したところ、土石流段丘(明黄褐色砂礫混じりシルト質土)面が半楕円柱状に露呈し、墳丘の封土はほとんど残存していなかった。その上部平坦面からは、石室に使用されていた石群(抜き取られて残された石)、墓坑の肩および石抜き取り時の搅乱坑の肩を検出するとともに、奥壁および側壁石の一部が露出した。

b. 古墳の形・規模

上記の半楕円柱状の高まりは、裾部のところどころが擾乱されてはいたものの、北北東～南南西を長軸としていた。その北側で墳丘裾、南で石室前面からつづく墳丘裾の列石の1石を検出し、南北(北北東～南南西)長は約18.5mを測った。東西は、西に構築された10号墳の墓坑によって削られていたために西端は明確ではないが、東端との関係から約16mであったと思われる。墳丘はやや南北方向に長い円墳である。残存高は約1.5mを測った。

古墳の周囲は後世、ほとんどは近・現代の開闢・整地などによって擾乱されていた。北側に若干の窪みがみられたものの(第22図)、東および南では濠状の痕跡を見い出されず、周濠は伴ってはいなかつたと考えられる。

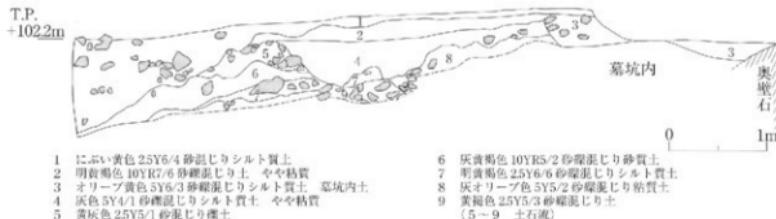
c. 古墳形成状況

古墳の存在箇所は、西に突出した尾根先端に形成された鳴川がもたらした土石流段丘上であり、その南斜面に構築されていた。そのため、現在の盛土などを除去して露出した古墳上面およびその周辺は、大礫が散乱する砂礫土なし明黄褐色砂礫混じりシルト質土の自然堆積層(土石流)であった。この層を穿った墓坑があった。

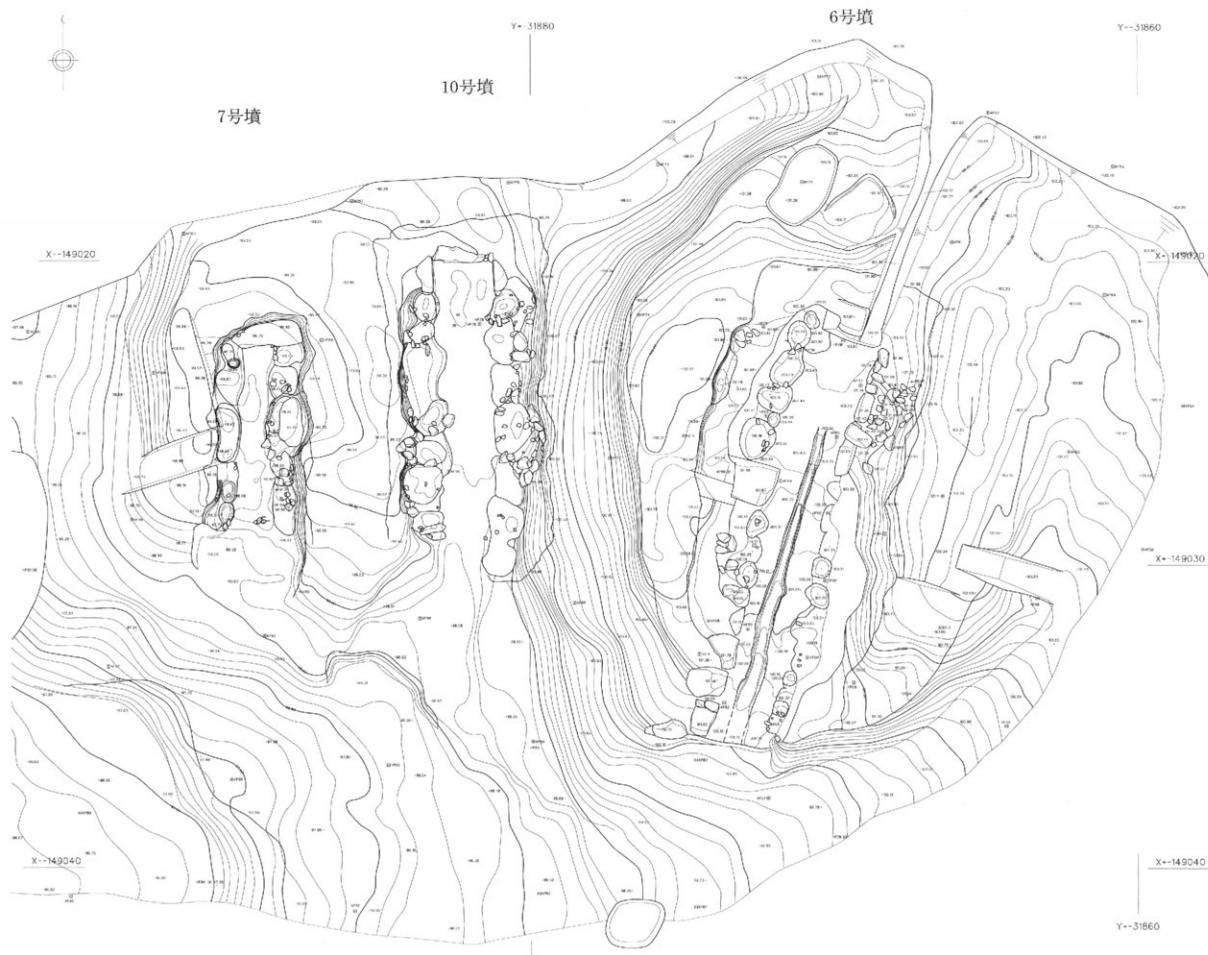
d. 墳丘状況

墳丘の上部はほとんど削平されて残存していなかったため、版築など封土状況は不明である。西・南に傾斜していた土石流段丘の南斜面を北北東～南南西方向に掘って墓坑と成し、石室の奥壁および左右側壁の1段を据えてのち、石を積みながら封土を盛り、墳丘を構築していっていたものと思われる。

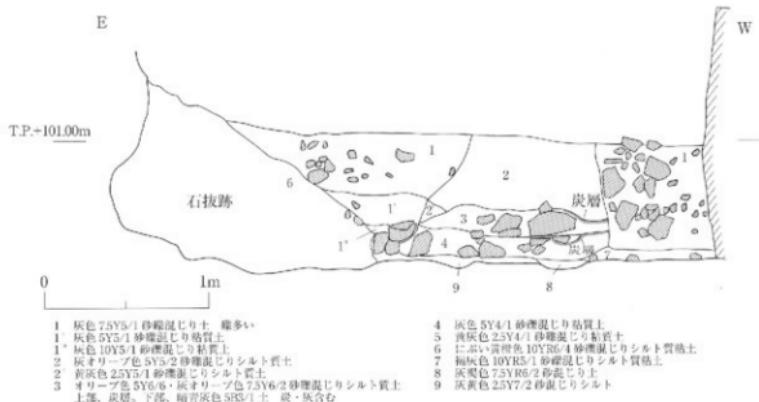
石室漢道の右側壁端から墳丘裾がまわり始める箇所に大石塊が配されていた。墳丘裾部は西が10号墳の存在(10号墳の墓坑によって墳丘・土石流層は大きく抉られていた)、大半は近年の搅乱により凹凸が激しく、列石をなしていたかは不明である。



第22図 6号墳墳丘北外理土状況断面実測図



第23図 6・10・7号墳平面実測図 (1/125)
- 29・30 -



第24図 6号墳石室内埋土断面実測図

e. 石室状況

石室の残存状況は、玄室部は奥壁1石段、左側壁の奥側4石1～2段、右側壁は残存せず、羨道部は右側壁の玄室境1石1段と入口側5石1～2段のみで、右側壁は残存していなかった。石の抜き取り跡の埋土内からは須恵器・土師器の小・細片とともに磁器片(肥前焼)なども出土し、石は近世以降、とくに近代に抜き取られたものといえる。抜き跡底面には根石、墓坑壁面に沿っては裏込めの土・石が残っていたところがあった。

残存していた石および抜き跡状況から、石室は南南西方向に開口する右片袖式の横穴式石室で、羨道の左側は玄室左側壁から少し外へ張り出した形を成していた。玄室の幅2.4m、長さ5.0m、羨道の幅2.0m、長さ9.4m、全長14.4mを測る。

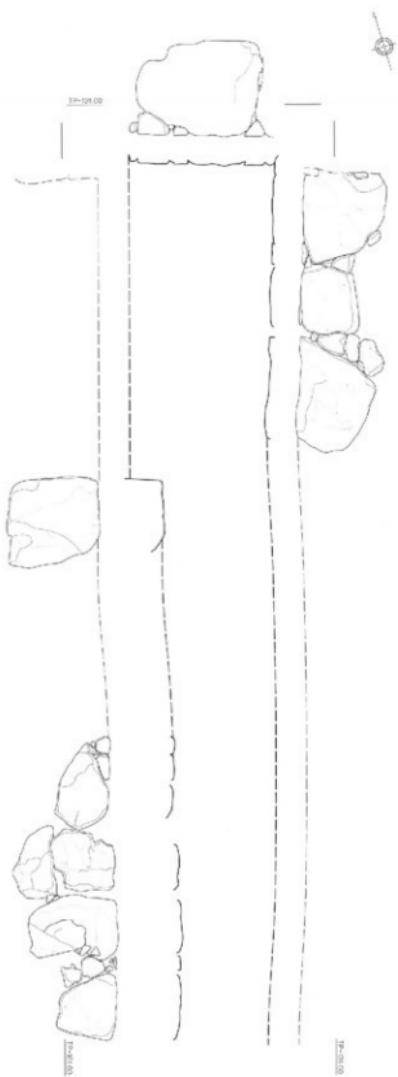
玄室の左側壁は奥壁よりさらに奥に延びており(抜き跡状況から右側壁も)、両側壁は奥壁を挟むよううに据えられていた。右側壁は玄室・羨道境に大砾を据えてから玄室奥へと積んでいったと考えられる。

構築当初の床面は、厚さ1～3cmの灰黄色砂混じりシルト質土で化粧されていた。排水溝はこの面を穿っており、敷石敷設時のものである。

P 33・34 第26図 6号墳平面および断面実測図の層名

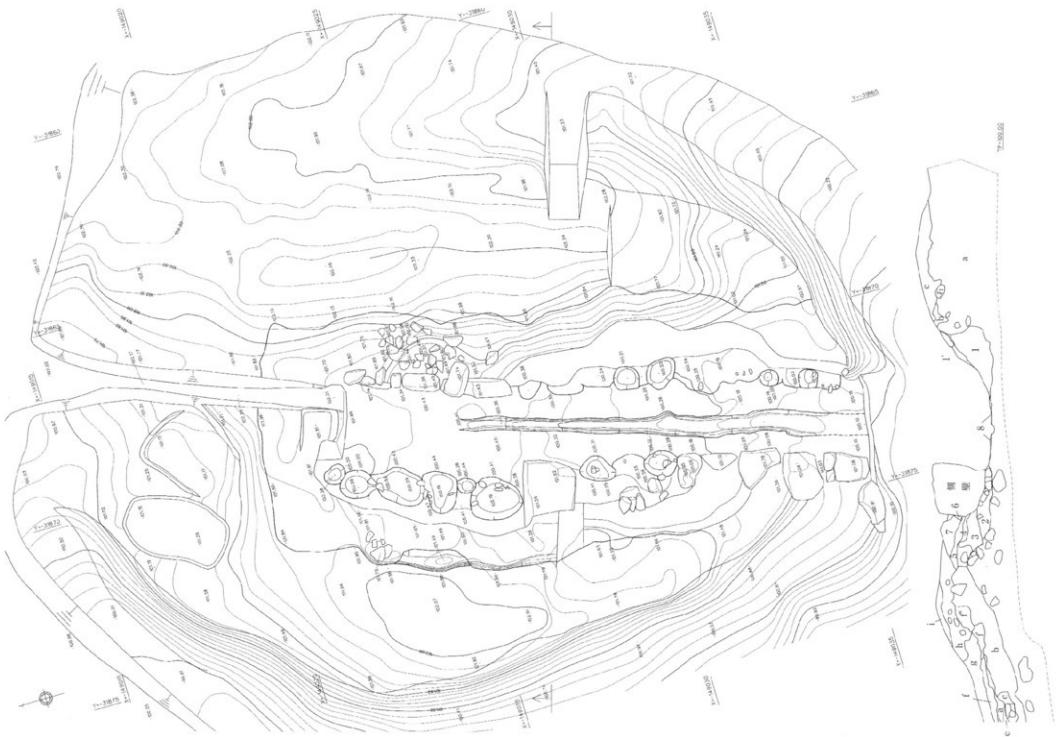
左側壁石抜き跡の埋土

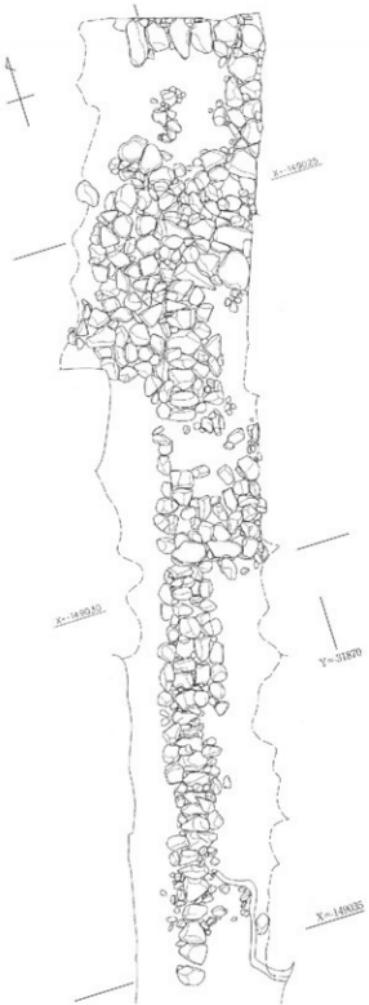
- 1 オリーブ色 5Y6/3・灰黄色 5Y5/1 砂礫混じり土
 - 1' 灰色 7.5Y5/1 砂混じり砂質土
 - 右側壁剥離止め土
 - 2 深灰色 2.5Y5/2 砂礫混じり土
 - 3 深黄色 2.5Y5/2 砂礫混じり土
 - 4 灰オリーブ色 5Y5/2・にぶい黄色 2.5Y4/4 砂礫混じり土
 - 5 灰色 5Y5/1 砂礫混じり土
 - 6 深灰色 2.5Y5/1 砂礫混じり土
 - 7 灰オリーブ色 5Y5/2・明黄色 2.5Y6/6 砂礫混じりシルト質土 炭化物含む
 - 石室床剥離り付け土
 - 8 灰黄色 2.5Y7/2 砂混じりシルト
- #### 自然堆積
- a にぶい黄色 7SYR6/4 砂混じりシルト質土
 - b にぶい黄褐色 10YR6/4・灰黄色 2.5Y6/2 砂混じりシルト質土
 - c 明黄色 10YR6/4・灰黄色 2.5Y5/1 砂礫混じりシルト質土
 - d にぶい黄色 7SYR6/4 砂混じりシルト質土
 - e 灰黄色 2.5Y5/2 砂混じりシルト質土
 - f にぶい黄褐色 10YR6/4 灰黄色 2.5Y6/2 砂混じりシルト質土
 - f' にぶい黄褐色 10YR6/2 砂混じりシルト質土
 - f'' にぶい黄褐色 10YR6/4 砂混じりシルト質土
 - g 灰黄色 10YR5/2 砂礫混じりシルト質土
 - h にぶい黄褐色 10YR6/2 砂礫混じり粘土質シルト
 - i にぶい黄褐色 10YR6/4・灰黄色 10YR5/2 砂混じりシルト質土



第25図 6号填石室 (1/80)

第26図 6号省平面および断面詳細圖 (1/100)





第27図 6号墳石室内敷石状況実測図(1/70)

に組合式石棺片が見られた(図版13)。このことから、古墳構築当初は上述した灰黄色砂混じりシルト質土面に組合式石棺が納められ、敷石は追葬時に敷設されたものであることが知れる(排水溝も)。追葬時は、鉄釘が出土していることから木棺が納められたようである。

石室内の埋土は、石抜き取り後のものが大半であった(第24図)。敷石上部からは、炭および炭化物を包含する平安時代末期から室町時代初期に再利用されたときの埋土を検出した。この埋土層は3層に分かれ、オリーブ色(5Y6/6)・灰オリーブ色(7.5Y6/2)砂混じりシルト質土を挟んで、上層は炭・炭化物を含む暗灰色(N3/0)砂混じりシルト、下層は炭・炭化物を含む暗青灰色(5B3/1)砂混じりシルト質土で、2時期にわたって利用されていた。これらの層からは、十師器の皿(122～126)、羽釜(127)と瓦器の椀(128～133)、羽釜(134)、火舟(135)などが出土した。また、この層および上部埋土内からは、須恵器の壺蓋(58～65)、杯蓋(66～72)、杯身(73～86)、高杯(87)、脚部(88～94)、甌(95～97)、壺(98～101)、甕(102～108)、器台(109～111)、土師器杯(112～121)などが出土した。

再利用時の層を取り除くと玄室と羨道中輔部に敷石があったが、奥壁近くおよび石抜き跡周辺にはなかった。玄室の敷石は、奥壁から左側壁側は壁に沿わせて配され、他はアトランダムに敷かれていた。羨道部は両側壁側にはなく、下部に穿かれた排水溝を蓋するように敷かれてあった(第27図)。敷石上面およびその周辺からは、須恵器の杯蓋(53)、杯身(54・57)、土師器杯(55・56)、馬具の轡(138)、引手(139・140)、革帶金具(141)、部品(142～146)、鉄釘(147・148)、金銅製耳環(149)などが出土した。

排水溝は、玄室中半から羨道にかけ、その中央に穿かれており、幅0.25～0.5m、深さ0.03～0.01m、長さ10.9mを測り、入口に向かってゆるやかに傾斜していた。埋土は灰褐色砂混じり土であった。

敷石は自然石が用いられていたが、その中

f. 出土遺物(第28～32図 図版34・35・40～44・47～52・62・63)

玄室と中世期以降の搅乱層から須恵器、土師器、瓦器、弥生土器、鉄製品、金銅製品、石製品が出土した。

土器

玄室出土土器(53～57)

53・54・57は須恵器である。杯蓋と杯身の器種がある。

53は杯蓋である。口縁部はやや内傾し、口縁端部は丸く終わる。天井部と口縁部の境が不明瞭である。内外面を回転ナデ調整する。

54・57は杯身である。54は体部がやや内湾し、口縁部は上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。内面は降灰が著しく、調整法は不明である。外面は回転ナデ調整する。57は体部が外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。内外面を回転ナデ調整する。

55・56は土師器の杯である。55は底部がやや丸い平底を呈する。体部は内湾気味立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口縁端部は尖り気味に終わる。外面を回転ナデ調整する。56は体部が内湾して立ち上がる。口縁部はやや内傾し、口縁端部は尖り気味に終わる。外面を回転ナデ調整する。

中世期以降の搅乱層出土土器(58～137)

58～111は須恵器である。壺蓋、杯蓋、杯身、高杯、脚部、鍵、壺、甕、器台の器種がある。

58～65は壺蓋である。天井部は丸く、中央に扁平な摘みが付く。口縁端部は丸く終わり、内面にかえりを持つ。62・64・65はかえりが口縁部より下方へ張り出す。天井部は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。64は降灰が著しく外面の調整法は不明である。

66～72は杯蓋である。天井部は平らである。口縁部はやや内傾し、口縁端部は丸く終わる。66・67は頂部が窪んだ摘みを持つ。天井部と口縁部の境に稜が付く。有蓋高杯の蓋である。70～72は天井部と口縁部の境に稜が付くことから66・67と同形と考えられる。天井部は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。

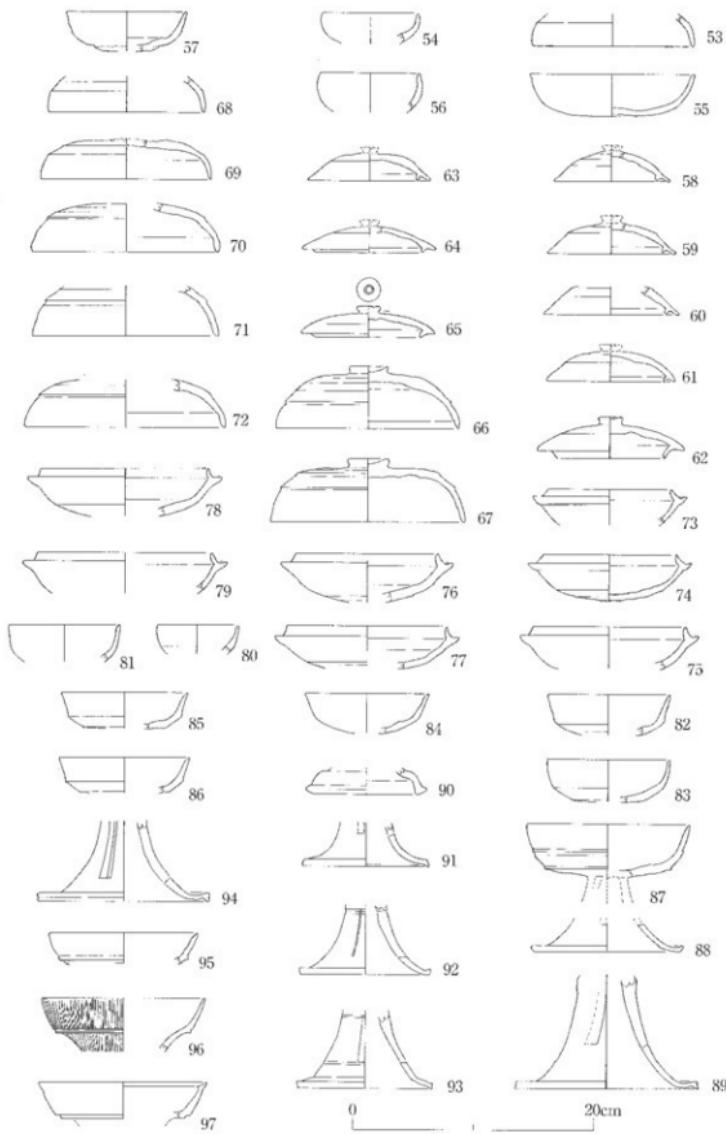
73～86は杯身である。受部を持つものと持たないものがある。73～79は体部がやや内傾して立ち上がり、受部は水平方向へ伸びる。立ち上がり部はやや外反して伸びる。体部下半は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。80～86は体部がやや内湾し、口縁部は上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く終わる。体部下半は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。

87は高杯である。底部は平底を呈する。体部は外上方へ立ち上がり、口縁端部は尖り気味に終わる。基部に3方向の透かし孔の痕跡がある。体部に2段の稜を持つ。外面を回転ナデ調整する。

88～94は脚部である。88・89・91～94は脚部半ばから外反して広がる。裾端部は面を持つ。94は裾端部を下方へ拡張する。外面を回転ナデ調整する。92は細い一直線の透かし孔を4方向に配置する。他は長方形のもので89・91は3方向、88・91は2方向または3方向、93は2方向に配置する。90は脚部半ばから外反して、裾部でゆるやかに内湾する。裾端部は面を持ち、外方へわずかに拡張する。外面を回転ナデ調整する。

95～97は鍵である。口頭部が大きく外反した後、外上方へ直線的に立ち上がる。口縁部と頭部の境に段がつく。口縁端部は尖り気味に終わる。96は外面に密なヘラ描きによる放射状の文様を施す。内面は降灰が著しく調整法は不明である。95・97は外面を回転ナデ調整する。

98～101は壺である。98は壺の口縁部である。口縁部は外上方へ立ち上がり、口縁端部はやや尖り気味に終わる。外面を回転ナデ調整する。99・100は台付壺である。底部は丸底を呈する。体部は丸みを帯び、肩部はやや張る。口縁部は外上方へ伸びる。透かし穴を3方向に配置する脚部が付く。



第28図 6号墳出土遺物実測図(1)

99は肩部と体部半ばに2条ずつ沈線文を巡らし、その間に櫛描列点文を施す。100は肩部に1条の沈線文を巡らす。体部下半は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。101は脚部である。脚部半ばから外反して、裾部でゆるやかに内湾する。脚部と裾部の境に段を持つ。裾端部は面を持つ。透かし孔は2段3方向に配置する。脚部に2条、脚部と裾部の境に2条の沈線文を巡らす。台付壺の脚部と考えられる。

102～108は壺である。口縁部は大きく外反する。口縁端部は面を持ち、わずかに上下へ肥厚する。102は口縁部外面に3帯の櫛描波状文を施す。103～108は口縁部外面に1条または2条の沈線文を巡らし、その間に櫛描波状文を施す。内面は103～105が回転ナデ調整、106～108はカキメ調整する。

109～111は器台である。109は杯部である。体部はやや内湾して立ち上がる。口縁部は強く外反し、口縁端部は丸く終わる。口縁部下に2条の沈線文を巡らす。沈線文以下にヘラ描きによる斜線の文様を施す。口縁部内面は回転ナデ調整する。体部内面に当て具痕が残る。110・111は脚部である。110は裾部である。裾端部は面を持つ。外面に2条の沈線文を巡らす。三角形の透かし孔を配置する。111は脚部半ばから外反して、裾部でゆるやかに内湾する。裾端部は面を持つ。最上段は長方形、その下に三角形の透かし孔を5段3方向に配置する。最下段は互い違いになるようにずらして配置する。2条の沈線文を5ヶ所に巡らし、その間に櫛描波状文を施す。脚部外面はカキメ調整、他は回転ナデ調整する。

112～127は土師器である。杯、皿、羽釜の器種がある。

112～121は杯である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口縁端部は尖り気味に終わる。113は底部が丸みを帯びた平底を呈する。口縁部は上方へ伸びる。外面は112～119はナデ調整する。120・121はヘラミガキ調整する。内面は112・113・115～119はナデ調整する。114・120・121は内面に放射状の暗文を施す。

122～126は皿である。122は小皿である。体部の立ち上がりはゆるやかで、口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面はナデ調整する。123～126は大皿である。体部の立ち上がりはゆるやかで、口縁端部は丸く終わる。口縁部外面はナデ調整する。125は体部外面に指頭圧痕が残る。12世紀。

127は羽釜である。体部は丸みを帯び、やや内湾して立ち上がる。口縁部は強く外反する。口縁端部は丸く終わり、上方へ肥厚する。体部上位に水平の錫が付く。外面はナデ調整する。12世紀。

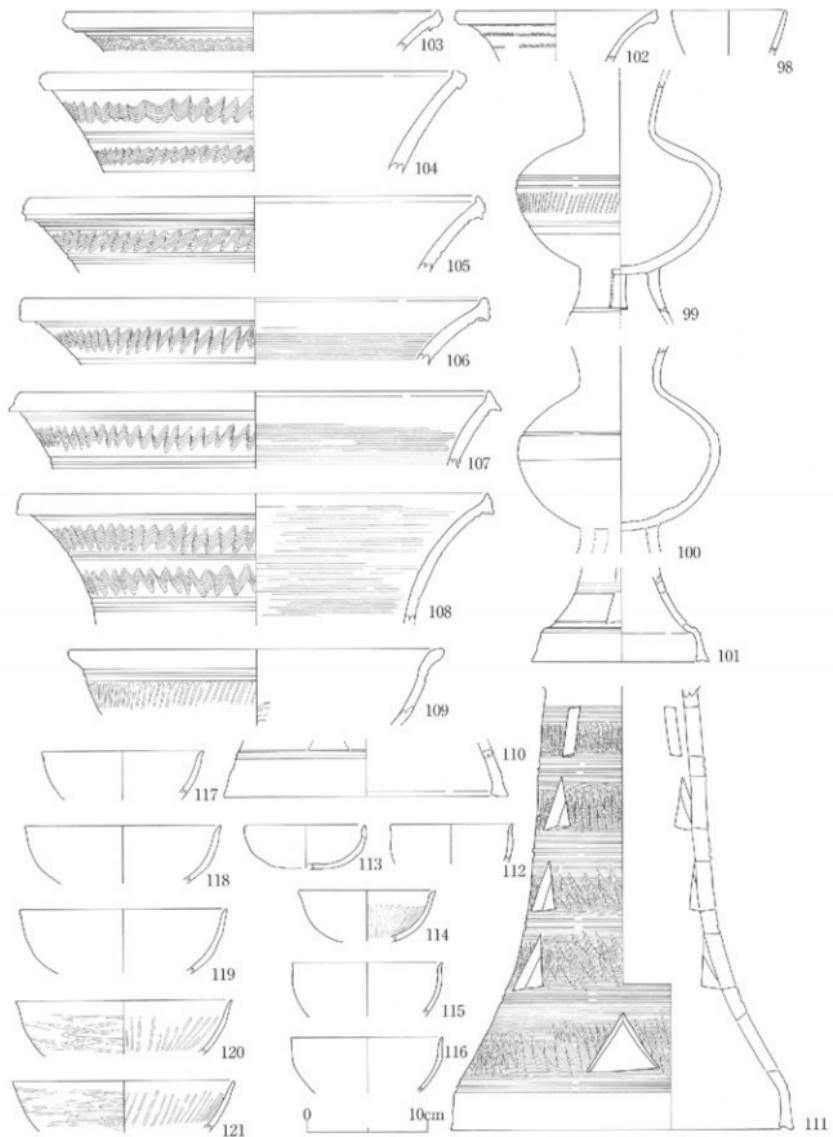
128～135は瓦器である。椀、羽釜、火舎の器種がある。

128～133は椀である。128～130は椀の底部である。底部は丸みを帯びた平底を呈し、断面形が三角形の高台が付く。外面はナデ調整する。内面は格子状の暗文を施す。131は体部が外上方へ伸び、口縁部はわずかに外反する。口縁端部は面を持ち、1条の沈線を巡らす。体部下半に指頭圧痕が残る。口縁端部は丸く終わる。132は体部外面に指頭圧痕が残り、上部にヘラミガキ調整する。内面は横方向に密なヘラミガキ調整する。133は内外面に横方向のヘラミガキ調整、見込み部に格子状の暗文を施す。12～13世紀。

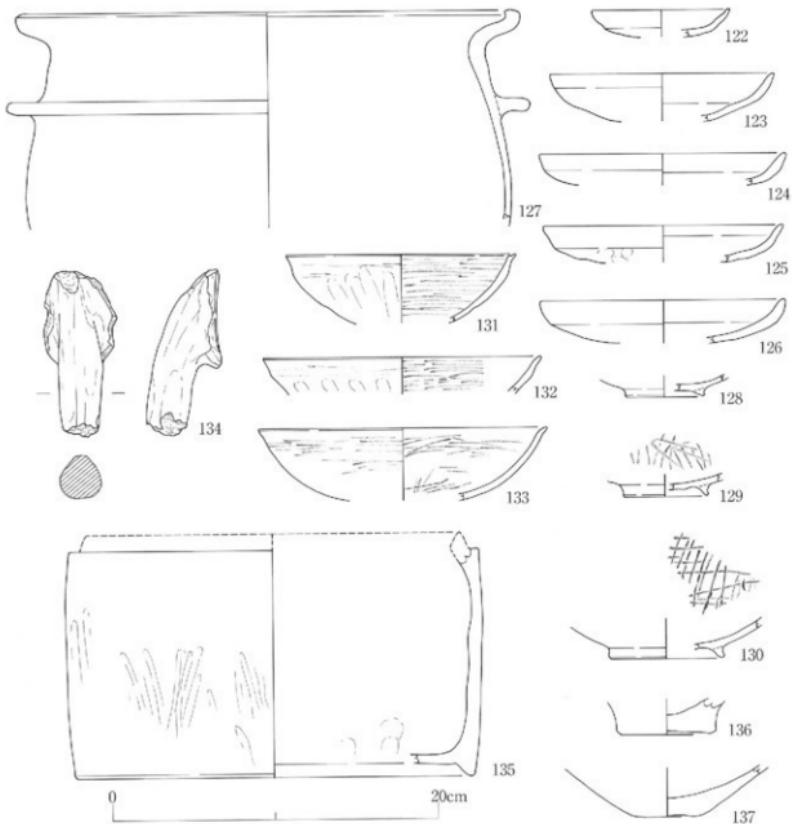
134は羽釜の脚である。先端で細くなる棒状を呈する。断面形は円形である。体部との接合面をナデ調整する。13～14世紀。

135は火舎である。底部は平底を呈する。体部と一体になった高台を有する。体部は上方へ伸び、ほとんど張らない。口縁部は内傾し、外側に段を持つ。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。底部付近に指頭圧痕が残る。14～15世紀。

136、137は弥生土器の底部である。底部は平底を呈し、体部は外上方へ伸びる。摩滅が著しく調整法は不明である。詳細な時期は不明である。



第29図 6号墳出土遺物実測図(2)



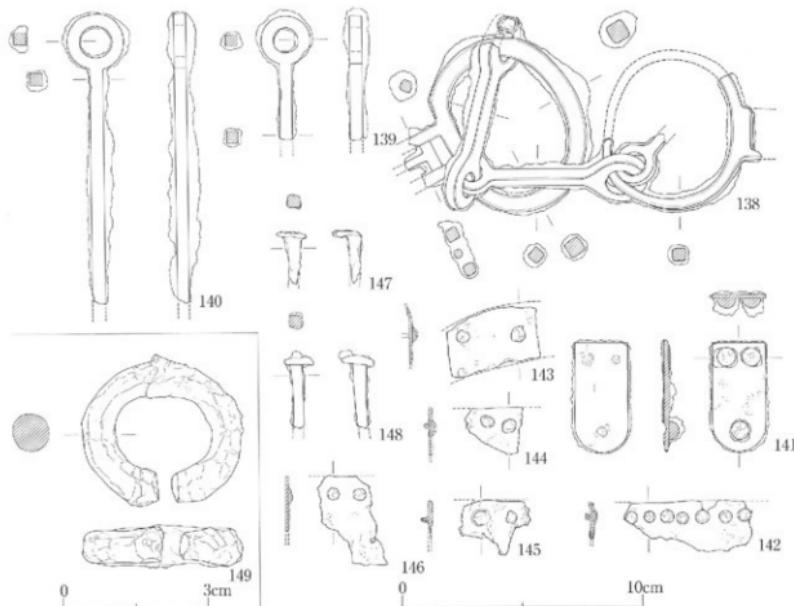
第30図 6号墳出土遺物実測図(3)

鉄製品(138～148)

138～148は鉄製品である。馬具、釘がある。

138～146は馬具である。138は帯である。銜・鏡板・引手が残る。鏡板は梢円形を呈する。立間に鉗具が付くことから鉗具造り立間帯である。銜は二連式である。両端に円環が付く棒状を呈する。断面形は方形である。一方は両端の円環が平行して付けられるが、もう一方は円環が直交して付けられている。これは銜と鏡板を接続したときに鏡板が平行を保つためである。銜の円環に鏡板と引手を同時に接続する。鏡板は長径7.3cm、短径5.8cm、厚さ0.7cmを測る。鉗具は残存長1.9cm、幅2.2cm、厚さ0.5cm、刺金の厚さ0.4cmを測る。銜は長さ8.4cm、円環の直径2.8cm、厚さ0.5cmを測る。引手は残存長2.1cm、円環の直径1.9cm、厚さ0.6cmを測る。古墳時代後期後葉～末葉 許1)。

139・140は引手である。断面形が方形の棒状を呈する。一端に円環が付く。139は残存長12.1cm、厚さ0.7



第31図 6号墳出土遺物実測図(4)

cmを測る。円環の最大径は2.3cmを測る。140は残存長5.2cm、厚さ0.5cmを測る。円環の最大径は2.0cmを測る。

141～146は馬具の部品である。141は革帶金具である。平面形は一方が方形、他方が半円形を呈する爪形である。鋲留めが方形側に2つ、半円形側に1つ残る。長さは4.6cm、幅2.2cmを測る。鋲の一部に鍍金が残る。142～146は同一個体と考えられる。非常に薄く0.1cm前後である。鋲留めは142が7ヶ所、143が3ヶ所、144～146が2ヶ所に残る。鍼の破片の可能性がある。

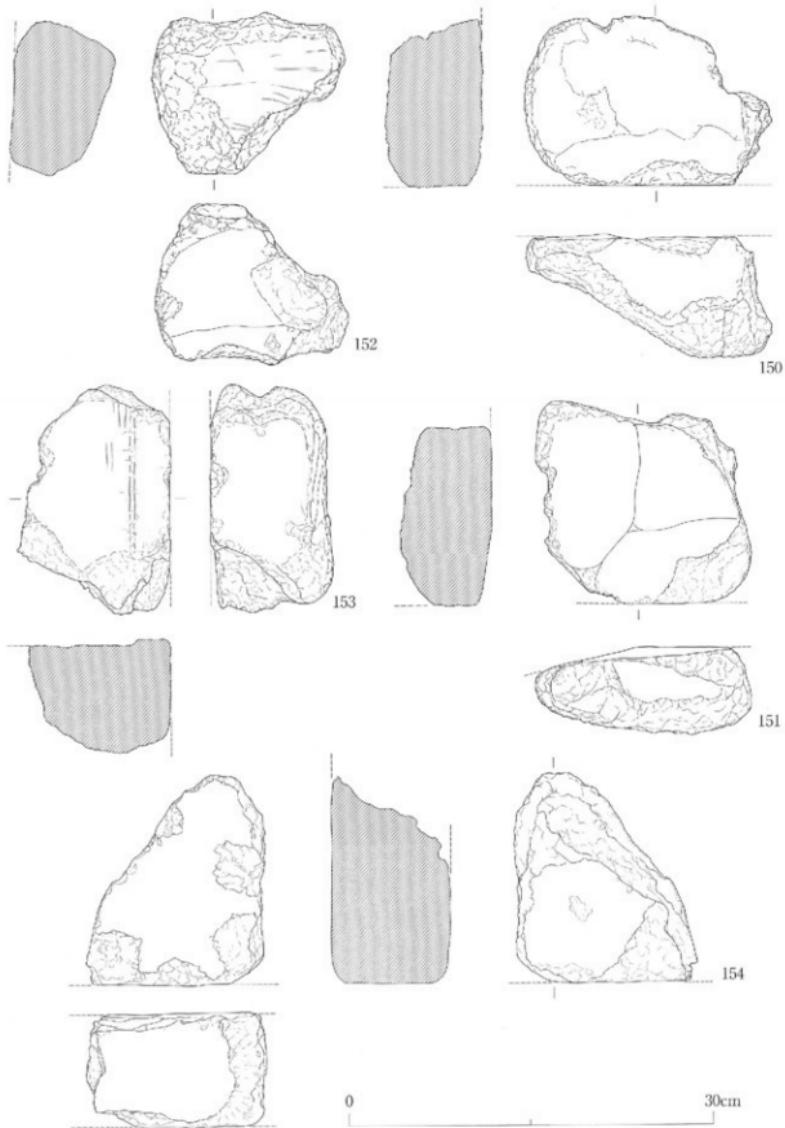
147・148は釘である。断面形が方形を呈し、先端は欠損している。本質の付着は見られない。147は頭部がL字形を呈する。148は頭部がT字形を呈する。147は残存長2.2cm、最大幅1.2cm、厚さ0.5cmを測る。148は残存長3.3cm、最大幅1.4cm、厚さ0.5cmを測る。

金銅製品(149)

149は金銅製耳環である。切れ目のある環形を呈する。断面形は円形である。最大径3.2cm、断面径0.9cmを測る。緑青が著しい。保存状態が悪く、鍍金は残っていない。

石製品(150～154)

150～154は石棺の破片である。やや荒く削った面を150～153は2面、154は3面持つ。152は工具痕が残る。組合式石棺の一部と考えられる。



第32図 6号墳出土遺物実測図（5）

g. 小結

6号墳について判明したことを列記しておく。

古墳は、土石流段丘上にあり、南斜面を穿って墓坑とし、主体部の横穴式石室を構築していた。

墳丘は、上部が大半欠損して封土はほとんどなく、周辺も攪拌されていたが、石室端の確認などから、18.5m×16mのやや南北方向に長い円墳と考えられる。

周濠は伴っていない。

主体部は、奥壁と側壁の一部が残存し、南南西方向に開口する右片袖式の横穴式石室で、玄室の幅2.4m、長さ5.0m、羨道の幅2.0m、長さ9.4m、全長14.4mを測った。

石室内は、石の抜き取り後の上・石で大半埋まっていたが、平安時代末期ごろと室町時代初期ごろの2時期に再利用された形跡を確認した。

排水溝を穿って敷設された追葬時の敷石と構築当時の底面を確認した。

遺物としては、須恵器の器台・壺・杯蓋・杯身・高杯、耳環、馬具の轡、組合式石棺片などが出土した。敷石内に組合式石棺片があり、築造当時に納められた石棺は、追葬時にはすでに破壊されていたことが判った(追葬時のときは木棺を使用)。

石室の石の大半は近代以降に抜き取られた。

7. 7号墳(第23・33～35図 図版17～20)

a. 調査前状況など

第3次調査において、墓坑の断面を菊水学園敷地と畠地間の斜面下部で検出していた。その上部には約1.5m以上の現代の盛土があった。盛土などを機械および人力掘削で除去すると、西部に墳丘の一部が残存していたものの、大半は大疊を含む明黄褐色・灰色砂礫混じりシルト質土(上石流層)で、主体部である石室の石が抜き取られた墓坑の輪郭を検出した。さらに古墳周縁部も搅乱されて欠損していた。

b. 古墳の形・規模

上述したように、主体部とともに墳丘の残存状況は極めて悪く、明確な墳形および規模は不明である。しかし、墓坑検出南端、墳丘北西部状況などから、南北11m以上、東西8m以上を測る円墳であったと考えられる。

c. 古墳形成状況

10号墳の西部にあった落ち込み(濠?、幅約6.5m)の堆積土(灰色砂混じり砂質土)・埋土(堆積土と地山の混土)上に2層の整地土と腐食土があって、これらを切り込んで南北方向の墓坑を穿ち、石室を構築して古墳が形成されていたと考えられる。このことから10号墳が先行し、その西端落ち込み(濠)の埋没・整地・放置後に7号墳が築造されたことになり、10号墳と7号墳は並行して存するが双円墳にはならない。

d. 墳丘状況

墳丘の基盤は6号墳同様、土石流段丘であったが、北西側に封土の一部が残存していた。その状況は下部から以下のとおりであった。

土石流段丘層=明黄褐色・灰色砂礫混じりシルト質土

①. 10号墳西の落ち込み堆積土および埋土=灰黄色砂礫混じり砂質土

②. 落ち込み埋土上自然整地上=灰オリーブ色砂礫混じり土

③. 整地・腐食土=灰色砂礫混じりシルト質土

この③を切り込んで墓坑が穿かれており、この層の上に人為的封土として、

④. 黄灰色・にぶい黄橙色砂礫混じりシルト質土

⑤. にぶい橙・緑灰色砂礫混じり粘土質土

⑥. 灰色・浅黄色砂礫混じりシルト質土

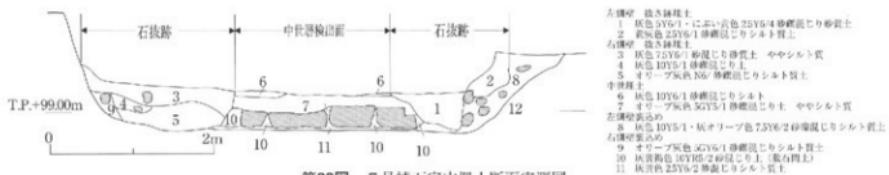
の3層が盛られていた。

墳丘の残存最大高さは0.6mを測った。

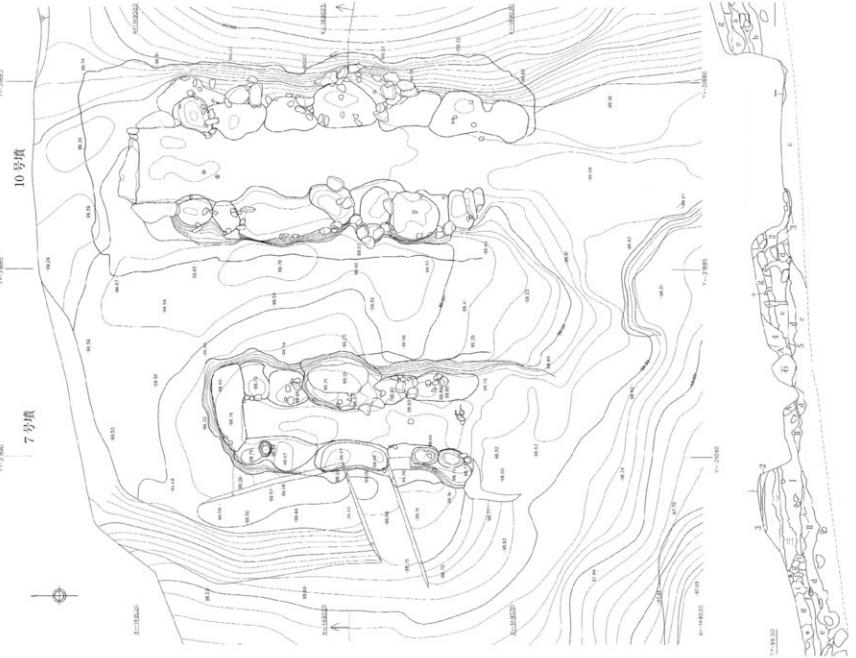
e. 石室状況

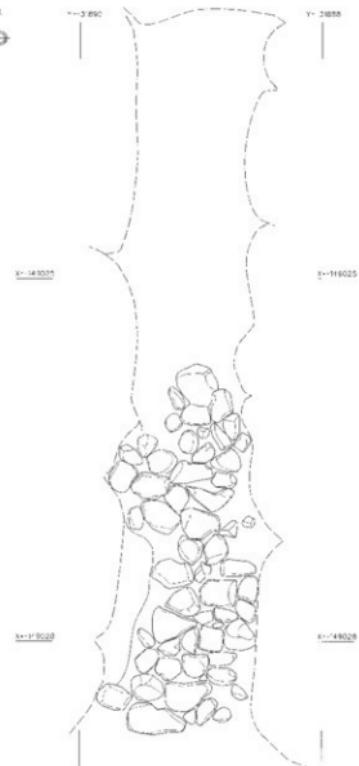
上述したように確認調査において、石室の石が抜き取られた袋状の墓坑の断面を検出していた。

盛土などを除去した後の土石流段丘層および灰色砂礫混じりシルト質土上面で検出した墓坑は、幅



第33図 7号墳石室内埋土断面実測図





第35図 7号墳石室内敷石状況実測図 (1/40)
たっている。

残存していた敷石は床面に接し、表面および接合が描い総密であったことなどから築造当初のものと考えられたが、この敷石を除去した下に灰黄色砂混じりシルト質土=築造当初の基底面が広がり、その3箇所に径5~20cmのピット状の焼跡(中心部は黒赤色、周縁にかけては黒色を呈した)とその周辺部に散乱する焼土、炭を検出した。このピット状の焼跡は、埋葬に伴った焚火と考えられる。

墓坑西南部は全く欠損し、石室の全石は抜き取られ(1石は埋め込まれていた)、その抜き跡は石据え付け穴より大きくなっていることから、石室の正確な形態、規模はわからない。しかし、玄室と羨道の境は見られず、残存する敷石最大幅、墓坑状況などから、無袖式の横穴式石室で、幅2.0m、長さ8.0mは有していたと思われる。

f. 出土遺物(第36図 図版43・52・64)

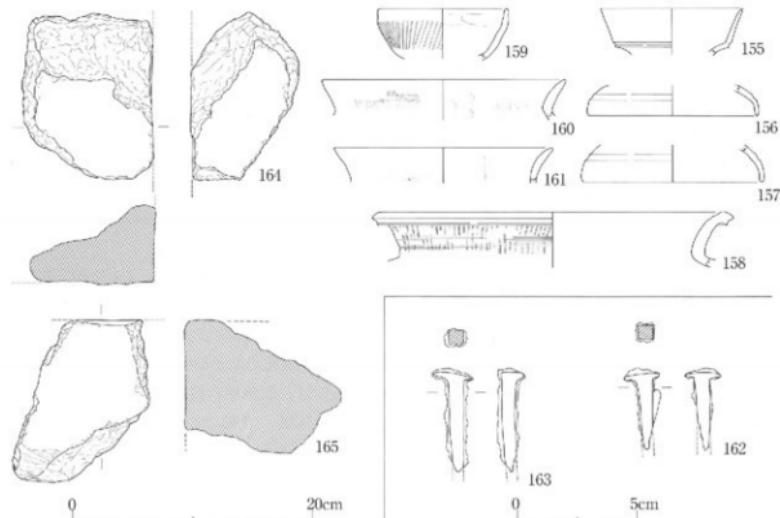
中世期以降の搅乱層から須恵器、土師器、鉄製品、石製品が出土した。

3.5~3.2m、長さ6.4~9.4m、深さ0.5~0.2mを測った。

墓坑内に残存していた土の大半は、石抜き取り後の埋土であった。この層および石抜き取り跡内の埋土=灰色・にぶい黄色砂礫混じり砂質土、黃灰色砂礫混じりシルト質土、灰色砂混じり砂質土、灰色砂礫混じり上、オリーブ灰色砂礫混じりシルト質土を除去すると(墓坑壁面などに石室構築時の裏込め=灰・灰オリーブ色砂礫混じりシルト質土=が残存している箇所があった)、①灰色砂混じりシルトおよび②オリーブ灰色砂礫混じり土が広がっていた。この層からは、須恵器の罐(155)、杯蓋(156・157)、甕(158)、土師器の杯(159)、甕(160・161)、鉄釘(162・163)、組合式石棺片(164・165)などとともに炭や土師器皿・細片が出土し、鎌倉時代(中世)の再利用時の埋土であった。

再利用時の層を除去すると敷石および石群があった。中央から入口側幅0.6~1.4m、長さ3.0mにわたって敷石が残存していたが、奥壁側は攪拌されて原位置を保っていないかった。

敷石上面からはほとんど遺物を検出することができなかった。①・②層内に古墳時代埋葬時の遺物が含まれており、すでに中世再利用時に擾乱されていたことをものかたっている。



第36図 7号墳出土遺物実測図

土器(155～161)

155～158は須恵器である。甌、杯蓋、壺の器種がある。

155は甌である。口頸部は大きく外反した後、外上方へやや内傾して立ち上がる。口縁部と頸部の境に段がつく。口縁端部はやや尖り気味に終わる。内外面は回転ナデ調整する。

156・157は杯蓋である。天井部と口縁部の境が不明瞭である。口縁部はやや内傾し、口縁端部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。

158は壺である。口縁部は大きく外反する。口縁端部は外側へ肥厚し、面を持つ。口縁部外面はタタキの後、回転ナデ調整する。内面は回転ナデ調整する。

159～161は土師器である。杯、壺の器種がある。

159は杯である。体部はやや内湾して立ち上がる。口縁部は内傾して上方へ立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。体部外面に成形時の工具痕が残る。内面はナデ調整する。

160・161は壺である。口縁部は外反し、口縁端部は尖り気味に終わる。内面はハケメ調整する。160は外面をハケメの後、ナデ調整する。

鉄製品(162・163)

162・163は釘である。頭部はT字形を呈する。断面形が方形を呈し、先端は欠損している。木質の付着は見られない。162は残存長3.4cm、最大幅1.5cm、厚さ0.6cmを測る。163は残存長4.3cm、最大幅1.7cm、厚さ0.6cmを測る。

石製品(164・165)

164・165は石棺の破片である。やや荒く削った面を2面持つ。組合式石棺の一部と考えられる。

g. 小結

7号墳について判明したことを列記しておく。

古墳は、上石流段丘上に位置するが、10号墳西側にあった落ち込みが埋没した後の整地・腐食土層上面から築造していた。

10号墳西側の落ち込み部を利用し、南北方向に穿って墓坑を成し、その中に主体部の横穴式石室を構築していた。

墳丘は、北西部に封土の一部が残存していたが、大半は欠損してほとんどなく、周縁も搅乱され、円墳と思われるが、正確な規模も不明である。

石室は、石の抜き跡および敷石状態、墓坑および裏込め石の状況などから、南に開口する無袖式の横穴式石室で、幅約2.0m、長さ8.0m前後であったと思われる。

石室の石は、落とし込まれた側壁の1石はあったが、原位置をとどめるものは全くなかった。

墳丘・石室は、中・近世時の棚田形成時に削平・破壊されたと考えられるが、石の抜き取りは近代以降である。

石室は鎌倉時代に再利用されていた。

古墳時代の埋葬関連遺物は再利用時に取り除かれたと思われ、原位置を保っていたものではなく、出土した遺物は少ない(須恵器、土師器、鉄釘、石棺などの破片)。

奥側の敷石群は後世(再利用時)に破壊されていたが、入口側の敷石はほぼ残存していた。

敷石は追葬時のものである。

石室床面に焚火と思われる焼跡が3箇所あった。

羨道入口部、墓坑南部は大きく搅乱され、欠損していた。

出土遺物に鉄釘、石棺があり、組合式石棺による埋葬と敷石敷設後の木棺による埋葬が考えられる。古墳の構築時期は、10号墳より新しく7世紀前半ごろと思われ、その後追葬もなされていた。

8. 10号墳(第23・34・37～40・54図 図版17・18・21～24・36)

a. 調査前状況など

調査前の確認調査において検出されていなかった古墳である。7号墳の調査を実施するために、主に機械掘削によって現代の盛土などを除去した段階で、横穴式石室の奥壁の一部(1段目上部)を発見した。位置的に見て、言い伝えによる菊水学園内渡り廊下下の古墳に該当する考えられ、10号墳とした。

建物解体時に幾度か立ち会ったが、旧校舎周辺においては、古墳などの遺構や遺物は確認されなかつた。

b. 古墳の形・規模

現在の盛土などを除去したときの古墳検出面は、鳴川がもたらした土石流段丘層の大疊が散乱する灰色砂礫土ないし明黄褐色砂礫混じりシルト質土の自然堆積層(土石流)であった。そして、その南斜面を穿った墓坑があった。北側は菊水学園の建物建設時に削られて旧状はとどめていなかったが、墓坑検出南端状況—この部分も削平され、その前庭部および周辺の土の中からは、須恵器の脚部(173)、壺(174・175)、土器器の甕(176)と須恵器杯身(237)などが出土—から南北は12m以上、東西は西の落ち込み(濠?)東肩状況から10m以上のやや南北に長い円墳であったと考えられる。

c. 古墳形成状況

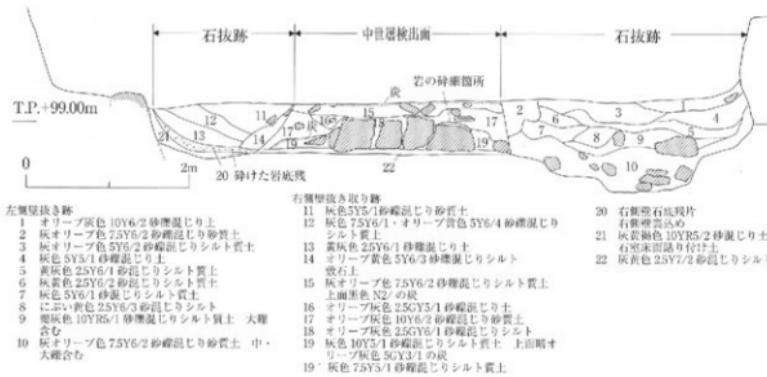
6号墳の西の落ち(段)を利用し、その墳丘を削り込んで南北方向に墓坑を穿ち、南に開口する石室を構築して、古墳が形成されたと考えられる。このことから6号墳が先行し、その西端を削り込んだ10号墳は後出すことになり、10号墳と6号墳は極めて接近して存するが、規模も異なり、石室の開口方向も相違し、双円墳にはならない。

d. 墳丘状況

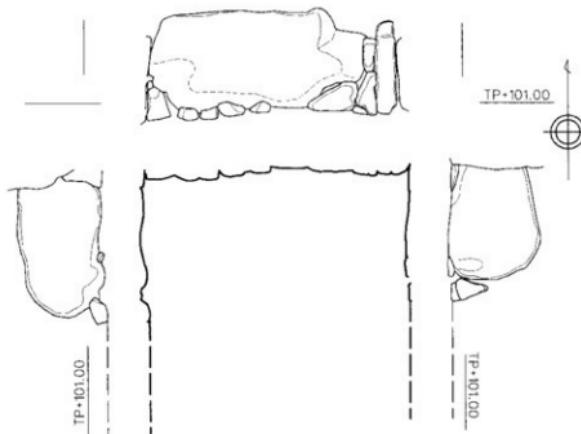
墳丘は、石室最下段石上面まで削平されていて、封土はほとんど残存していなかった。ただ、石室1段目が土石流段丘層を切り込んだ墓坑内に構築していることから、奥壁および左右側壁の1段を掘えてのち、2段目以降の石を積みながら封土を盛っていったものと思われる。

e. 石室状況

土石流段丘層上で検出した墓坑は、幅4.8m、長さ11.8m、深さ1.0～0.3mを測り、墓坑内には石室の奥壁および左右側壁の最奥端の1石目の各1段が残存していた。



第37図 10号墳石室内埋土断面実測図



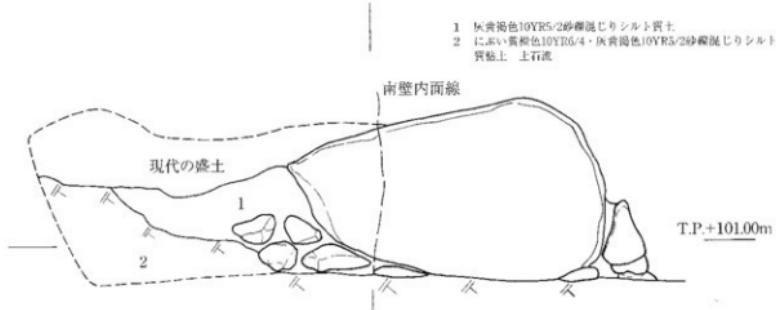
第38図 10号墳石室残存部平面・側面実測図 (1/40)

石室の石はほとんど抜き取りられ、墓坑内に残存していた土の大半は石抜き取り後の埋土であった。石抜き取り跡内からは、須恵器片などとともに陶器・磁器片が出土し、近代以降の仕業である。

石抜き取り後の埋土および石抜き取り跡内埋土を除去すると、抜き取り跡の底・側部に根石、奥壁北および墓坑壁面などには右掘え付け時の裏込め(灰・灰オリーブ色砂礫混じりシルト質土など)が残存していた。

石室底部、敷石上部において平安時代末期から鎌倉時代前半に再利用されたときの炭および炭化物を包含する埋土=灰オリーブ色砂礫混じりシルト質土がほぼ全面にわたって検出した。この層からは、須恵器の壺(177・178)、器台(179・180)、壺(181～186)、甌(187・188)、高杯(189・190)、脚部(191～202)、壺蓋(203)、杯蓋(204～218・323)、杯身(219～234)、土師器の鉢(235)、壺(236)、組合式石棺片、鉄器片などとともに上師器皿の小・細片、瓦質捏鉢が出土した。

この層を取り除くと石室入口部以外に敷石を検出した。敷石は再利用時および石抜き取り時に搅乱され、両側壁よりの大半は欠損していた。検出の幅2.0～0.5m、長さ78mを測った。



第39図 10号墳石室左側壁据付状況図 (1/20)



第40図 10号墳石室内敷石状況実測図 (1/40)

奥壁および左右側壁の奥1石づつと敷石の残存状況および右抜き跡状態などから、石室は南に開口する右片袖式の横穴式石室で、玄室の幅2.0m、長さ約4.6m、羨道の幅1.55m、長さ約5.6m、全長約10.2mを測った。

奥壁によって両側壁の奥端は隠れており、両側壁を据えたのちその間に入れ込むようにして奥壁を置いたと思われる。このことは、奥壁は2石で、右側壁に沿わせて大石を据えたのち、東側壁との間隙部に平面短冊形の細長い石が縦に入れ込ましていることからも窺える。

各石とも石室画面は半らに整形されていてとともに、両側壁の2石は本来1個の石を2分割にし、片方をひっくりかえして使用されていた(関版24)。

敷石上面からは、須恵器の杯身(166)、壺蓋(167)、甌(168)、脚部(169)、高杯(170)、土師器の杯(171)、甌(172)、馬具(238・239)、刀子(240)、鉄鏃(241～243)、鎌(244)、大刀(245)、鉄釘(246～248)、組合式石棺(249・250)、玉類(251～269)、耳環(270～272)などが出上した。土器類はほとんど破損し原位置を保っているものはなかった。馬具は奥壁左側壁側で人骨片とともに、玉類と耳環は奥壁周辺で検出した。

敷石内に組合式石棺片が見られ、石室底の地山面との間に隙層=灰黄色沙泥じりシルト質があり、この層が古墳築造当初の石室床面であった。当初は組合式石棺を使用して埋葬し、追葬時には敷石を敷設して木棺(出土した鉄釘使用)で葬られたものと考えられる。

石室は、残存していた石、右抜き跡、墓坑状況などから、玄室の幅2.0m、長さ4.6m、羨道の幅1.55m、長さ約5.6m、全長約10.2mであったと考えられる。

f. 出土遺物(第41～44図 図版36～44・55～60・63・64)

石室、前庭、中世期の搅乱層および周辺から須恵器、土師器、鉄製品、石製品、玉類、金銅製品が出土した。

土器

石室出土土器(166～172)

166～170は須恵器である。杯身、壺蓋、埴、脚部、高杯の器種がある。

166は杯身である。口縁部は外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。内外面は回転ナデ調整する。

167は壺蓋である。天井部は丸く、中央に扁平な摘みが付く。口縁端部は尖り気味に終わる。口縁部内面にかえりが付き、口縁部より下方へ張り出す。天井部は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。

168は埴である。口頭部は大きく外反した後、外上方へさらに外反して立ち上がる。口縁部と頸部の境に段がつく。口縁端部は尖り気味に終わる。口頭部外面に密なヘラ描きによる文様を施す。内面は回転ナデ調整する。

169は脚部である。脚部半ばから外反して広がる。根端部は面を持ち、下方へ拡張する。透かし孔は長方形で3方向に配置する。透かし孔は2段あったと考えられる。脚部半ばに1条の沈線文を巡らす。内外面は回転ナデ調整する。

170は高杯である。脚部半ばから外反して広がる。透かし孔は長方形で2段3方向に配置する。杯部は底部が丸みを帯びた平底を呈する。体部は外上方へやや内湾して立ち上がり、受部は水平方向へ伸びる。立ち上がり部はわずかに外反して、口縁端部は尖り気味に終わる。杯部下半は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。

171・172は土師器である。杯、壺の器種がある。

171は杯である。底部が丸みを帯びた平底を呈する。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部はわずかに外反する。口縁端部は尖り気味に終わる。体部下半に指頭圧痕が残る。内面は放射状の暗文を施す。

172は鉢である。底部はやや丸い平底を呈し、体部はあまり張らない。口縁部はゆるやかに外反し、口縁端部は丸く終わる。体部外面をヘラミガキ調整する。内面は指頭圧痕が残る。

前庭出土土器(173～176)

173～175は須恵器である。脚部、壺の器種がある。

173は脚部である。脚部半ばから外反し、根端部は面を持つ。外面に1条の沈線文を巡らす。内外面は回転ナデ調整する。

174・175は壺である。174は口縁部が外上方へ大きく外反する。口縁端部は面を持ち、上方へ摘みあげる。口縁部半ばに2条の沈線文を巡らす。内外面は回転ナデ調整する。175は底部が丸底を呈する。体部が丸みを帯び、肩部でやや張る。体部下半は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。

176は土師器壺である。口縁部は外上方へ外反する。口縁端部は丸く終わる。外面は縱方向、内面は横方向のハケメ調整する。

中世期以降の搅乱層出土土器(177～236)

176～234は須恵器である。壺、器台、壺、埴、高杯、脚部、壺蓋、杯蓋、杯身の器種がある。

177・178は壺である。口縁部は大きく外反する。口縁端部は面を持つ。177は口縁端部が外方へ肥厚する。口縁部外面をタタキの後、回転ナデ調整する。内面は回転ナデ調整する。178は口縁端部が上下へ肥厚する。口縁端部直下と口縁部半ばに2条ずつ沈線文を巡らし、その間にヘラ描きによる斜

線の文様を施す。内面は回転ナデ調整する。

179・180は器台である。179は裾部である。裾端部は面を持つ。外面に1条の沈線文を巡らし、その下に櫛描波状文を施す。内面は回転ナデ調整する。180は杯部である。体部はやや内湾して立ち上がる。口縁部はゆるく外反し、口縁端部は面を持つ。口縁部外面に2帯の櫛描波状文を施す。体部下半の外面はタタキ調整、内面は回転ナデ調整する。

181～186は壺である。181・183は口縁部が外上方へ伸び、口縁端部は丸く終わる。182は口縁端部がやや内傾する。内外面は回転ナデ調整する。184・185は体部が球形を呈し、肩部がやや張る。184は底部が丸底を呈する。体部下半は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。185は台付壺で肩部に1条の沈線文を巡らす。外面を回転ナデ調整する。186・186'は台付壺である。胎土、色調が同じことから同一個体と考えられる。脚部は半ばから外反して、裾部でゆるやかに内湾する。脚部と裾部の境に段を持つ。裾端部は面を持つ。透かし孔は2段3方向に配置する。脚部に2条、脚部と裾部の境に1条の沈線文を巡らす。内面は回転ナデ調整する。体部は球形を呈する。肩部に2条の沈線文を巡らし、その間に櫛描列点文を施す。体部下半はカキメ調整、他は回転ナデ調整する。

187・188は壺である。口頭部は大きく外反した後、外上方へわずかに外反して立ち上がる。口縁部と頭部の境に段がつく。口縁端部は尖り気味に終わる。187は内外面を回転ナデ調整する。188は口頭部外面に密なヘラ描きによる文様を施す。内面は回転ナデ調整する。

189・190は高杯である。189は短脚の高杯である。脚部は外反して広がる。杯部は底部がやや丸い平底を呈する。体部は外上方へやや内湾して立ち上がり、受部は水平方向へ伸びる。立ち上がり部はわずかに外反して、口縁端部は尖り気味に終わる。杯部下半は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。190は杯部である。体部は外上方へ立ち上がり、口縁端部は尖り気味に終わる。内外面を回転ナデ調整する。

191～202は脚部である。脚部は外反して広がり、裾端部は面を持つ。ゆるやかに内湾する裾部を持つものと持たないものがある。191～199は脚部と裾部の境に段を持ち、1条の沈線文を巡らす。透かし孔は2方向または3方向に配置する。191～193は透かし孔の痕跡が確認できない。内外面は回転ナデ調整する。194・196は同一個体の可能性がある。201は脚部に2条と1条の沈線文を巡らす。200～202は内外面を回転ナデ調整する。

203は壺蓋である。天井部は丸く、中央に扁平な摘みが付く。口縁端部はやや尖り気味に終わる。口縁部内面にかえりが付き、口縁部より下方へ張り出している。天井部は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。

204～218は杯蓋である。天井部は平らである。口縁部はやや内湾し、口縁端部は尖り気味に終わる。天井部は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。

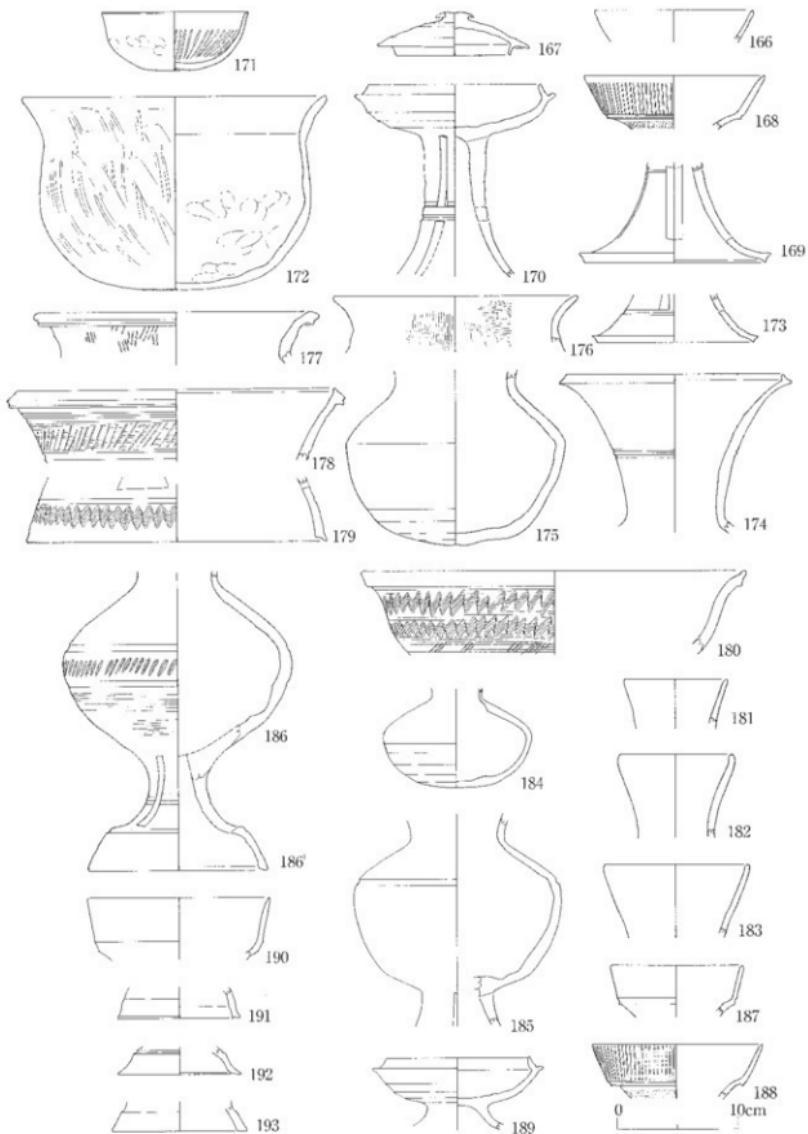
219～234は杯身である。体部は外上方へやや内湾して立ち上がり、受部は水平方向へ伸びる。立ち上がり部はわずかに外反して、口縁端部は尖り気味に終わる。底部が平底のものと丸底のものがある。体部下半は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。

235・236は土師器である。鉢、壺の器種がある。

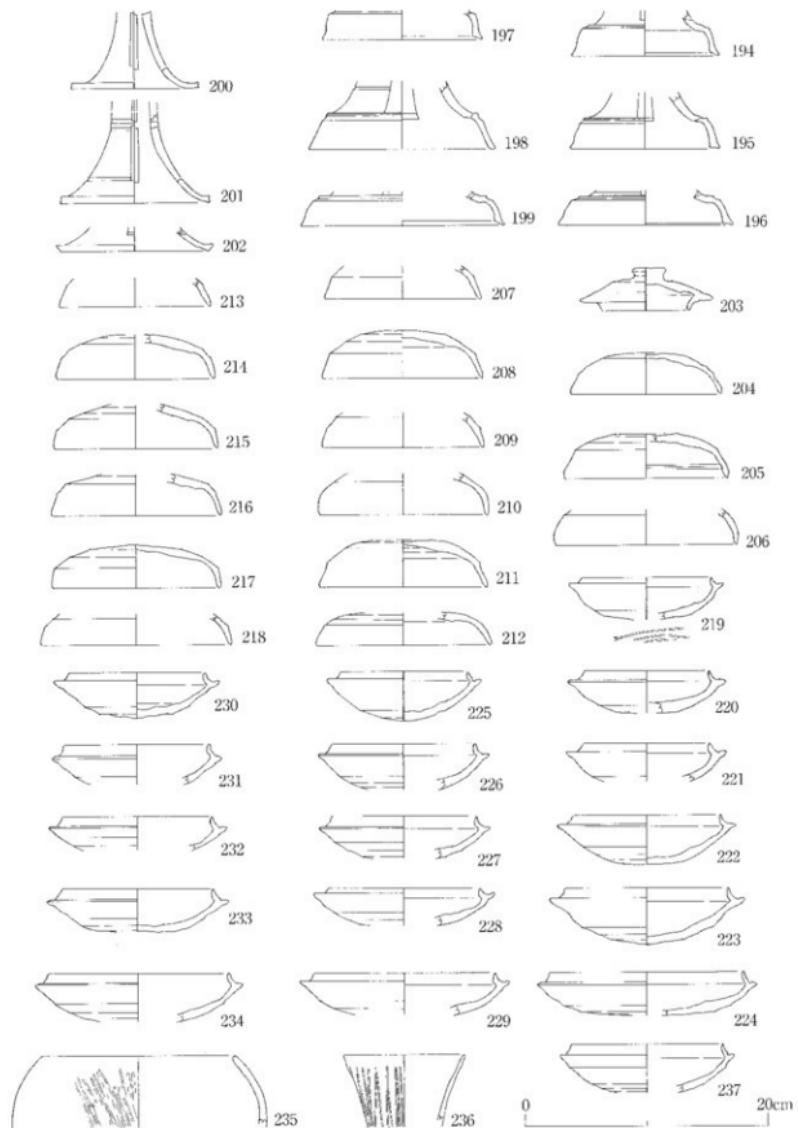
235は鉢である。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。外面はハケメの後、ナデ調整する。内面はナデ調整する。

236は壺である。口縁部は外上方へ伸び、口縁端部は尖り気味に終わる。外面はヘラミガキ調整、内面はナデ調整する。

10号墳周辺出土土器(237)



第41図 10号墳出土遺物実測図（1）



第42図 10号墳出土遺物実測図（2）

237は須恵器杯身である。底部はやや丸い平底を呈する。体部は外上方へやや内湾して立ち上がり、受部は水平方向へ伸びる。立ち上がり部はわずかに外反して、口縁端部は尖り気味に終わる。体部下半は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。

鉄製品(238～348)

238～248は鉄製品である。馬具、刀子、鎌、鎌、大刀、釘がある。

238・239は馬具である。238は櫛である。衛・鏡板・引手が残る。鏡板を曲げ、小さな円環を突出させることから瓢形鏡板付櫛である。立閂は欠損する。衛は二連式である。両端に円環が付く棒状を呈する。断面形は方形である。一方は両端の円環が平行して付けられるが、もう一方は円環が直交して付けられている。これは衛と鏡板を接続したときに鏡板が平行を保つためである。円環に衛、鏡板、引手を同時に接続する。鏡板は長径7.7cm、短径6.7cm、厚さ0.6cmを測る。衛は一方が長さ10.4cm、もう一方が9.8cmを測る。円環の直径2.0cm、厚さ0.6cmを測る。引手は残存長14.2cm、円環の直径2.2cm、厚さ0.7cmを測る。古墳時代後期後葉^{註1)}。239は馬具の部品である。平面形が隅丸の三角形を呈し、断面形は方形を呈する。最大長4.6cm、最大幅4.3cm、厚さ0.5cmを測る。鉄具の可能性がある。

240は刀子である。片刃の平造りである。切先部と茎部は欠損する。残存長10.5cm、最大幅0.9cm、厚さ0.2cmを測る。

241～243は鎌である。刃部と頭部の境が明瞭で、逆刺は付かない。頭部の断面形は方形を呈する。長茎の鎌と考えられる。241は残存長7.8cm、最大幅1.3cm、厚さ0.3cmを測る。242は残存長6.4cm、最大幅1.7cm、厚さ0.3cmを測る。243は残存長3.8cm、最大幅0.9cm、厚さ0.3cmを測る。

244は鎌である。片刃で先端部が刃部側に湾曲する。基部は0.1cmほどを折り返す。残存長13.8cm、最大幅2.9cm、厚さ0.3cmを測る。

245は大刀である。鍛造の片刃である。一面に布目痕が残る。残存長9.9cm、最大幅3.8cm、厚さ1.8cmを測る。

246～248は釘である。断面方形を呈する。246・247は頭部がL字形を呈し、先端部が欠損する。木質の付着は見られない。248は頭部と先端部が欠損する。表面に木質が付着している。246は残存長4.0cm、最大幅1.1cm、厚さ0.5cmを測る。247は残存長4.7cm、最大幅1.2cm、厚さ0.6cmを測る。248は残存長8.3cm、最大幅1.2cm、厚さ0.7cmを測る。

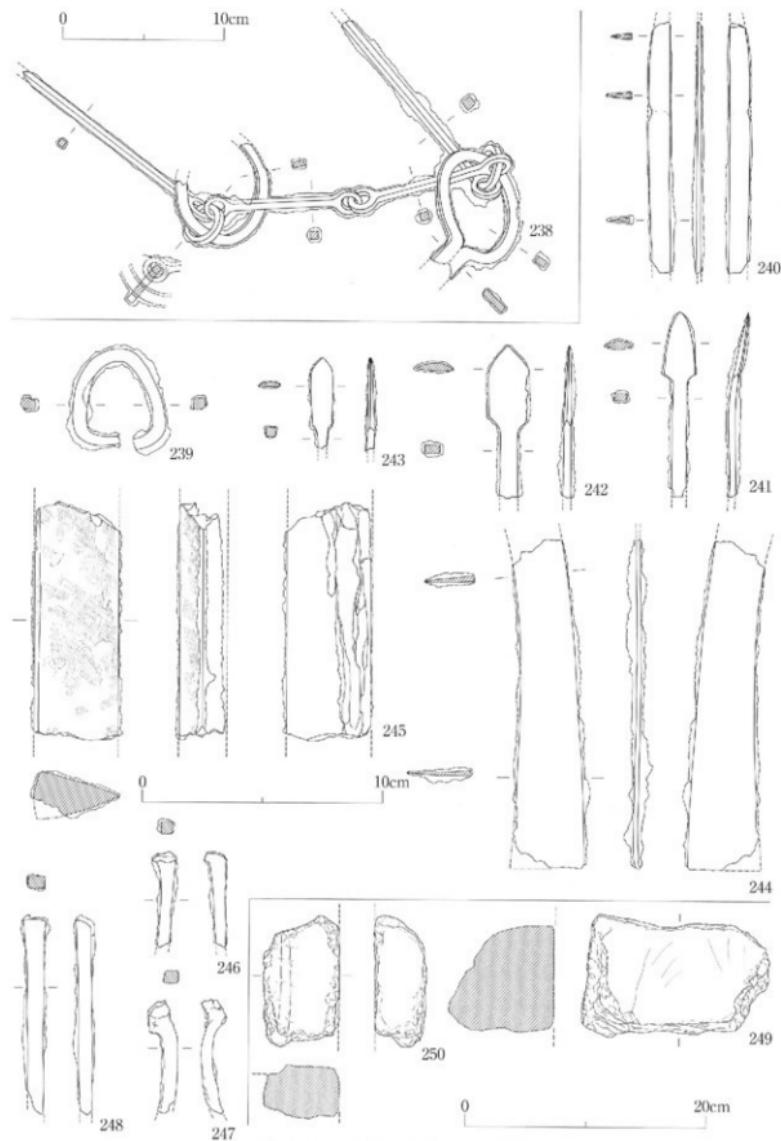
石製品(249・250)

249・250は石棺の破片である。やや荒く削った面を249は1面、250は2面持つ。組合式石棺の一部と考えられる。

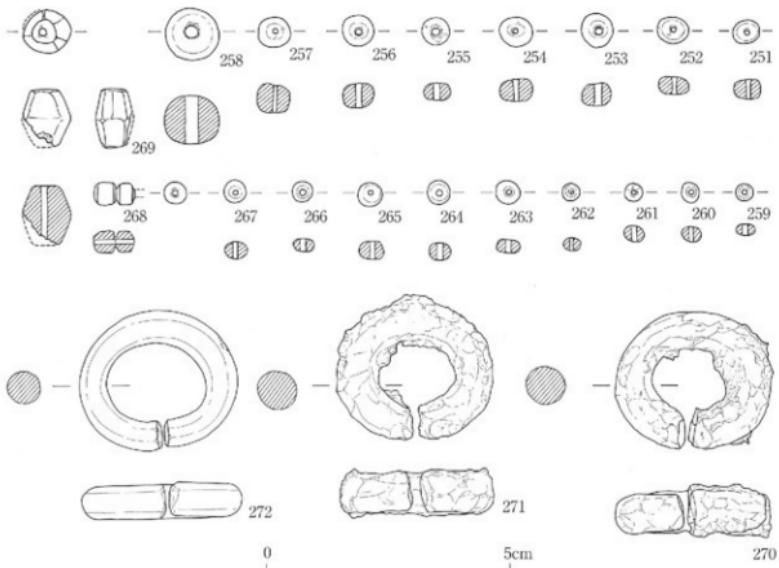
玉類(251～269)

251～268はガラス玉である。最大径が胴部にあり、球形を呈する。中央に紐孔を1個穿つ。258は色の濃淡が構状に見られることから、芯線にガラスを巻付けて製造したと考えられる。252・254・255・257は気泡が残る。251・253・254・256・257は濃緑色、255・258は濃緑色、252・259～261は淡青色、262～267は黄色を呈する。最大径は1.15cm～0.35cmを測る。

268は金層ガラスである。芯線にガラスを巻付け、工具で玉の疎なった形に成形する。巻付ける段階で金箔を層状に挟み込む。破片のため詳細は不明であるが、3個以上の疎なりがあったと考えられる。残存長0.9cm、幅0.5cmを測る。



第43図 10号墳出土遺物実測図（3）



第44図 10号墳出土遺物実測図 (4)

269は埋木玉である。截頭円錐体2つを底面で合わせた形である。上下の滑らかな面から縫孔を1個穿つ。黒色を呈する。長さ1.2cm、幅1.0cmを測る。

金銅製品(270～272)

270～272は金銅製の耳環である。切れ目のある環形を呈する。断面形は円形である。272は切れ目の間隔が狭い。270は最大径3.2cm、断面径1.1cmを測る。271は最大径3.2cm、断面径0.9cmを測る。272は最大径3.2cm、断面径0.7cmを測る。270・271は緑青が著しい。保存状態が悪く、鍍金は残っていない。272は全面に鍍金が残る。

g. 小結

10号墳は、土石流段丘上に築造されており、墓坑はこの層を掘り込み、その中の石室はほぼ南に開口する右片袖式の横穴式石室であった。

墳丘はほとんどなかったが、墓坑および石室の奥壁と側壁の2石が残存していた。

石室内の大半は石の抜き取り以後の埋土であったが、再利用時=平安時代末期から鎌倉時代前半の埋土(炭を含む)と敷石および築造時の底面を検出した。

残存した石および石の抜き跡などから、石室は玄室の幅2.0m、長さ4.6m、羨道の幅1.55m、長さ約5.6m、全長約10.2mであったと考えられる。石室内からは須恵器の杯蓋・杯身・壺・高杯、土師器の椀、耳環、玉類、馬具、鉄鎌、鎌、釣、刀子、大刀、組合式石棺、人骨片など多くの遺物が出土した。

築造時期は6世紀後末で、7世紀前半まで追葬が行なわれていた。

9. 8号墳(第45～48図 図版25・26)

a. 調査前状況など

第3次調査において、墓坑断面と石室の側壁石の側面および須恵器小片、鉄製品などの遺物を菊水学園と畠地間南部の斜面地で検出していた。

古墳の上部は、畠地と学園南端境の高まり＝盛土があり、その上には旧洗濯棟が存していた。盛土などを機械および人力掘削で除去したところ、上石流段丘(明黄褐色砂礫混じりシルト質土)面で、後述するSK11・12と格円状に埴丘が見られた。封土は全く残存せず、その平坦面から墓坑の肩を検出し、側壁石の上部を確認した。

b. 古墳の形・規模

古墳は、近世以降の棚田形成および整地などにより南側の大半は欠損し、上部は削平され、残存部は極めて少なく、壊滅状態であった。

土石流層を掘り込んだ周濠(SK11・12によって削半・切断され、幅1.6～0.8m、深さ0.3m、長さ7.5mが残存していた)とともに検出した墳丘状況から、周濠を伴う径10mにみたない小円墳であったと考えられる。

c. 古墳形成狀況

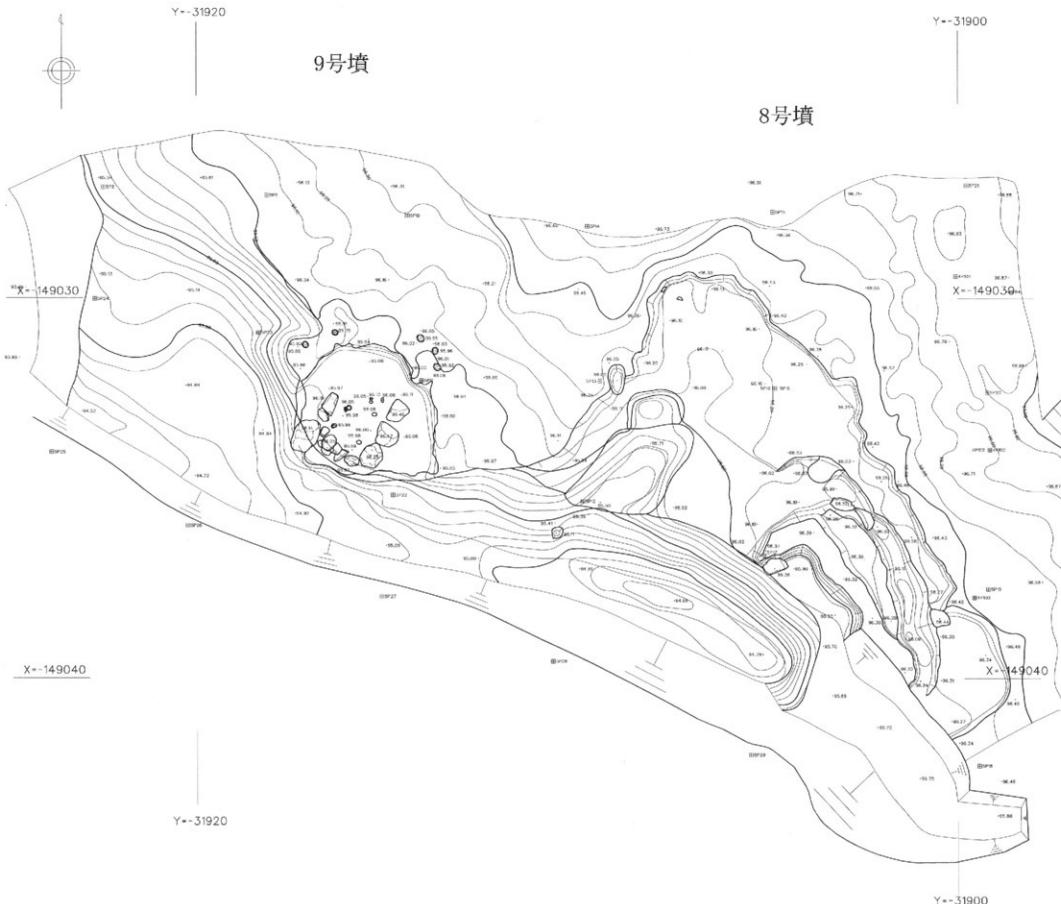
古墳の存在箇所は、鳴川がもたらした土石流段丘上であり、その南斜面に構築されていた。そのため、現在の盛土などを除去して露出した古墳の周辺は、大砾が散乱する明褐灰色砂礫混じりシルト質土の自然堆積層(土石流)であった。この層を穿った墓坑と周濠があった。

d. 墳丘狀況

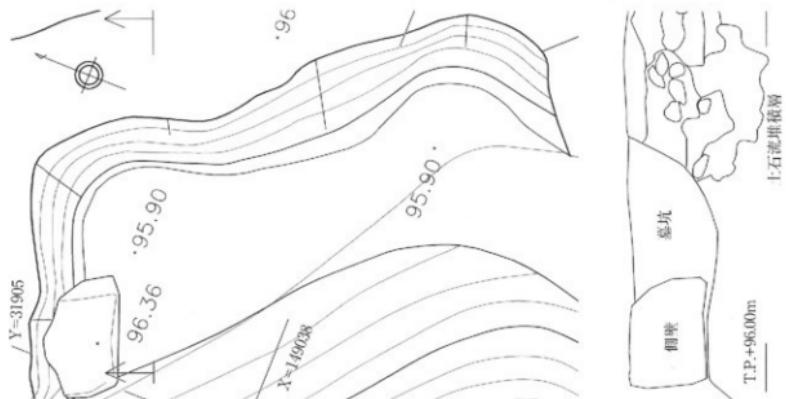
墳丘は、近世の開闢およびSK11・12などによってほとんど切断・削平され、周濠の存在によって、その周縁を確認することができた。墳丘部は土石流段丘層のみで、幅5.2m～2.9m、高さ0.4～0.2mが残存したに過ぎない。土石流段丘を掘り込んだ墓坑と側壁1段目1石の存在から、2段目据え付けとともに封土は盛られていったと考えられる。



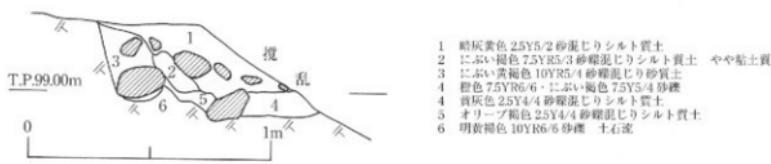
第45図 8号培平面寒測図 (1/50)



第46図 8・9号墳平面実測図 (1/100)



第47図 8号墳石室・墓坑平面・側面実測図 (1/25)



第48図 8号墳石室・墓坑内埋土断面実測図

e. 石室状況

残存していたのは左側壁1段目奥の1石のみであった。

確認調査時に鉄釘が出土しており、木棺を使用した埋葬が行なわれていたことが知れる。

残存状況は、右側壁の奥1石が残っていただけで、石室状況は不明といわざるをえない。ただ、検出した側壁の石は小さく割石状をなしていることから、規模はそれほど大きくなかったと思われる。上石流層を掘り込んだ墓坑の状態—残存の幅2.65m、深さ0.4m—からもそのことを知ることができよう。

f. 小結

古墳の大半は欠損していたが、周濠を伴う径10m以下の円墳で、南南西に開口する横穴式石室を有していた。

墳丘は、残存の幅5.2m～2.9m、高さ0.2～0.4mの土石流層のみで、封土はなかった。

墓坑は、残存の幅2.65m、長さ1.0m、深さ0.4mで、墓坑内に左側壁の1石のみがあった。

周濠は、S K 11・12で欠損・削平されており、残存の幅1.6～0.8m、深さ0.3m、長さ7.5m(弧状)を測った。出土遺物は、須恵器片と鉄釘(確認調査時)などと少量であった。

墳丘・石室とも小さく、残存している側壁の石が割石であることなど、新しい段階、7世紀前半ごろの古墳といえる。



1 灰褐色75YR6/2砂礫混じりシルト質土
瓦器・土師器片など出土
2 灰黃褐色10YR6/2砂礫土
3 暗灰黄色2.5Y4/2砂礫混じり土
4 暗褐色7.5YR4/2砂礫混じり上 やや粘土質 8号墳周辺
5 暗色7.5Y5/1砂礫土
6 明黄色10YR6.6砂礫 土石流

第49図 SK 11・12断面実測図

11. 8号墳周辺(第46・49・50図 図版26・27)

8・9号墳の周辺は、近世以降の棚田の形成と整地による切断や削平、旧菊水学園の建設(盛土と洗濯棟など)で、大きく搅乱されていた。

現代の盛土や洗濯棟などを機械および人力掘削によって除去したところ、中・近世の搅乱上層(オリーブ灰色砂礫混じり砂質土)と土石流段丘(明黄褐色砂礫混じりシルト質土)面が露出した。前者層を除去し、後者上面で前述した8号墳とともにSK 11、棚田斜面でSK IIを検出した。

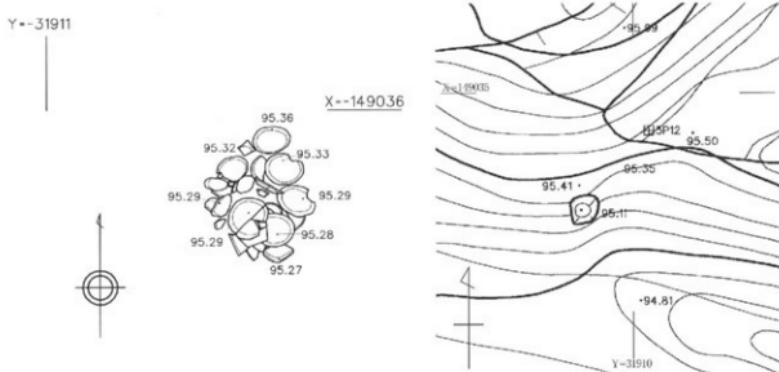
中・近世の搅乱土層からは、土師器の小皿(304～313)、瓦器の小皿(314・315)、椀(316～318)、須恵器の甕(319)などが出土した。

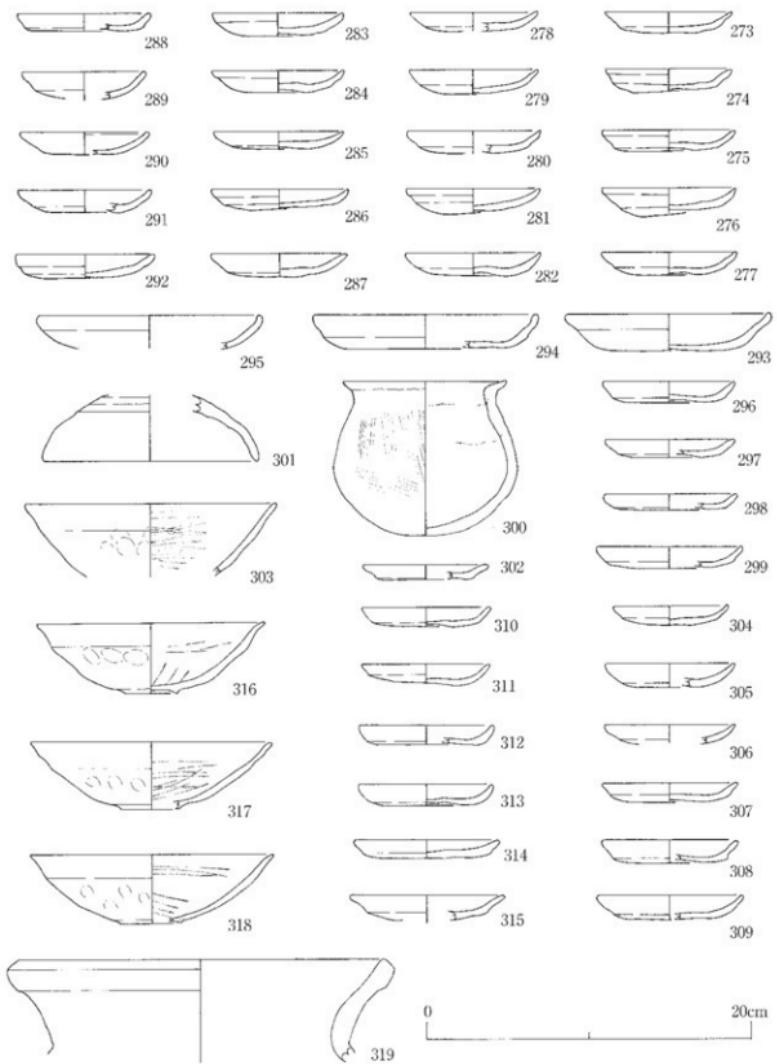
SK 11・12

SK 11は、東西10.4m、南北6.7m、深さ0.2～0.8mを測る平面形が不整三角形の落ち込み状の土坑で、その西部底部に舌状の窪地がありSK 12としたが、本来一体をなすものと思われる。南部は削られ欠損していた。埋土は、灰黄褐色砂礫混じり土、にぶい黄褐色砂礫混じりシルト質土、暗灰黄色砂礫混じり土、灰褐色砂礫混じりシルト質土、オリーブ褐色砂混じり砂質シルトなどで、SK 11からは土師器の大皿(293～299)、甕(300)、須恵器の杯蓋(301)瓦器の小皿(302)、椀(303)などが出土した。SK 12内からは遺物はほとんど出土しなかった。8号墳の西部などはこの遭難によって破壊されていた。

SK II

斜面部で検出した土師器皿群を納めた土坑。上層部に多数の土師器の小皿(273～292)を埋納していた。東部の一部は欠損していたが、埋土は黄灰色砂礫混じり土で、南北35cm×東西26cm、深さ20～14cmを測った。土坑の性格は不明である。





第51図 8号墳周辺出土遺物実測図

出土遺物(第51図 図版35・36・53・54)

S K II、S K 11、中世期の搅乱層から土師器、須恵器、瓦器が出土した。

S K II出土土器(273～292)

273～292は土師器の小皿である。底部は平底を呈する。体部の立ち上がりはゆるやかで、口縁端部は尖り気味に終わるものと丸く終わるものがある。口縁部内外面はヨコナデ調整する。13世紀。

S K 11出土土器(293～303)

293～299は土師器の皿である。293～295は大皿である。底部は平底を呈する。体部の立ち上がりはゆるやかで、口縁端部は丸く終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整する。12～13世紀。296～299は小皿である。底部は平底を呈する。体部の立ち上がりはゆるやかで、口縁端部は尖り気味に終わる。口縁部内外面はヨコナデ調整する。13世紀。

300は土師器の甕である。底部は丸底を呈する。体部は丸みを帯び、やや張る。口縁部は強く外反し、口縁端部は尖り気味に終わる。外面はハケメ調整、内面はナデ調整する。

301は須恵器の杯蓋である。天井部が平らで、口縁部はやや内湾する。口縁端部は丸く終わる。天井部を回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。

302・303は瓦器である。302は小皿である。底部は平底を呈する。口縁部は外方へ立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。14世紀。303は椀である。体部は外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。体部外面に指頭圧痕が残る。内面は密なヘラミガキ調整、見込み部は平行線の暗文を施す。14世紀。

中・近世期の搅乱層出土土器(304～319)

304～313は土師器の小皿である。底部は平底を呈する。体部の立ち上がりはゆるやかで、口縁端部は尖り気味に終わるものと丸く終わるものがある。口縁部内外面はヨコナデ調整する。13世紀。

314～318は瓦器である。314・315は小皿である。底部は平底を呈する。口縁部は大きく開いて立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。14世紀。316～318は椀である。体部は外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。体部外面に指頭圧痕が残る。内面は粗いヘラミガキ調整する。見込み部に平行線の暗文を施す。14世紀。

319は須恵器の甕である。口縁部は大きく外反し、口縁端部は面を持つ。内外面は回転ナデ調整する。

10. 9号墳(第46・52・53図 図版28・29)

a. 調査前状況

第3次調査において墓坑断面と思われた窪みと石室両側壁の2石、須恵器の破片を菊水学園と畠地間の斜面下部で検出していた(図版28)。

古墳検出土部にあった腐食上および現代の盛土は1.2m以上を測り、盛土上にはピロティーが設置されていた。機械および人力掘削でこれらを除去したところ、散乱した石塊や土石流段丘面が露呈するとともに、石塊列ないし石塊群を検出した。

b. 古墳の状況

古墳は、土石流段丘部の南斜面部に形成されていた。墳丘は壊滅状態で、検出した石室両側壁の石列周辺まで現在の盛土で、石室上部・奥壁側は、中・近世の棚田、近・現代以降の搅乱により大きく欠損し、封土はほとんどが破壊されていたことから、墳形および規模は不明である。搅乱土内から、須恵器の杯蓋(329・330)、器台(331)などが出土した。

c. 石室状況

後述する埋没していた弥生時代後期の堅穴式住居の上部に當まれた右囲い状の横口式を呈する横穴式石室である。南南西方向に開口し、両側壁の右列と閉塞石群が残存し、北北東側の奥壁側は欠損していた。

石室内の内法は、長軸1.9m以上、短軸1.3mを測った。長軸の両側壁はやや大きな石塊(東3石、西2石が残存)であるに対し、短軸は小ぶりの石塊群(5石)で、両壁より低くやや乱雑に積まれた閉塞石である。

石室内からは、ほぼ完形に近い須恵器の杯蓋(320～322)、杯身(324・325)、趨(326)、土師器の杯(327)、鉢(328)などが出土した。

また、床面上層から木棺の痕跡を確認した。木棺跡は、検出の長さ1.2m、幅0.52m、深さ0.05mを測った。埋土は灰褐色砂混じりシルト質土で、遺物は出土しなかった。

土器類は埋葬時、木棺周囲に配していたと思われる。

横穴式石室の両壁の各石は、上述したように弥生時代の住居跡の上で検出されたが、深く掘りくぼめて据えた形跡はなく、ほとんど配列した状態であった。

石室周囲は後世の搅乱で破壊され石塊などが散乱し、墓坑状況、墳丘状況を確認することはできなかった。

出土した須恵器類から、7世紀初頭に铸造されたと考えられる。

d. 出土遺物(第54図 図版37・55)

石室内と搅乱層から須恵器、土師器が出土した。石室内の遺物はほとんどが完形である。

石室出土土器(320～322、324～328)

320～326は須恵器である。杯蓋、杯身、趨の器種がある。

320～323(2)は杯蓋である。口縁部はやや内湾し、口縁端部は尖り気味に終わる。天井部がやや丸いものと平らなものがある。天井部は回転ヘラケズリ調整、他は回転ナデ調整する。324・325は杯身である。体部が外上方へやや内湾しながら立ち上がり、受部は外上方へ伸びる。立ち上がり部はやや外反して伸び、口縁端部は尖り気味に終わる。324は内外面を回転ナデ調整する。325は体部下半を回転ヘラケズリ調整し、他は回転ナデ調整する。

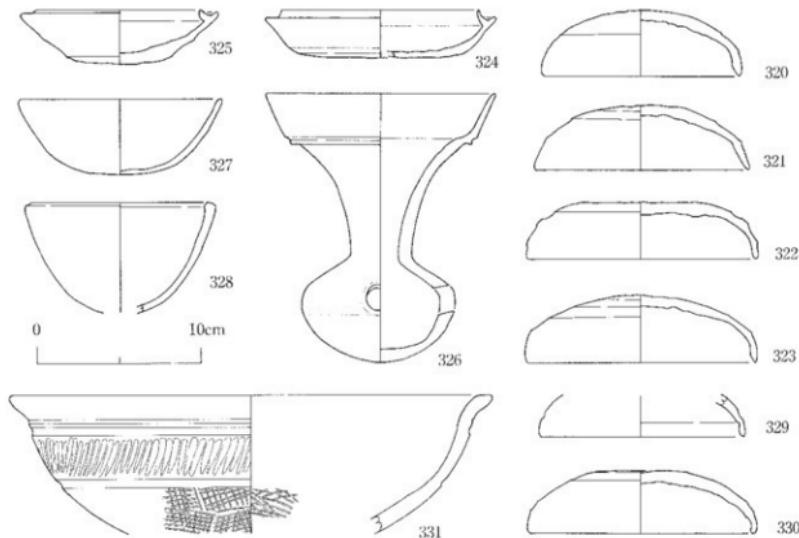
326は趨である。体部は球形を呈する。口頭部は大きく外反した後、外上方へ直線的に立ち上がる。口縁部と頸部の境に段がつく。口縁端部はやや尖り気味に終わる。体部中央に円孔を1個穿つ。



第52図 9号墳石室平面および遺物出土状況実測図 (1/40)



第53図 9号墳石室底面木棺跡平面・断面実測図 (1/25)



第54図 9・10号墳出土遺物実測図

外面は風化が著しく調整法は不明である。

327・328は土師器である。杯、鉢の器種がある。

327は杯である。底部は丸底に近い平底を呈する。体部はやや内湾して外上方へ立ち上がり、口縁端部は丸く終わる。外面は風化が著しく調整法は不明である。

328は鉢である。体部はやや内湾して外上方へ立ち上がり、口縁端部は内側に肥厚させる。外面は風化が著しく調整法は不明である。

搅乱層出土土器(329～331)

329～331は須恵器である。杯蓋、器台の器種がある。

329・330は杯蓋である。口縁部はやや内湾し、口縁端部は丸く終わる。329は外面を回転ナデ調整する。330は天井部を回転ヘラケズリ調整し、他は回転ナデ調整する。

331は器台の杯部である。体部はやや内湾して立ち上がる。口縁部は強く外反し、口縁端部は丸く終わる。口縁部下に2条、体部半ばに1条の沈線文を巡らす。沈線文間にヘラ描きによる斜線の文様を施す。体部下半の外面はタタキ調整、内面は回転ナデ調整する。

e. 弥生時代後期の竪穴式住居(第46・55図 図版29・30)

9号墳検出時すでに、土石流段丘層(明黄褐色砂礫混じりシルト質上)上面において、住居跡の外輪郭などを検出していた(当初、9号墳の墓坑と考えた)。9号墳周辺の遺構などを除去してのち、住居跡上面を明確にした。

堅穴式住居は、平面形は隅丸の長凸形を成していたが、南側および西側は中・近世以降の棚田形成などにより切斷され欠損していた。

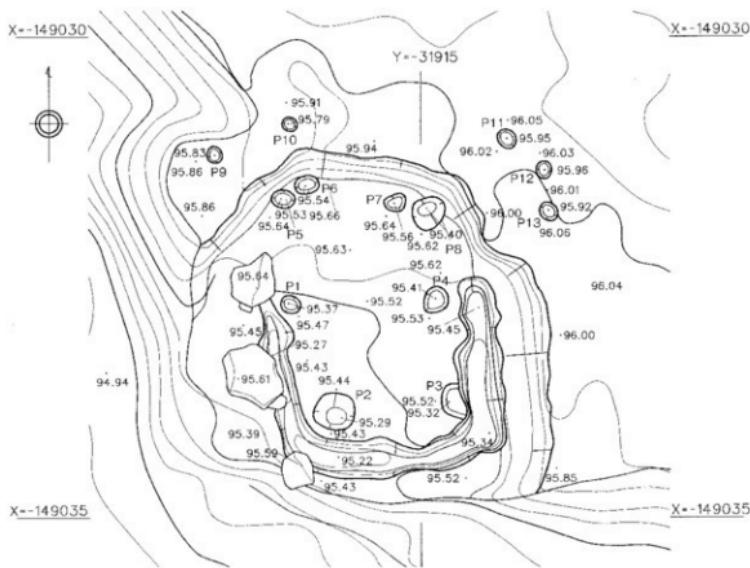
残存の長辺(南北)3.65m、短辺(東西)2.8~3.2m、深さ0.3~0.4mを測り、埋土-灰褐色(7.5YR5/2)砂礫混じりシルト質土-内から弥生土器・サスカイトの小片が出土した。

床は、北側は幅約1.0mの雑壇・テラス状にやや高く、北壁沿いに4つのピット(P1~4)があり、南は広く、壁面に沿うように溝がU字状に穿かれ、大小4つのピット(P5~8)があった。ピットは垂直またはやや斜めに穿かれていた。

P1~4は径0.2~0.35m、深さ0.05~0.1mを測り、埋土は灰黄褐色(10YR4/2)砂混じりシルト質土であった。

P5~8は、径0.2~0.4m、深さ0.1m前後を測り、埋土は灰黄褐色(10YR5/2)砂混じり砂質土であった。

溝は、幅0.25m、深さ0.1～0.15mを測り、埋土はにぶい黄褐色・灰褐色(7.5YR5/2)砂混じりシルト質土であった。ピット・溝内から遺物は出土しなかった。



第55図 弥生時代後期竪穴式住居跡平面実測図 (1/50)

h. 小結

9号墳は弥生時代後期の竪穴式住居埋没箇所に構築されていた。

石室は南南西に開口する横口式を呈する無袖式の横穴式石室である。

北側は欠損していたが、長軸の両側壁はやや大きな石塊(東3石、西2石が残存)で、短軸の小ぶりの石塊は、5石で側壁より低く、一部は積まれており、閉塞石と思われる。

内側の寸法は長さ19m以上、幅1.2mを測り、中からは須恵器の杯蓋・杯身・甌、土師器杯などが出土し、その下で木棺の跡を確認した(検出の長さ1.3m、幅0.5m、深さ0.05m)。

築造は7世紀初頭。

埋葬時、木棺の周囲に土器を配したと思われる。

石室の各石は極めて不安定で、深く掘り進めて据えた形跡は見られなかった。、

石室周囲は後世に搅乱され(石塊などが散乱)、墓坑状況、墳丘の状態は全く確認することはできなかった。

竪穴式住居は弥生時代後期で、谷を挟んだ尾根筋の岩滝山遺跡および六万寺古墳群で検出されている住居跡に比して小さく、床面などに明瞭な生活跡は検出されなかった。

註1) 型式名等は岡安光彦1984、花谷浩1986を基に推定した。

註2) 323は10号墳の出土であるが、レイアウトの都合上、9号墳での説明となった。

<遺物参考文献>

岡安光彦 1984 「いわゆる「素環の甕」について—環状鏡板付甕の型式学的分析と編年—」『日本古代文化研究 刃削号』PHALANX—古墳文化研究会—

花谷 浩 1986 「素環鏡板付甕の編年とその性格」『山陰考古学の諸問題』山本清先生喜寿記念論集 山本清先生喜寿記念論集刊行会

〔追記〕

第1次調査状況については、原田修氏より教示を得ることができた。

遺物執筆にあたり長谷川透氏には馬具について、北森さやか氏にはガラス玉について御教示を得た。末筆であるが記して謝意を表したい。

IV. 五里山古墳群第5次発掘調査で出土した石棺片の石質について

川端 清司(大阪市立自然史博物館)

観察を行った石棺片と考えられる出土岩石9点(3号-21、6号-150~154、7号墳-164・165、10号墳-249・250)はすべて同じ石質である。表面の色に違いが見られるが、これは風化によるもので、164の新鮮な破断面に見られる白色部が、岩石本来の色調である。

石質は流紋岩質の火山礫凝灰岩ないしは角礫凝灰岩で、数mm大~数cm大の軽石と岩石片を含んでいる。軽石は流紋岩質でよく発砲していて、最大2cm程度までの不定形をしている。観察したかぎりでは、溶結構造は認められない。

岩石片は数mm~数cm大で円錐から角礫状で大部分は同質の流紋岩からなるが少量の花こう岩類も含まれている。流紋岩礫は黒雲母流紋岩で、ザクロ石を含むこともある。灰色で流理構造が認められるものや、黒色ガラス質で真珠岩質のものが見られる。

基質は細粒な火山灰で、黒雲母、ザクロ石、石英などの鉱物片も含まれている。

以上の特徴から判断すると、これらの岩石は大阪府・奈良県境に位置する二上山周辺に分布している二上層群の一部を構成する凝灰岩と考えられる。さらに岩相や火山礫の特徴から、二上層群の最下層にあたるドンズルボー累層の下部層(森本ほか, 1958や二上山地学研究会, 1986による“下部ドンズルボー層”や宮地ほか, 1998による“ドンズルボー累層下部のザクロ石黒雲母流紋岩火山礫凝灰岩”)に由来すると考えるのが妥当である。

宮地ほか, 1998によるとドンズルボー累層下部の流紋岩火山礫凝灰岩には溶結凝灰岩が挟まれているが、それは「二上山南方に多く、一方、當麻町加守や太子町牡丹洞などには分布しない」とされている。観察した標本には溶結構造は認められることから、石棺の石材産地としては、二上山南方の岩屋附付近の可能性は低く、上記當麻町(現・葛城市)加守や太子町牡丹洞の周辺、あるいは鹿谷寺跡周辺の石切場などが考えられる。

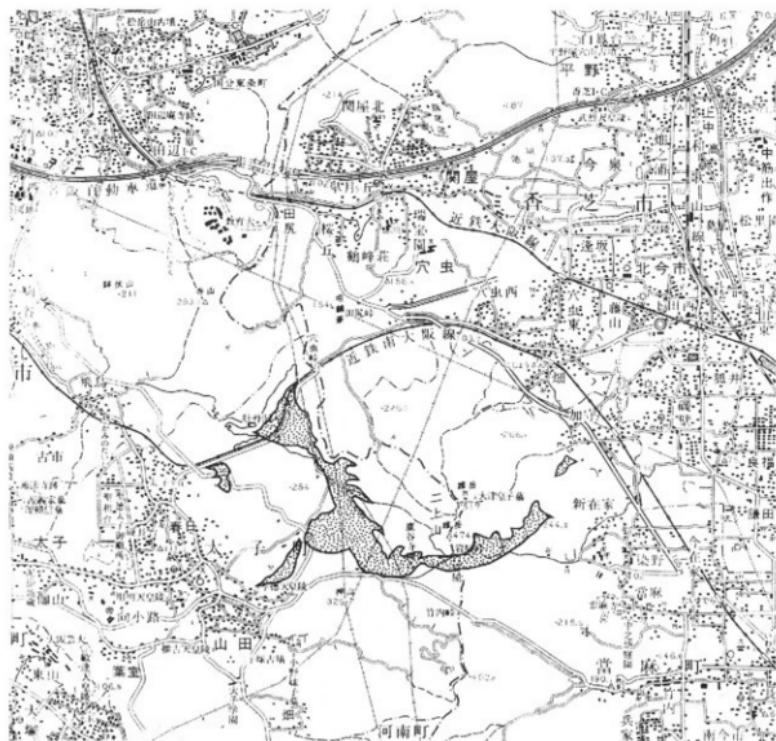
本考察を進めるにあたり、佐藤隆春氏(大阪市立自然史博物館外研員・元三國ヶ丘高校教諭)からは有益な助言をいただいた。記して謝意を表す。

文献

宮地良典・田舎庄良治・吉川敏之・寒川旭(1998) 大阪東南部の地質。地域地質研究報告(5万分の1地質図幅)、地質調査所、113p。

森本良平・藤田和夫・吉田博直・松本隆・市原実・笠間太郎(1953) 二上山の地質。地球科学、vol.11, p.1-12。

二上山地学研究会(1986) 二上層群の原川累層・定ヶ城累層の層序とサヌキトイドの活動時期。地球科学、vol.40, p.89-101。



打点部が下部の流紋岩火山難凝灰岩が分布する地域を示している。

国土地理院発行の5万分の1地形図「大阪東南部」の一部を使用して作図した。

二上層群ドンズルボー累層および下部層の分布は、宮地ほか、1998の地質図からトレースした。

第56図 二上層群ドンズルボー累層下部層の分布

V. まとめ

今回の調査では、弥生時代から江戸時代にわたる遺物、弥生時代後期の竪穴式住居、古墳時代の古墳(平安時代中期から室町時代初期の石室再利用含む)、鎌倉時代の土坑、江戸時代以降の土坑などの遺構を検出した。

以下、とくに古墳の存在状況を記してまとめとする。

五里山古墳群は、種々の形で報告・紹介されてきた¹⁾。Iで記したように、周知の12・13号墳は別支群=鳴川の北岸にあって花草山古墳群最南端の支群であって、本古墳群は11基の古墳からなり、1尾根筋に形成された一群=1支群として捉えることができ、1つのイエの墓域=墓地(奥つ城所)といえる。

鳴川南岸の尾根の北斜面から土石流段丘の南斜面に分布し、5・6号墳間、9・11号墳間の間隙が広く、1ないし2古墳の存在も考えられるが、不明である。4・11号墳の位置付けは未調査のため明らかなではない。各古墳については先に詳述したとおりであるが、石室の形状、出土遺物から再度概観すると(時期・須恵器型式²⁾)、

1号墳 砥石のみで石室・墳丘状況は不明。出土遺物から7世紀初頭Ⅱ5に築造され、7世紀前・中半Ⅱ6・Ⅲ1まで追葬されていた。

2号墳 瑞道入口部は欠損しているが、墳丘・石室とも残存。出土遺物から6世紀後末Ⅱ4に築造され、7世紀前・中半Ⅱ5・Ⅲ1まで追葬されていた。

3号墳 瑞道入口部は欠損しているが、墳丘・石室とも残存。出土遺物から6世紀後半Ⅱ3に築造され、7世紀前・中半Ⅱ4・Ⅲ5・Ⅳ6・Ⅴ1まで追葬されていた。

5号墳 封土上部および石室は欠損(墓坑は残存)。周濠の一部と墳丘部祭祀土器群があり、出土遺物から6世紀後半Ⅱ4に築造され、7世紀前半Ⅱ5まで追葬されていた。

6号墳 封土はほとんどなく、土石流段丘を掘り込んだ墓坑と石室下部が残存。出土遺物から6世紀後半Ⅱ4に築造され、7世紀前半Ⅱ5・Ⅲ6まで追葬されていた。

7号墳 封土は一部残存していて、上石流段丘を掘り込んだ墓坑と石室下部が残存。出土遺物から7世紀前半Ⅱ6に築造され、7世紀前半Ⅲ1まで追葬されていた。

8号墳 封土はほとんどなく、土石流段丘を掘り込んだ墓坑と石室の一部(1石)、周濠が残存。出土遺物から7世紀前半Ⅱ6に築造された。

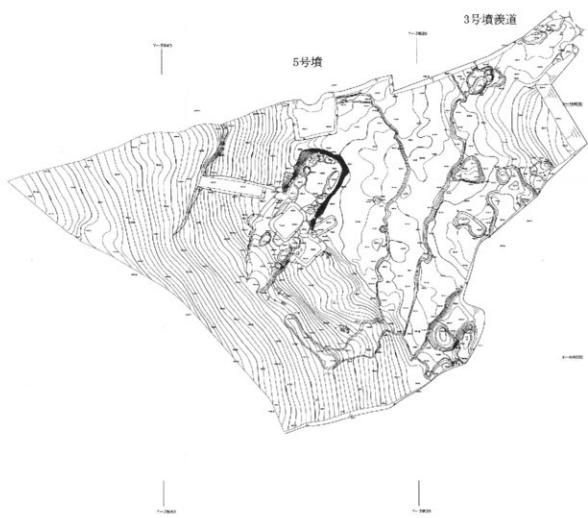
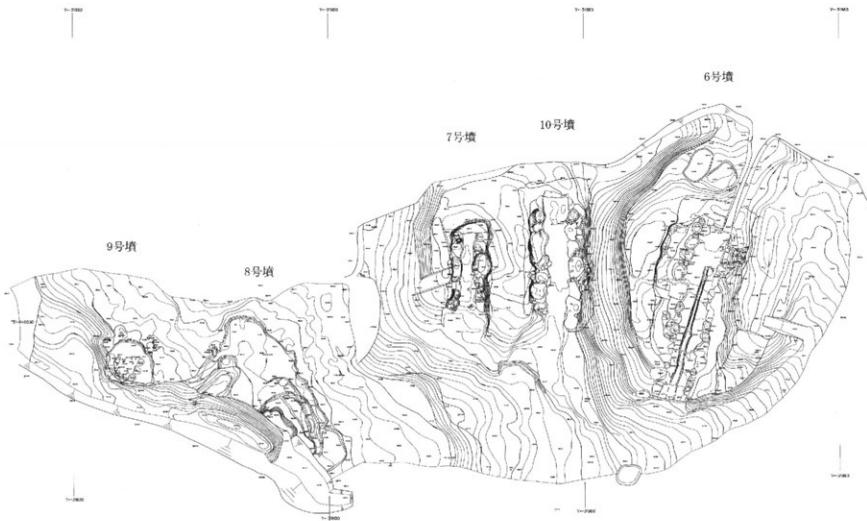
9号墳 封土はほとんどなく、弥生時代後期の竪穴式住居跡の掘り込み部に石室側壁下部、副窓右が残存。出土遺物から7世紀初頭Ⅱ5に築造された。

10号墳 封土はほとんどなく、土石流段丘を掘り込んだ墓坑と石室下部が残存。6号墳西側を切り込んで墓坑を穿っていた。出土遺物から6世紀後末Ⅱ4に築造され、7世紀前半Ⅱ5・Ⅲ6まで追葬されていた。

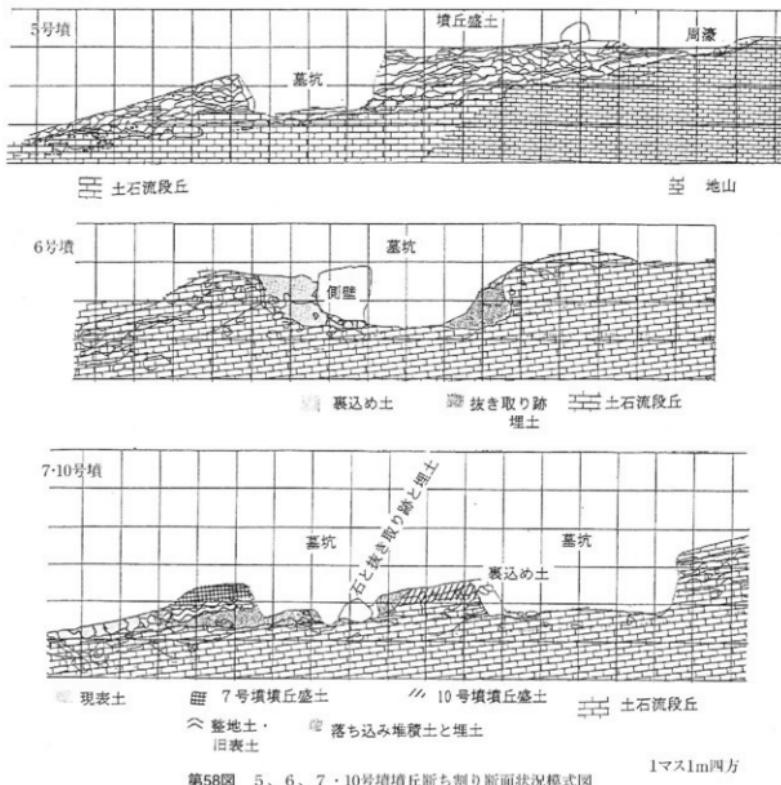
このことから、古墳群内における古墳の築造順は、3号墳、5ないし6号墳、10号墳、9号墳、8号墳、7号墳へと移行していくことが分かった。本古墳群においては、3号墳が最も古く(最初に築造)、2→1号墳へと東上していくものと、5→6→10→9→8→7号墳へと西下していく2系統があり、6号墳が最大規模(古墳・石室とも)で、このイエの最盛期といえる。

本古墳群は横穴式石室を主体部とする小古墳からなり、副葬品に馬具の含まれているものが多く、北の花草山古墳群、山畑古墳群と共通する。各古墳群の名称は現在のものであり、これらの古墳群は同一意識の人々によって築造されたと考えられる。山畑古墳群・花草山古墳群が尾根筋、谷によって

4



第57図 3号墳浜道前部から9号墳平面実測図 (1/300)



第58図 5、6、7・10号墳埴丘断ち割り断面状況模式図
1マス1m四方

いくつかの支群に分かれ、巨視的には五里山古墳群は1支群ということができよう。

<5号墳および6・10・7号墳にみる古墳の構築一断ち割り断面から一>

5号墳は、埴丘上部が欠損するとともに、石室構築石のほとんどが抜き取られていたが、封土中・下部および周濠の一部が残存していた。

築造に際しては、旧地表面から掘り込んで墓坑を形成し(半地下式)、地山(尾根部および土石流段丘)底面を少し掘りくぼめて石室1段目の石を据えていた(根石を用い、裏込め土が見られた)。2段目以上は石室を構築しながら封土を盛って埴丘形成していた。封土は地山上(砂混じりシルト質粘土)と砂礫混じり地山上、腐食土含む堆積土(粘質土)、砂礫混じり堆積土の4種をブロック状に積み重ねて築造していた。

6・10・7号墳は、土石流段丘の南斜面を利用して築造されており、東西に3基は連なっている。各古墳は、石室とともに埴丘も破壊されて封土はほとんど残存していないかったが、いわゆる連接封墳の形態をなしている。³⁰

10号墳は6号墳の墳丘西部の落ち(段差)、7号墳は10号墳西の落ち込み(濠)をそれぞれ利用して主体部を設定し、墓坑・石室を構築していた。前者は6号墳の墳丘を切断しており、後者は落ち込みが埋没し(堆積土と埋土)さらに上に整地土と臼表土層があって、それから墓坑を掘り込んでいた。いずれも地山(土石流段丘)底面を少し掘りくぼめて石室1段目の石を据えていた(根石を用い、裏込め土があった、半地下式)。このことから、この3基の古墳は東から順次6号墳、10号墳、7号墳の順で築造された。

<石室内の埋葬状況>

3・6・10・7号墳で確認したように、本古墳群の横穴式石室内埋葬の特徴は、当初の床面には敷石ではなく組合式石棺による埋葬がおこなわれ、追葬時に敷石が敷設され木棺による埋葬が行なわれていたことである。

<本古墳群における古墳の破壊・埋没過程>

確認調査時まで、5~10号墳は削平され、畑地などと化して、視覚的に直接古墳の存在を知ることはできなかった。

1. 古墳時代の末期(7世紀前半)

追葬時における石室内の1次埋葬施設・品=石棺・副葬品(土器など)の破壊。敷石の敷設時に(6・7・10号墳)石棺材の一部が敷石材として使用され、敷石下・間から上器片が出土している。

2. 平安時代中期から鎌倉時代前半(9世紀中半~11世紀前半)

石室内で炭包含層や焼上面を検出した。黒色土器・瓦器などが出土した。

3. 鎌倉時代後半から室町時代初期(13世紀後半~14世紀)

石室内で炭包含層や焼上面を検出した。また、古墳を削平しての開発(8・9号墳域中心)も行われた。瓦器・土師器などが出土した。

4. 近世・近・現代

石室構築石の抜き取りと開墾=棚田・畠の形成などに伴う古墳の削平・破損・埋没。

注

1. 『枚岡市史』第1巻 本編 枚岡市役所 1967、「古墳時代の枚岡」

『枚岡市史』第3巻 史料編1 枚岡市役所 1966、「考古資料 古墳時代」

『河内四條史』第1冊 本編 四条史編さん委員会 1981、「古代の四条」

『河内四條史』第2冊 史料編1 四条史編さん委員会 1977、「考古資料 古墳時代」

『東大阪遺跡ガイド』 東大阪市道路保護課企画会 1978

『わが街再発見 東大阪市の古墳』 東大阪市教育委員会 1996、改訂版 2001

木建正宏「菊水学園採集の古墳時代遺物」『東大阪市文化財協会ニュース』Vol.5, No.4 財団法人東大阪市文化財協会 1992

秋山浩三・池谷梓「五里山古墳群・花草山古墳群と採集資料の検討-生駒山西麓部における群集墳の形成過程等をめぐって-」『大阪府文化財研究』第19号 財団法人大阪府文化財調査研究センター 2000

「五里山古墳群第2・3・4次発掘調査」『東大阪市埋蔵文化財発掘調査概報-平成19年度-』 東大阪市教育委員会 2008

2. 中村清「和泉陶邑窯出土須恵器の型式編年」 芙蓉書房出版 2001

3. 曹永茲「古墳封土の区画築造に関する研究」 右島和夫・土生田純之・曹永茲・吉井秀夫「古墳構築の復元的研究」 雄山閣 2003

図 版

図版 1
遺構



1. 調査地周辺航空写真（1942年）



2. 調査作業風景（東より）

図版2

遺構



1. 調査前状況（南東より）



2. グランド調査前状況（南より）



3. グランド内調査トレンチ（南より）



1. 導入部機械掘削後状況（北東より）



2. 導入部調査トレンチ完掘状況（南東より）



3. 導入部調査トレンチ北東断面（南西より）

図版4

遺構



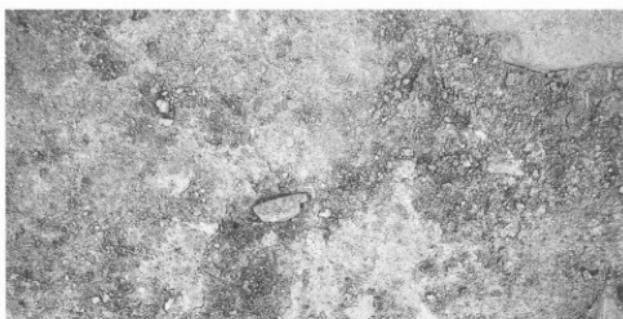
1. 3号墳調査前状況（南東より）



2. 3号墳羨道部遺物出土状況（南西より）



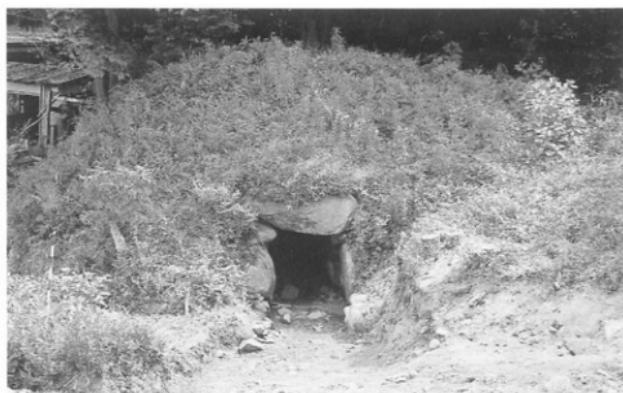
3. 3号墳羨道部石棺片出土状況（南東より）



1. 3号墳狭道部馬具片出土状況（南より）



2. 3号墳狭道部側壁石抜き跡状況（南西より）



3. 3号墳前面より全景（南西より）



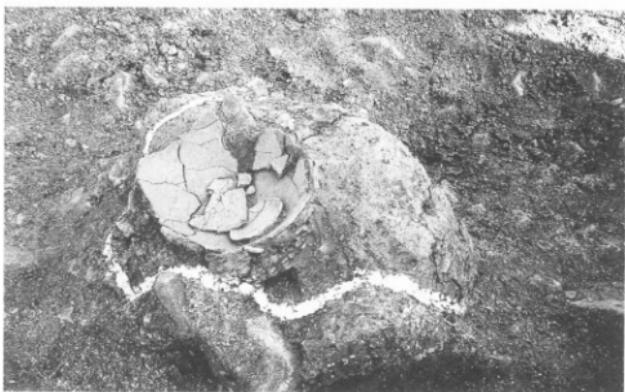
1. 3～5号墳間遺構検出状況（東より）



2. 3～5号墳間遺構完掘状況（東より）



3. 3～5号墳間遺構完掘状況（南東より）



1. SK I 土器出土状況（北西より）



2. SK 8 畑断面（南西より）



3. SK 3・4・5 断面（北西より）

図版 8
遺構



1. 5号墳墓坑検出状況（南西より）



2. 5号墳墓坑完掘状況（南西より）



3. 5号墳墓坑内アゼ断面（南西より）



1. 5号墳完掘状況（南西より）



2. 5号墳完掘状況（南西より）



3. 5号墳断ち割り断面（南西より）



1. 5号墳埴丘上土器群 2 (南西より)



2. 5号墳埴丘上土器群 3 (北東より)



3. 5号墳周濠畔断面 (北東より)



1. 6号墳調査前状況（南西より）



2. 6号墳機械掘削後状況（北西より）



3. 6号墳横穴式石室内中世面検出状況（北東より）



1. 6号墳横穴式石室内瓦質土器出土状況（北東より）



2. 6号墳横穴式石室内墓道部中世堆積土状況（東より）



3. 6号墳横穴式石室内畔断面（北東より）



1. 6号墳横穴式石室内敷石状況（南西より）



2. 6号墳横穴式石室内玄室部敷石状況（西より）



3. 6号墳横穴式石室内石棺片出土状況（西より）



1. 6号墳横穴式石室内墓道部敷石状況－部分（東より）



2. 6号墳横穴式石室内墓道部敷石状況－部分（東より）



3. 6号墳横穴式石室内敷石状況（南西より）



1. 6号墳完掘状況（南西より）



2. 6号墳横穴式石室完掘状況（南西より）



3. 6号墳墳丘外北東部断面（西より）



1. 6号墳横穴式石室完掘状況（北東より）



2. 6号墳完掘状況（南西より）



3. 6号墳断ち割り断面（南西より）



1. 7・10号墳調査前状況（南より）



2. 7・10号墳機械掘削後状況（南より）



3. 7号墳確認調査後状況（南より）



1. 7・10号墳敷石時完掘状況（南より）



2. 7・10号墳断ち割り断面（南より）



3. 7号墳横穴式石室内中世面検出状況（南より）



1. 7号墳墓坑内断面（北より）



2. 7号墳横穴式石室内敷石擾乱時状況（南より）



3. 7号墳横穴式石室内敷石時完掘状況（南より）



1. 7号墳横穴式石室内敷石断面（南より）



2. 7号墳横穴式石室完掘状況（南より）



3. 7号墳横穴割り断面（南より）



1. 10号墳横穴式石室内中世面検出状況（北より）



2. 10号墳墓坑内断面（北より）



3. 10号墳横穴式石室内敷石時完掘状況（南より）



1. 10号墳横穴式石室内敷石時完掘状況（南より）



2. 10号墳横穴式石室内耳環出土状況（西より）



3. 10号墳横穴式石室内馬具出土状況（東より）



1. 10号墳横穴式石室内敷石断面（南より）



2. 10号墳横穴式石室完掘状況（南より）



3. 10号墳断ち割り断面（南より）



1. 10号墳横穴式石室完掘状況（南より）



2. 10号墳横穴式石室左側壁据え付け状況（西より）



3. 10号墳横穴式石室両側壁石合体状況（北西より）



1. 8号墳確認調査後状況（南西より）



2. 8号墳完掘状況（東より）



3. 8号墳完掘状況（南西より）



1. 8号墳墓坑内断面（西より）



2. 8号墳断ち切り断面（南西より）



3. 8・9号墳間遺構完掘状況（東より）



1. SK II・III断面（南より）



2. SK II土器出土状況（西より）



3. SK II完掘状況（南より）



1. 9号墳確認調査後状況（南西より）



2. 9号墳石室および土器出土状況（北東より）



3. 9号墳石室および土器出土状況（北東より）



1. 9号墳石室内木棺跡断面（北東より）



2. 9号墳完掘状況（南西より）



3. 竪穴式住居床面検出状況（南西より）



1. 壇穴式住居内 SD 2 断面（東より）



2. 壇穴式住居完掘状況（南東より）



3. 壇穴式住居完掘状況（北より）

16



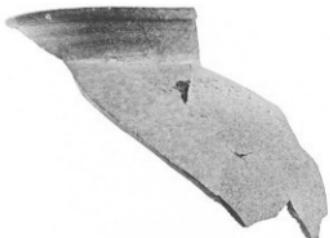
1



14



2



9



2



3



10

3号墳出土須恵器 豆・甌・高杯・壺・杯身



7



7'



7"



15



18



17



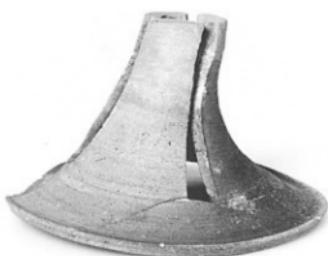
19

3号墳出土須恵器 提瓶・壺、土師器・杯・椀

圖版
33
遺物



11'



28



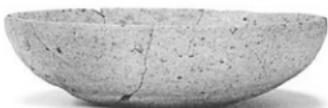
11



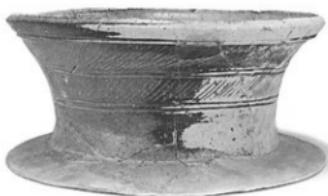
31



51



40



44

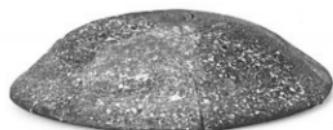


40'



47

3号墳鏡道出土須恵器 平瓶、5号墳墓坑出土須恵器 高杯・短頸壺、周濠出土須恵器 壺、土師器 壺、SK I出土土師器 小皿



63



61



64



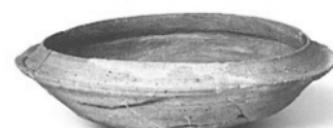
65



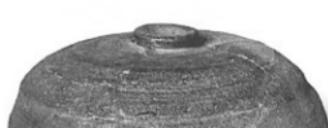
62



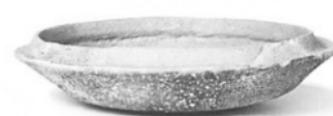
66



74



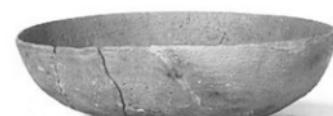
67



78



113



55



83



94

6号墳玄室出土土師器 杯、攪乱層出土須恵器 壺蓋・杯蓋・杯身・脚部、土師器 杯



99



100



92



89



111



300



281

6号墳複層出土須恵器 脚部・壺・台付壺・器台、SK II出土土師器 小皿、SK II出土土師器 壺



274



311



276



275



283



284



286



316



292



282



316



287



323

SK II出土土師器 小皿、8号墳擾乱層出土土師器 小皿、瓦器 桶、10号墳擾乱層出土須恵器 杯蓋



320



325



322



324



321



167



326



168



174



189



169

9号墳石室出土須恵器 杯身・杯蓋・甌、10号墳石室出土須恵器 壺蓋・甌・脚部、前庭部出土須恵器 壺、
搅乱層出土須恵器 高杯



171'



203



171



184



175



185



236



200

10号墳石室出土土師器　杯、前庭部出土須恵器　壺、擾乱層出土須恵器　壺・台付壺・脚部・壺蓋、
土師器　壺



170



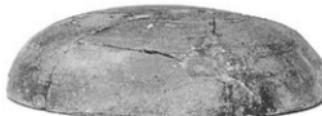
186



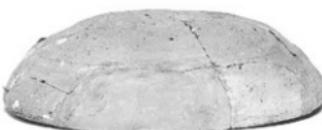
172



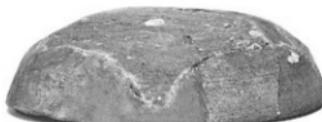
186'



215



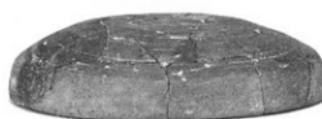
204



208



205



217



211

10号墳石室出土須恵器 高杯、土師器 鉢、攪乱層出土須恵器 台付壺・杯蓋

圖版
40

遺物



219



223



230



233



225



20



140



139



141

10号墳擾乱層出土須恵器 杯身、3号墳出土鐵製品 鐵金具、6号墳出土鐵製品 馬具



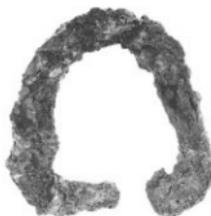
238

1. 10号墳出土鉄製品 馬具



138

2. 6号墳出土鉄製品 馬具



239



149



270

244



271

245



272

6号墳出土金銅製品 耳環、10号墳出土鉄製品 馬具・刀子・鎌・太刀、金銅製品 耳環



147



148



162



163

1. 6号墳出土鉄製品 鉤、7号墳出土鉄製品 鉤



246



247



248

2. 10号墳出土鉄製品 鉤



144



142



145



146



143

1. 6号墳出土鉄製品 馬具



243

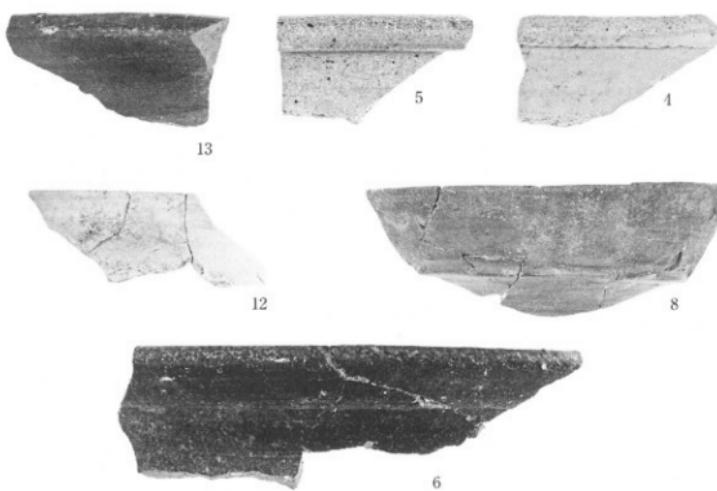


242

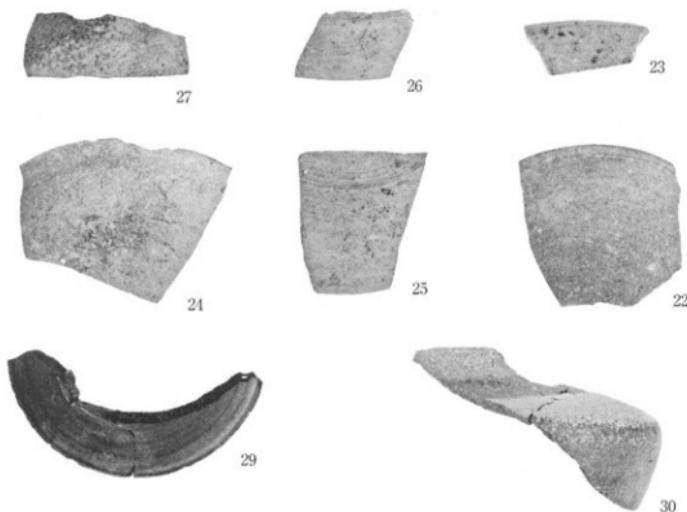


241

2. 10号墳出土鉄製品 鐵



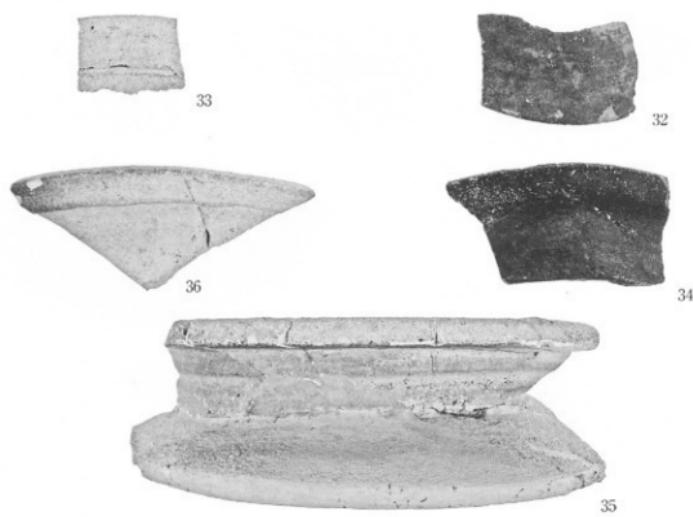
1. 3号墳出土須恵器 瓢・甌・壺



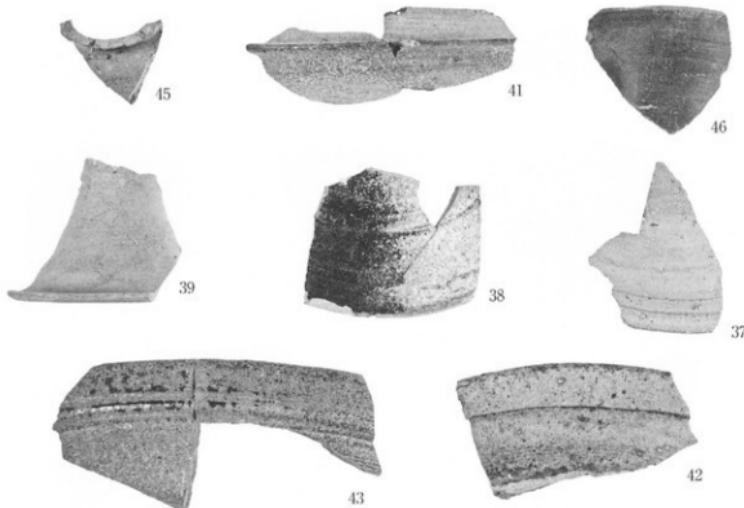
2. 5号墳出土須恵器 杯身・杯蓋・脚部・短頸甌

図版
46

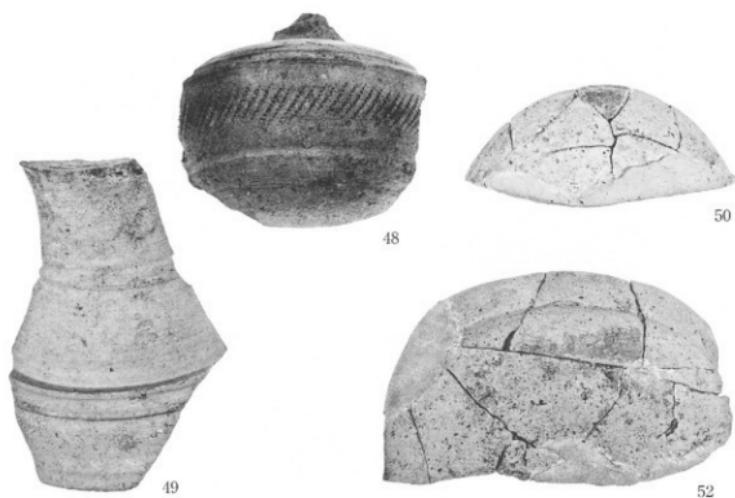
遺物



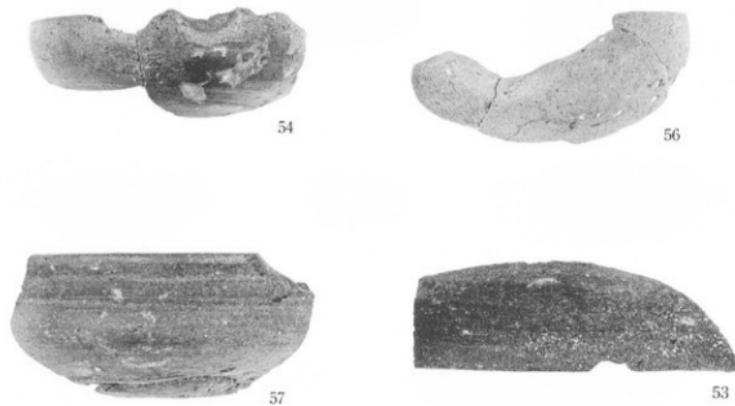
1. 5号墳墳丘出土須恵器 脚部・底・壳



2. 5号墳周濠出土須恵器 脚部・杯身・壳・壺



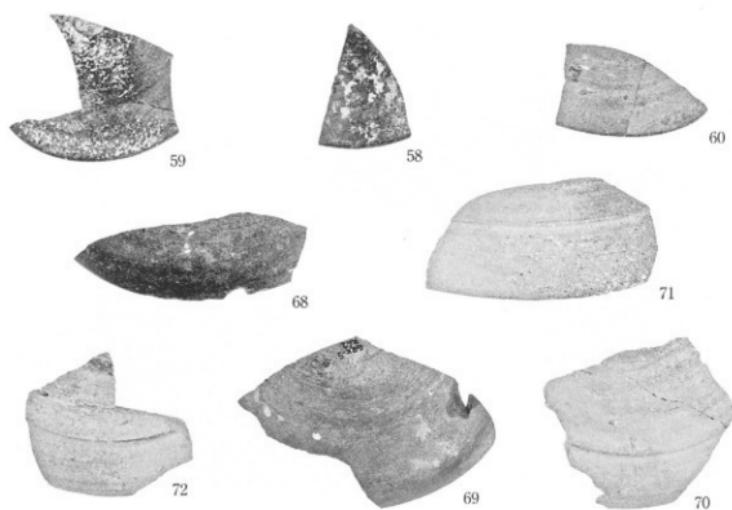
1. SK 8出土須恵器 遺・脚部、SK I出土土師器 小皿・大皿



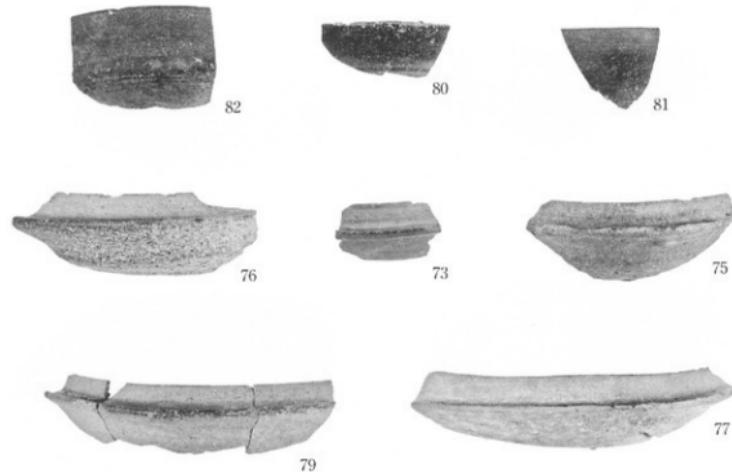
2. 6号墳玄室出土須恵器 杯蓋・杯身、土師器 杯

図版
48

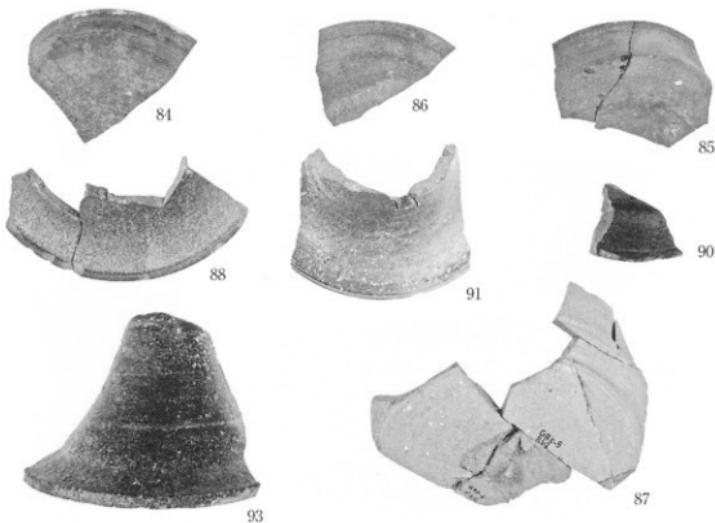
遺物



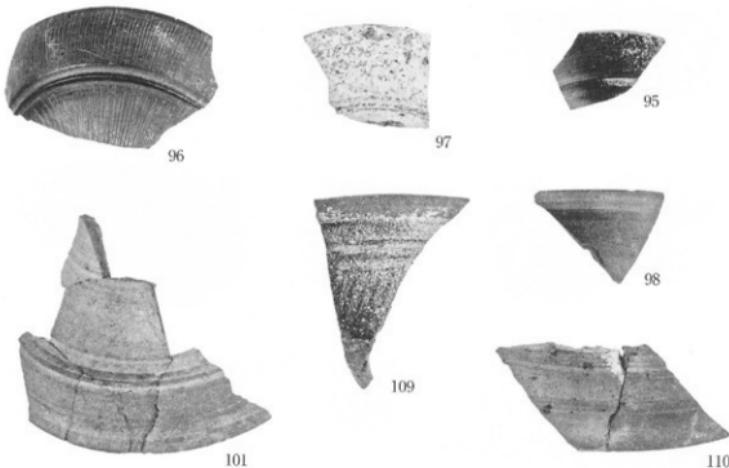
1. 6号墳撲乱層出土須恵器 壺蓋・杯蓋



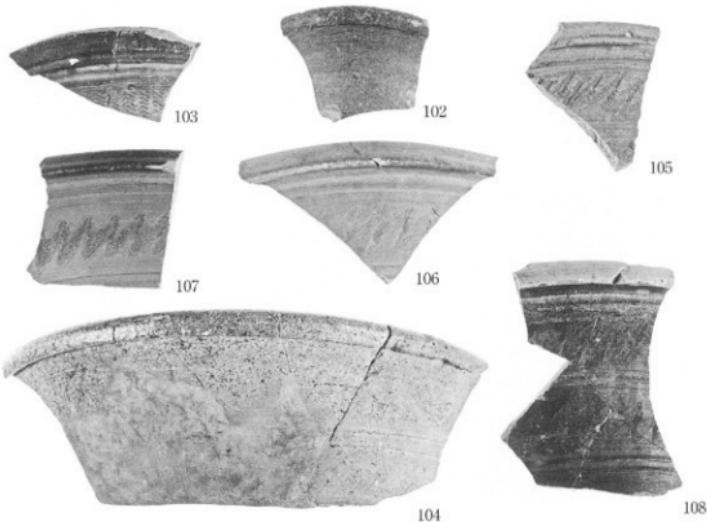
2. 6号墳撲乱層出土須恵器 杯身



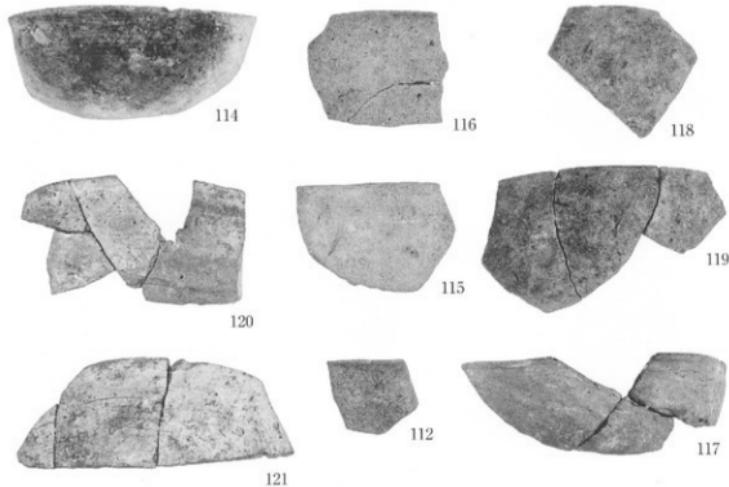
1. 6号墳擾乱層出土須恵器 杯身・高杯・脚部



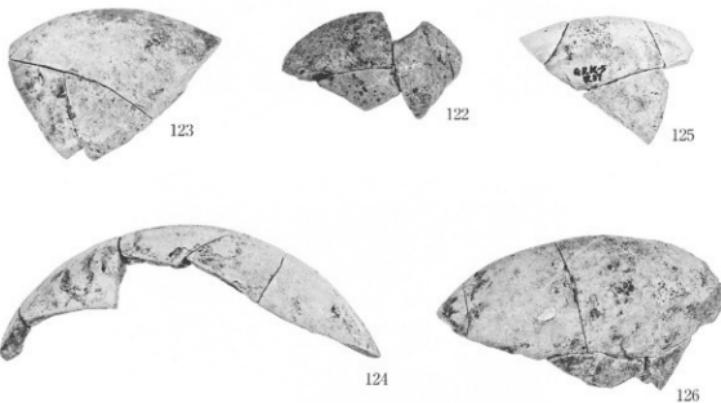
2. 6号墳擾乱層出土須恵器 鏟・壺・脚部・器台



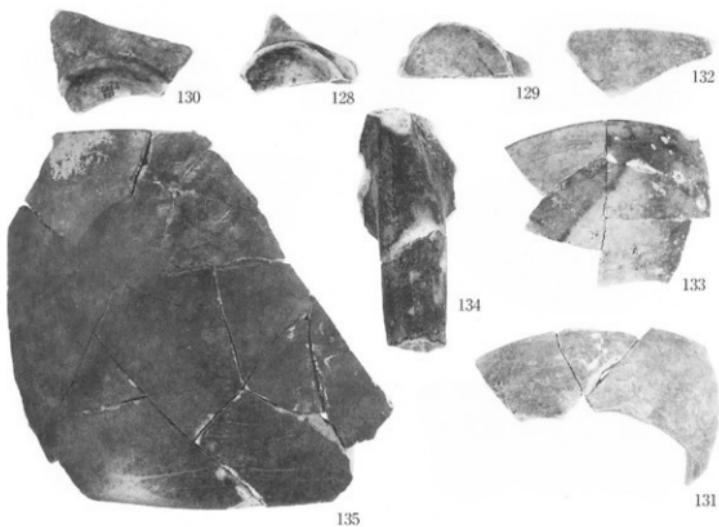
1. 6号墳攪乱層出土須恵器 壺



2. 6号墳攪乱層出土土師器 杯



1. 6号墳出土上部器皿



2. 6号墳出土瓦器 梱・羽釜・火舍



136



137



127

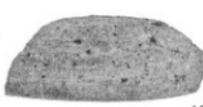
1. 6号墳撲乱層出土土師器 羽釜、弥生土器 底部



161



157



156



159



158

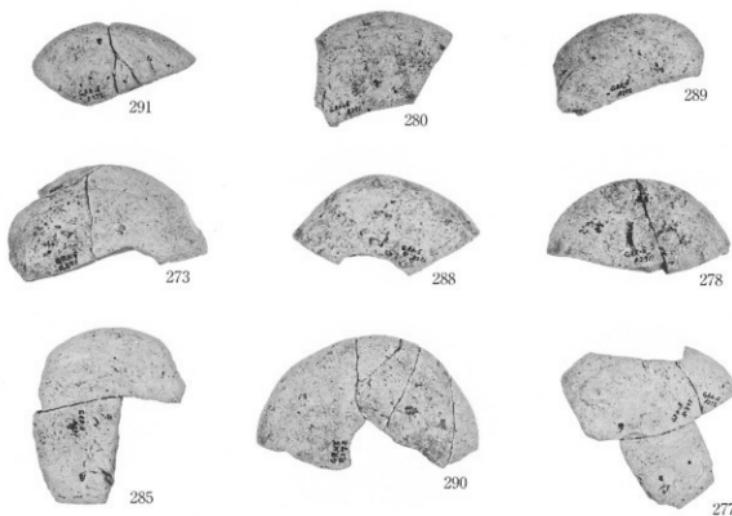


160

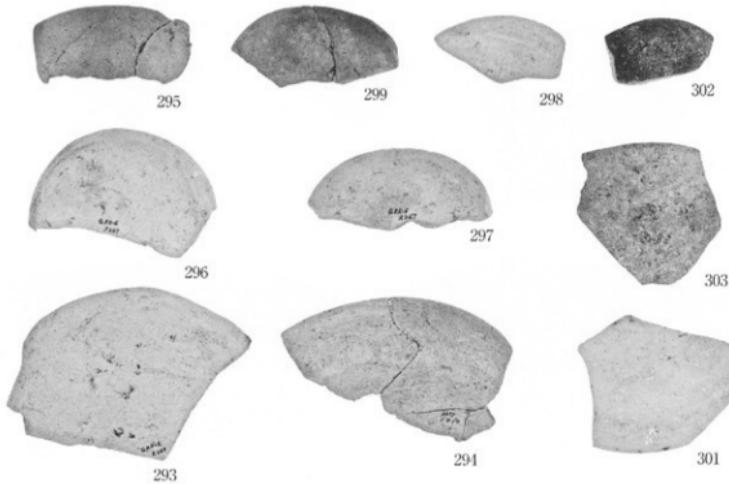


155

2. 7号墳撲乱層出土須恵器 鏟・杯蓋・壺、土師器 杯・壺



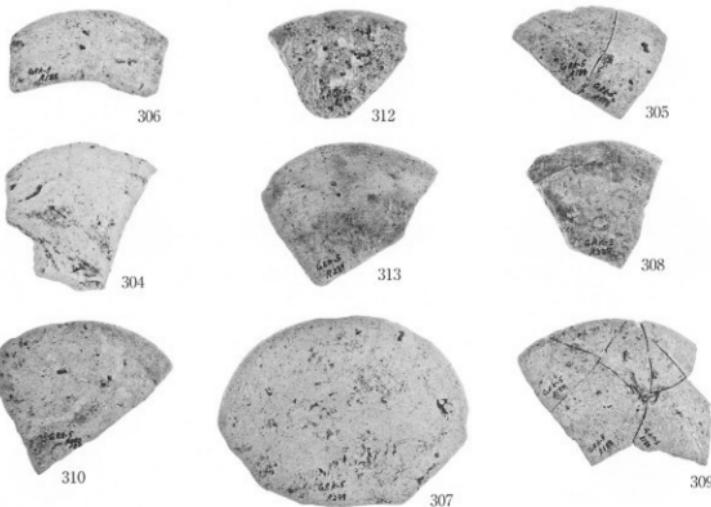
1. SK II 出土土師器 小皿



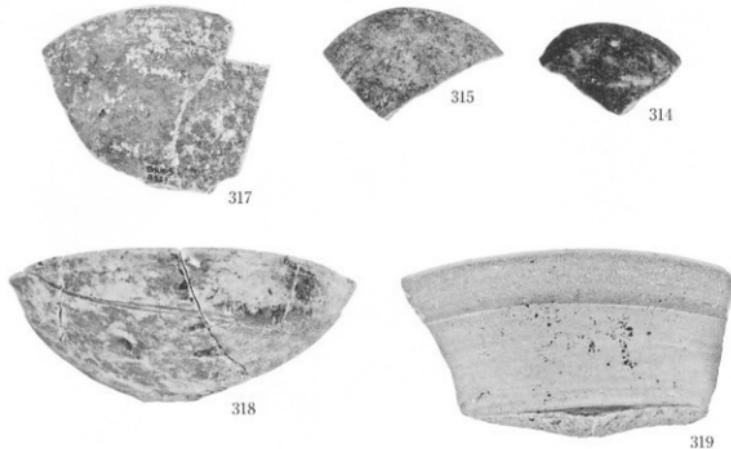
2. SK II 出土土師器 大皿・小皿、須恵器 杯蓋、瓦器 小皿・椀

図版
54

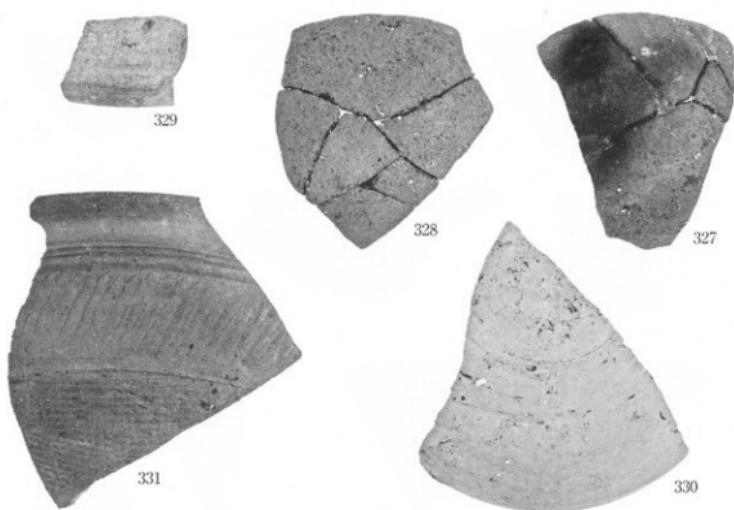
遺物



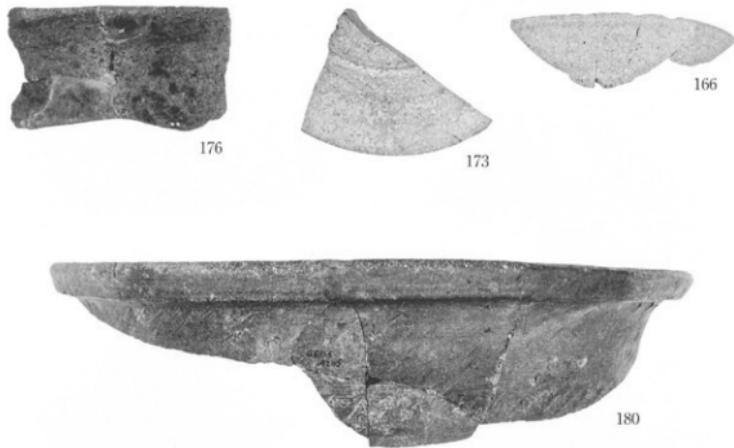
1. 8号墳周辺攪乱層出土土器 小皿



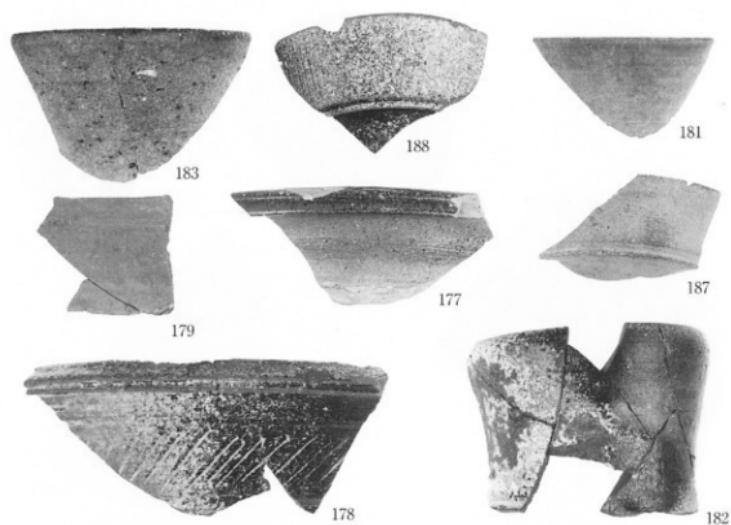
2. 8号墳周辺攪乱層出土瓦器 小皿・椀、須恵器 瓢



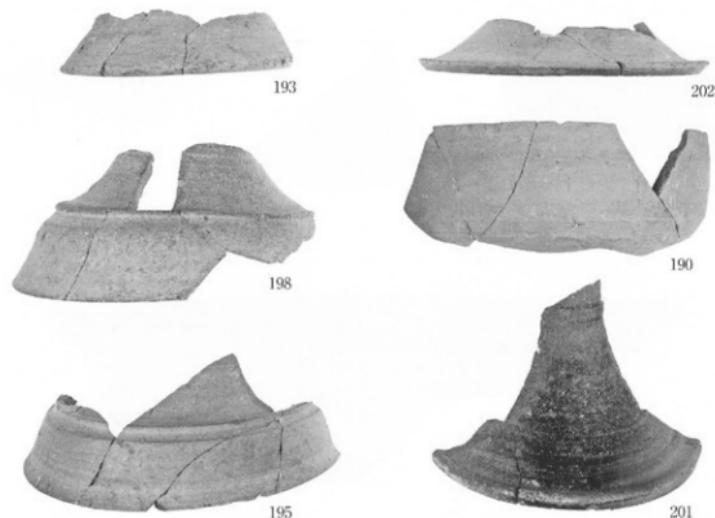
1. 9号墳石室出土土師器 杯・椀、攪乱層出土須恵器 杯蓋・器台



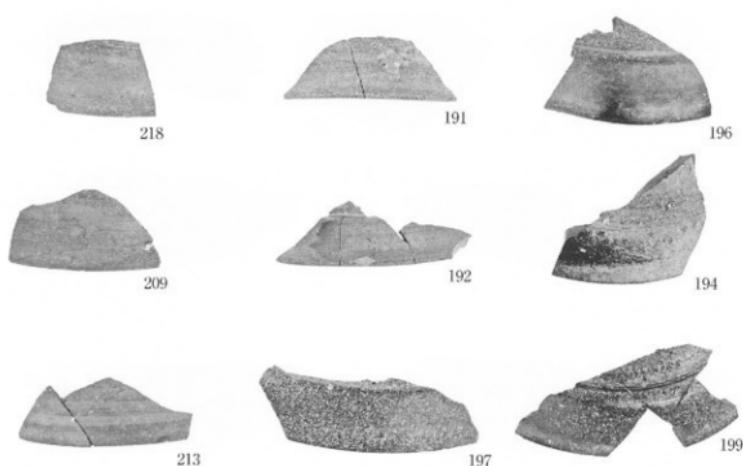
2. 10号墳石室出土須恵器 杯身、前庭部出土須恵器 脚部、土師器 壺、攪乱層出土須恵器 器台



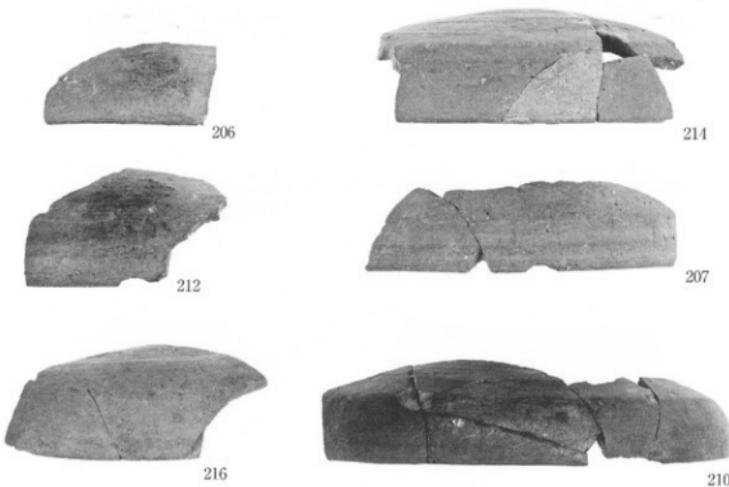
1. 10号墳撿乱層出土須恵器 麢・器台・壺・甌



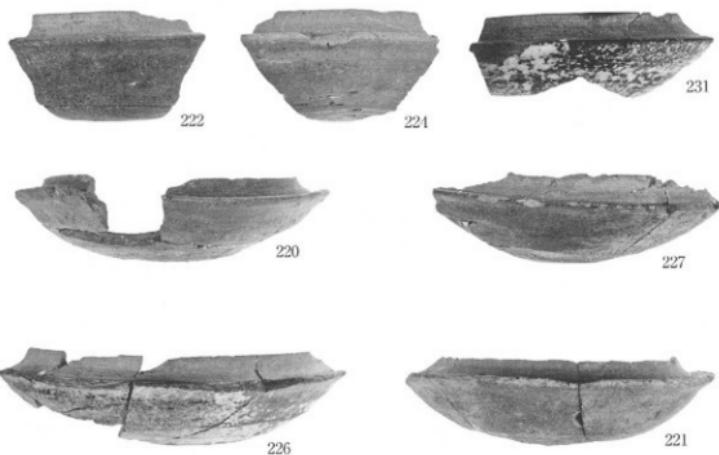
2. 10号墳撿乱層出土須恵器 高杯・脚部



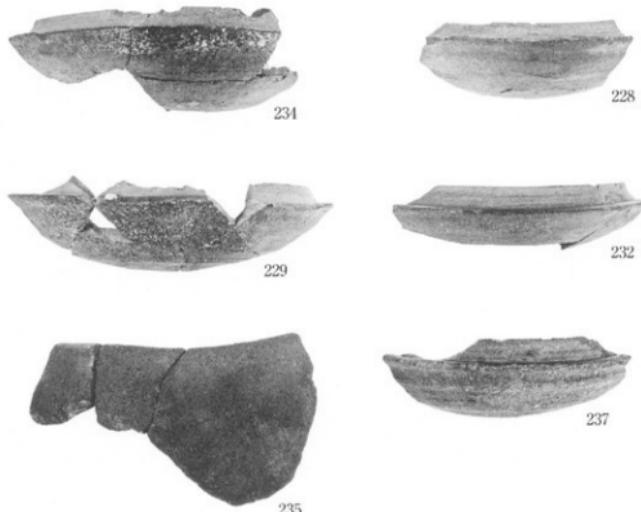
1. 10号墳攪乱層出土須恵器 脚部・杯蓋



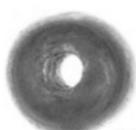
2. 10号墳攪乱層出土須恵器 杯蓋



1. 10号墳撿乱層出土須恵器 杯身



2. 10号墳撿乱層出土須恵器 杯身、土師器 鉢、10号墳周辺出土土器須恵器 杯



258



269



268



257



253



256



252



254

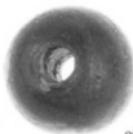


255



251

1. 10号墳出土玉類（表）



258'



269'



268'



257'



253'



256'



252'



254'



255'



251'

2. 10号墳出土玉類（裏）



261



260



259



264



266



262



265



267



263

1. 10号墳出土玉類（表）



261'



260'



259'



264'



266'



262'



265'



267'

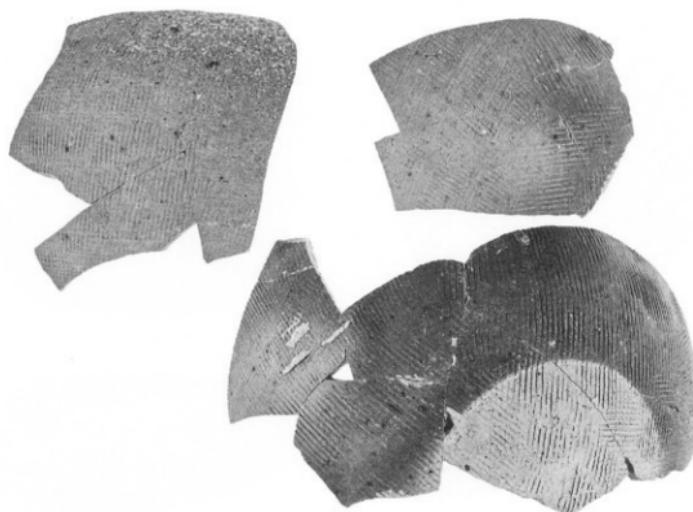


263'

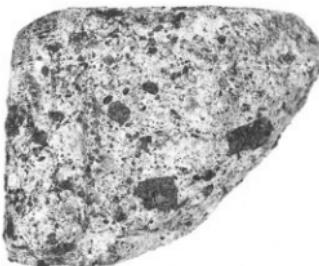
2. 10号墳出土玉類（裏）



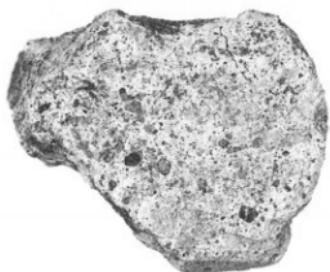
1. 5号墳埴丘上土器群2・3出土須恵器　甕



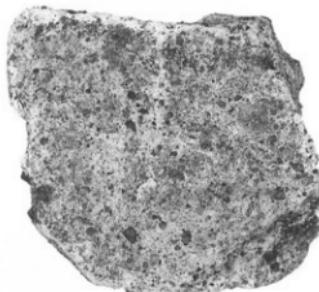
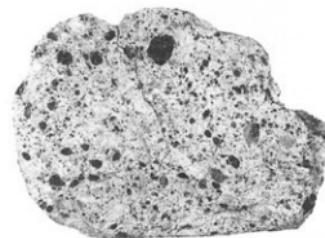
2. 5号墳埴丘上土器群5出土須恵器　甕



21



152

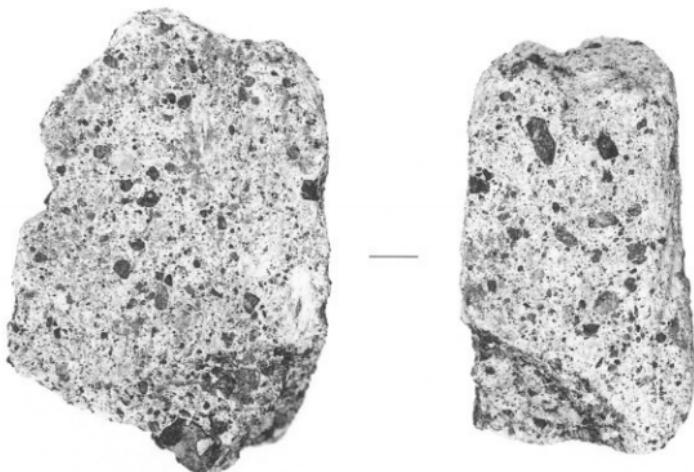


150

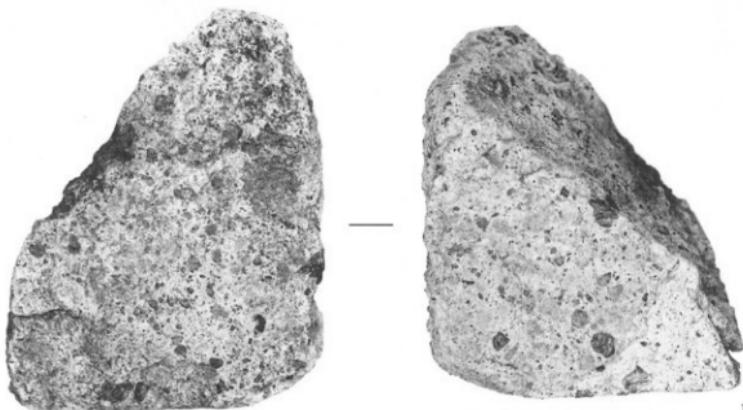
151

3号墳出土石製品 石棺、6号墳出土石製品 石棺

図版
63
遺物



153

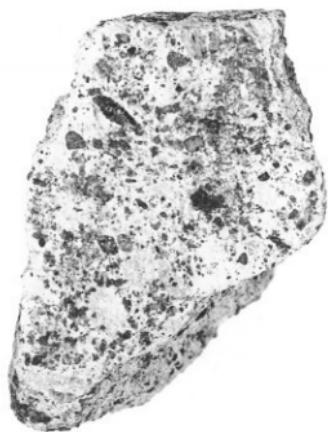


154

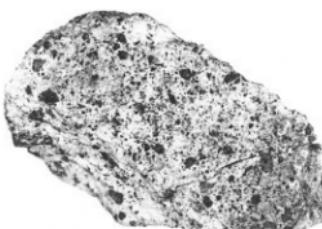


249

6号墳出土石製品 石棺、10号墳出土石製品 石棺



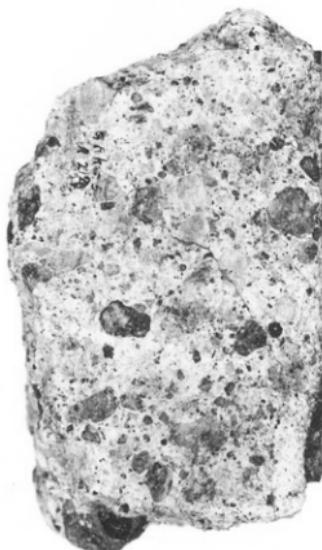
165



|



164



—



250

7号墳出土石製品 石槍、10号墳出土石製品 石槍

報告書抄録

ふりがな 書名	ごりやまこふんぐんだい5じはくつちょうさほうこく 五里山古墳群第5次発掘調査報告					
副書名						
卷次						
シリーズ名						
シリーズ番号						
編著者名	若松博恵・武田雄志					
編集機関	東大阪市教育委員会					
所在地	〒577-8521 大阪府東大阪市荒本北一丁目1番1号 TEL06-4309-3283					
発行機関	東大阪市教育委員会					
発行年月日	2009年3月31日					
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	市町村 コード	遺跡番号	調査期間	調査面積	調査原因
五里山古墳群	大阪府東大阪市 上四条町1170番1 上六万寺町1744番2 等	27227	76	平成20年 3月18日 ～ 平成20年 7月4日	1450m ²	区画整理 事業
種別	主な時代	主な構造	主な遺物	特記事項		
古墳群	弥生時代 ～鎌倉時代	古墳・竪穴式住居・ ピット・土杭	弥生土器・土師器・ 須恵器・馬具・鉄器・ 埴輪・瓦器・ 石製品			

《要約》

埋没していた古墳時代後期の横穴式石室をもつ古墳6基と周知の3号墳羨道部周辺を発掘調査した。11基の古墳は尾根から土石流段丘上に構築されていること、石室内の敷石の多くは追葬時に設けられたものが多いこと、古墳は3号墳から東と西へ順次構築されていったことが判明した。

五里山古墳群第5次発掘調査報告

平成21年3月31日

発行 東大阪市教育委員会
印刷 株式会社ミラテック

